

『ふん。かぶとだか、根太だか知らんが、わしに果し状を送りつけたり、しやらくさいことをしやがるよ。あれで、水戸浪士だから何とも恐れ入るよ。——しかし、勝先生には御厄介をおかけしたな。』

『乾十郎は、涙を流して感謝してゐますからいゝでせう。』

伊達は、かういつて、仲間の動靜についての報告をした。

水戸浪士の宛宗助なるものが、勝を誤解して刺さうと考へ、かねて、龍馬一黨に近づきのある大和五條の志士の乾十郎にうちあけた。ところが、乾が内應する恐れを感じるやうになり、佐藤興之助といふ大阪勝塾の重要な一人の名を騙つて、難波新地の宿から乾を安治川口の方へおびき出し、危害を加へようとするところを探知した伊達小次郎の知らせにより龍馬等が救つた。そして、乾は西町奉行の松平大隅守に身柄を檢束されたのである。

一方、宛宗助は邪魔だてした龍馬を遺恨に思ひ決闘状を送つて來たので、龍馬は快諾し天王寺境内に於て果し合ひをすることになつたが、その報告をうけた勝麟太郎は、非常に心配して早速、小笠原圖書頭にも相談し、松平大隅守にいひつけて、宛宗助をとらへ説諭を加へて、やつと無事なるを得たのであつた。だから、宛が、それを根にもつてゐるのは、さもありさうなことである。

ある。

伊達小次郎は、その五條の儒家森田節齋の門弟でもあり、家郷を捨て、勤王の志士と交り、總髮で菊水の紋をつけ今由井正雪と諱名されてゐる乾十郎とは親しかつたので、その救出には一役買つて出て随分働いたのだから大いに安堵したわけであつたが、最後に、龍馬が宛からの決闘の申込みをうけて快諾した心持が、まだ合點が行かないでゐたのである。

その前に、勝の門生になつた土州人の廣井岩之助なるものが、父の仇を探して多年苦勞してゐたところ、紀州の領内の加太砲臺工事にもぐりこみ、土工になつてゐることが分り、龍馬は、勝にも語り新宮馬之助を紀藩へやり、仇である江戸松兵衛と變名してゐた棚橋三郎を領外に追はせ國境に於て龍馬等が立合ひ、數多の見物人の前で首尾よく本望を遂げさせたことがあつた。それやこれやで、龍馬の俠骨、勇氣、洪量、膽略等々は、知りぬいてゐる伊達小次郎であるが、矢張りちかちかに心境をきいて見たかつた。

『しかし……』

と、いひかけて伊達は、ちよつとためらつたが、

『その時、先生は本當に宛の相手になつてやるつもりだつたのですか。』

と、腑に落ちなげに訊いた。

『君ならどうする？ 逃げるか、足が早いから……。ハハハ……。』

龍馬は、からかつた。伊達は、劍技を得意としないので、萬一危急の時は逃げる稽古だといって江戸にゐた時は、淺草あたりの群集の中をかけ廻つて練習をしたといふことが一つ話になつてゐたからである。

『いや、僕なら、説得してやります。』

伊達は、昂然としていつた。

『わしもさうぢやな。』

『ぢや、どうしてあの時に……。？』

『折角、三日三晩も寝ずに思案して決心したことであらうと思ふと、不憫になつたからよ。それに、果し状をうけるのは武士の禮儀ぢや。偶には天王寺あたりへ散策がてら行つて見るのも一興だと思つたしね。』

『……坂本龍馬先生は、隨分人を食つてゐますね。感服いたしました。』

伊達は、へらず口をたゞいた。

『そりや、君より年が上だけにな。いや、年の割には、君の方が人を食つてゐるかも知れんよ。ハハハ……。』

龍馬は、急に調子を變へ、

『しかし、勝先生や、わしらを誤解し、仇敵視してゐるのは、豈、兜輩のみならんやだぞ。天下にみち／＼てゐると思ふがいゝな。わが、容堂公にしても、島津侯にしても、どう思つてゐるか腹中は分らん。いゝ機會ぢやから、一つ勝先生のことを話してやるが、この正月江戸城の大廣間で、勝先生はな、大膽にも將軍職自退の儀について進言されたさうぢや。又、京都では桂小五郎に會つて、日本はもう藩だの幕府だのいつて割據してゐるやうな時勢ぢやない。一つのかたまりになつてやらんことには持ちこたへられんと語られたさうぢや。頭腦が進み過ぎてゐるのだよ。かういふ人は、時には、兩方から睨まれるんだ。討幕派からも、佐幕派からもぢや。君も、親の仇の紀州藩政府に復讐をするんだとよくいきまいてゐたが、そんなちつぽけな料簡はすてゝくれよ。さうでないと海軍操練所の仕事なんかもやつて行けんぞ。』

と、珍らしく諄々として説法をする。

旋毛曲りで、どんなことにも一と理窟こねんと承知の出来ぬ伊達も頭を垂れて神妙に聽いて

ゐた。

そこへ、慌しく高松太郎が二三の僚友と這入つて來た。

『をぢさん！ 清河八郎が江戸赤羽で殺されたさうです。四月二十二日ださうですから、ついでこの間のことです。』

高松は、息を弾ませながらいつた。

『先生！ 清河氏は、新徴組に加擔した裏切者ぢやありませんか。』

一人が、聲高にいつた。

『やられたか。わしは、親しくないからよく分らんが、恐らく攘夷黨である爲に幕府から睨まれたものと察する。以前に過つて町人を斬つた爲に逃げかくれしてゐたといふが、矢張、そんなことをするといふことはないな。しかし、惜しむべき人物だつたらう。——まだくこれからどんなことが起るか知れんが、諸君は氣を散らさずに、しつかりやつてくれよ。』

龍馬は、頭目らしく一同を戒めて、

『おい、太郎、わしは、久しぶりで國の姉に手紙を書いたよ。お前のことも、よく書いておいてやつたぞ。』

と、手紙を見せながらいつた。

『さうですか。あり難う！』

高松は、につこりして頭を下げた。

お龍の弟の太一郎が、ひよつこり訪ねて來た。まるで、見違へるやうな生氣のある青年にかへり、甲斐々々しい旅装束に一刀ぐつと腰にさしてゐる。立派な若衆ぶりだ。

『おい、よく來られた。さア、上つて貰はうか。』

龍馬は、歡び迎へて愛想よくいつた。

『もつと早く參るつもりでしたが、少し家がごたくしてゐたもんですから……』

太一郎は、言葉もしつかりして來た。

こゝは、生田の森に近く新しく設立せられた神戸海軍操練所に屬する諸生寮で、龍馬は、さつき海近い操練所からかへつたばかりで、洋服のやうなものを着てゐた。その姿が、太一郎には、先づ異様に映つた。海の眺めのある高みで、近くには青々とのびた麥畑などもあるところだが、

どこからとなく騒音が聞え如何にも新興の氣運にみちた雰圍氣が、京都などでは見られぬ感じであつた。

龍馬について上ると、そこは椅子や卓子のある一室で、壁間には大きな地圖がかゝつて居り、陣笠や、刀劍なども亂雑におかれてゐる。龍馬は、太一郎に椅子をすゝめ、自分もゆつたりとか

け、
『わしは、越前の福井へ行つたから、そのかへりには是非、京都で訪ねようと思つてゐたんだがどうも忙しくつてね。それにこちらの仕事の用件で行つたので早くかへらなければならず……』
龍馬は、いひわけをして、

『福井の殿様へ無心に行つたのよ。それは、まア成功して五千兩だけ、操練所へ寄附して貰ふことになつたが、あんたの方は、その後どうかな。』
と、問はず語りにいつた。

『姉からの手紙にも書いてあるでせうが、妹二人は首尾よくつれかへりました。それで、伏見の方へ仰せの通り移ることにいたします。』

太一郎は、お龍の手紙を渡しながらいつた。

『さうか、それはよかつた。太一郎君とおとみさんのことは、勝先生にもよろしくたのんであるから、それで萬事解決ぢやないか。』

『は、何から何まであり難うございました。』

『や、や、こりや、どうも……』

龍馬は、手紙を披いて讀んでゆくうちに驚きの聲を發し、

『お龍さんは、大變な働きをやつたね。しかし、よく無事につれ出されたもんだな。』

『は、姉は決死の覺悟だつたと申してゐました。』

『さうだらう。さすがお龍さんぢや。よくやつた。しかし、危ふいところだつたな。』

先に、悪漢の口車にのせられてつれて行かれた上のおとみは大阪の遊廓に賣られ、下の君江は島原で舞妓になつてゐたのである。それをお龍は、先づ、君江をひきとり、次ぎには衣類を賣つて旅費をつくり懐劍をしのばせて大阪に下り殺すか殺されるかの騒ぎを演じて、とうとうおとみをも奪ひ返したといふことが、詳しく認められてゐるのであつた。

『しかし、姉もその爲に二三日は寢込みました。』

『さうであらうとも！ 男でも出来ぬことをやつてのけたんだからな。借金はどうなつたのか

な。金をかへしてやらんと、身柄をわたしてくれん筈だが、證文にでもしたのかな。』

『いえ、金のことをいはれると、大切な娘を傷いためたんだから、元の身體にして返せば金も何とかするが、それでなければ一文だてつ應じないと啖呵をきつたと申して居りました。』

『ほほう、いよ／＼懐いな。太一郎君も一つ姉さんに負けぬやうにやらんといかん。』

龍馬は、女の一心の恐ろしさといふよりも、お龍そのものゝ氣性が、これ程までとは考へてゐなかつたので、ほと／＼感心してしまつた。

太一郎は、五月二十日の夜、朝平門外で國事參政姉小路公知卿が何者にか暗殺され、その下手人が薩摩の田中新兵衛に嫌疑がかゝつたことなどを語り、京都の騒ぎを具さに報告した。京都では、攘夷祈願の御催ふしがあり、攘夷期限のとり定めもあつたが、即行派と不可能派のいがみ合ひの結果、三條實美と毛利慶親派が勝ちを制し、天皇御親征説まで擡頭してゐる折柄將軍家茂も大勢抗しがたく、この十日には外國人の内地滯留をも拒絶するとの發問に及んだとさへ傳へられてゐるのである。

龍馬は、太一郎を一旦京都へかへし、早く一家が伏見に移るやう取り計らはせることにした。で、逐一、太一郎にいひ含めたが、

『直ぐそこに『三茂』といふ一杯屋があつて、よく行くんぢやが、あんたには酒よりも操練所を見せた方がいゝぢやらうな。』

と、新しい海岸の建物を指しながらいつた。

『は、ありがたう。でも、一旦かへることにいたします、おそくならんうちに發足したいと存じます。』

『さうか。それも一理あるな。あすここに、ちらと見える船、あれは黒龍丸ぢやが、大阪へ行く時だつたら、乗せてあげるのだつたがね。しかし、何か便船があるかも知れん。』

『何とかありません。まだ、早いですから。辨當も十分用意して参りました。』

『ぢや、丁度、九ツ時だから、『三茂』へ寄つて飯をすまして行きなさい。』

龍馬は、太一郎を連れ出して、暫らく生田浦一帯をぶら／＼と歩きながら海軍操練所の大規模な計畫を語つてきかせた。今年四月に將軍家茂を奉じて勝麟太郎がこゝに上陸し、敷地を決定したことから、二十四日には、海軍所造艦所取建御用並攝海防禦向御用として、津田近江守、松平大隅守、それから勝の三名に任命があり、大名格の肥田濱五郎は頭取に、塾頭は龍馬が擧げられ、教授には大阪の勝塾々頭の佐藤與之助や、赤松左京、西川寸志郎などが任ぜられ、船は黒龍

丸の他に觀光丸があつて乗組員も定り運用術の練習艦となつた。それに、大阪船手組一切を所管し、長崎造船所や鷹取山炭坑をも所屬させ、まるで、兵學校、機關學校、造船所を兼ねたやうなものが出来るのである。

『だから、最初は、總督を朝廷に御任選を願ふことにして、攘夷監察使をしてゐられる四條隆詞卿に入説しようとしたが果さなかつたのだ。直ぐ塾生は二百名になるだらうが、これは西國諸藩だけなんだ。勝先生は、東國には、又別につくられる考へらしい。五六百人の青年がこゝへ集つて来て、大いに海軍を興すことになる、その壯觀思ふべしぢやないか。』

龍馬は、愉快さうに語つた。

太一郎は、洋風擬ひの堂々たる操練所の建て物や、立ち働く人の群れを眺めながら、全身の血が湧きたつのを覚えるのであつた。

雨 瀟 々

突忽として、京都には大異變が起つた。文久三年八月十八日の容易ならざる政變の暴風である。天皇御親征、大和行幸は尊攘派のたくさんだ僞勅なりとし、中川宮擁立の策謀となつて一夜のう

ちに朝議はひつくりかへり、京都の實權は、會津と薩摩に歸し、さしもに勢ひ旺んであつた長州派は、一朝にして、御所の警備を免ぜられ、七卿を奉じて、悄然として都落ちをしなければならぬ運命に陥つたのである。

攘夷の魁けとなつて討幕の義旗を南山に翻へさんとし、既に、大和五條に暴發した中山忠光卿を奉ずる志士たちの運命はどうなるであらう？ これには、吉村虎太郎や、那須信吾その他土州士が加盟してゐたのである。

かつての龍馬の同志である平井收二郎、間崎哲馬、弘瀬健太等は、中川宮の令旨を盾にとつて藩政改革を企てようとした廉によつて斷罪の上、切腹を命ぜられて、最早、この世の人でなく、土佐勤王黨は、まだ武市半平太健在なりといへ、今度の政變による影響は逆踏すべからざるものがあつた。

神戸海軍操練所には、各藩の子弟があるので、それに興へた激動も大きく、警報が達すると、いち早く脱走した長州の士もあり、今にも七卿を奉ずる長州勢二千人がこゝを通過するので、それに合流せんと企つるものも相當出さうな形勢であつた。

これこそ、全くの晴天の霹靂である。西では攘夷期限の五月十日以來長州派が下關通過の外國

船に向つて容赦なく砲撃を加へて事端を醸さんとしてゐる。さういふ風雲の外にあつて、只管海軍建設に努力してゐる龍馬も、さすがに自分の立ち場を顧み、『これでいゝのであらうか。』と反省して頭を傾げないわけには行かなかつた。

しかし、『いや〜！』と、龍馬は、頭を掉つた。自分に與へられた使命の至高至大なものであることが痛感されたからである。そして、塾生の動搖を防止し、鎮撫することに大重になつたのである。

『……都落ちの一隊には、桂や、久坂や、眞木の諸君がある筈だ。いや、國の土方楠左衛門だつて三條卿に従つてゐるに違ひない。中岡も多分——事によつては、彼等に會つて、眞相を質し、善處もしたいし、又進言もすべきだらう。』

龍馬は、窃かにかう考へたが、さすがに仕事も手につかなかつた。

近藤長次郎、新宮馬之助、澤村總之丞、望月龜彌太、高松太郎、それに伊達小次郎のやうな連中は龍馬を圍んで日夜激論を闘はし、わが黨は如何にすべきかにつき喧騒を極めた。そして、東の空ばかり眺めてゐる。

三宮神社の東隣にある小料理三茂は、これらが常連の家であるが、そこに御輿を据えて自棄か、

興奮か、慷慨からか酒をあびるやうに呑んで怒鳴りちらしてゐる手合もあるのであつた。……

十九日の未明、暗い空から雨がしよぼ〜と降つてゐて、むん〜とするやうな蒸暑さであつた。こゝに平家の西海落ちを思ひ起させるやうな悲壯な旅立ちには、三條西、三條、東久世、壬生、澤、四條、錦小路の七卿を初め、これに従ふ二千名の長州勢と草莽の尊攘家たちであつた。

昨日に變るうらぶれの姿、七卿とても蓑笠に身をかためての徒歩であり、従士たちは羽織袴であつたが中には火事羽織もあつた。見るからに痛ましくも哀しい光景である。

しかし、護衛の前軍後軍は一絲亂れぬ統制を保ち互ひに他日の報復を期する決意をきり〜と結んだ口許や、陣笠や、笠の廂のかけに光る眼に見せて、提灯のあかりで路を照らしながら、肅々として京都を出でたち伏見街道を落ちて行くのであつた。

三條實美卿の奥方は懐劍をしのばせお供の女六七人と警護の従士を従へて一同が集つてゐた妙心院へと馳せつけたが、既に出發の後であつたことなど涙の種であつた。

名残りを惜しんで、われを忘れて、どこまでも見送つて行く人も可なりあつた。その中に加尾

子も交つてゐたのである。兄平井隈山の切腹以來、加尾子の心は尋常でなかつたせいかも知れないが、彼女は雨具の支度もないのにとぼ／＼と歩いて行くのである。

『お上は、徳川家の御恩／＼と仰せられますが、二千年の皇恩と、僅々二百年の私恩と、そのいづれを重しと思召されるのでござりますか。』と、いつた調子で、武市等と共に容堂公に詰め寄つたといふ兄の血は、加尾子の脈管にも流れてゐるのに違ひない。

『……三條卿まで、あの荒草鞋で、紐には紙も、おまきなさらす、誰ぞ、氣のつくものはなかつたのか知ら？』

加尾子は、憤りと悲しさに涙を吞んだ。

一行が伏見についたのはすつかりあけはなれた朝であつたが、そこで七卿には救勘の身なれば恐れ多いとあつて、衣冠、奴袴を變へ、頭髮も武士風の茶せんに、割羽織、野袴といふ扮装に變つたのである。

今は、龍馬の世話で寺田屋の養女お春といふことになつてゐるお龍も、俄かの出來事に氣も動轉する程びつくりしたが、娘たちは役に立たぬので女將おとせを助けてぬかりなく興奮の中に立ち働いてゐた。しかし、寺田屋は、薩摩の船宿であるから、長州派にはよく思はれなかつたに違

ひない。薩摩や、會津の悪口が、ちよい／＼耳に入ると、お龍は、『何をツ！』と、いはんばかりに白眼で、その方を睨めつけたい氣持にもなつた。

とうとう終ひには、お龍も外へ飛び出して群集の中に交つたが、『薩摩の悪口なんかどうでもいゝから、いつそ、このまゝ兵庫の坂本さんのところへ突つ走つてやらうか知ら？ この一行に食つゝいて行けばわけなく行かれるだらうに……』など、恨めしさうに空想に描くのであつた。

するうち、群集の中にちらと加尾子らしい女の姿を認めた。お龍は遠くから會釋を送つたが、先方ではいやに氣の立つた險しい顔をして睨みかへしたばかりであつた。『あの女も、坂本さんのところへ行くつもりなのぢやないか知ら？』と、思ふとつい忘れてゐた嫉妬の思ひが起り、旋風のやうに胸が騒いだ。お龍は、自分ながら、わけの分らぬ涙をぼろ／＼とこぼしながら家の中へと駈け込んでしまつたのであつた。

伏見から西へと陸路をとつて進んだ一行は、攝津芥川の宿に一泊、その翌くる日は、西宮の宿に一泊、さうして、二十四日には、いよ／＼兵庫へと向ふ段取りになる。

京都から、次第に遠さかるにつれて一同は如何にも旅人らしい寛やかさが心の中に生れて來た。久坂玄瑞のつくつた長歌を哀調を帯びた聲で歌ひながら道中するものさへ出て來た。それに

人々が合唱して一層悲壯を増すやうにもなつた。

世は刈菰と亂れつゝ

茜さす日もいと暗く

蟬の小川に霧立ちて

隔ての雲となりけり。

うら痛ましや靈きはる

大裡に朝夕殿居せし

實美朝臣、季知卿、

壬生、澤、四條、その外錦小路卿。

今浮草の定めなき

旅にしあれば駒さへも

進みかねてぞ嘶きつゝ

降りしく雨の絶え間なく

涙の袖に濡れ果てゝ

是より海山淺茅が原。

露霜分けてあしが散る

難波の浦にたく汐の

からき浮世はものかはと

行かんとすれば東山。

峰の秋風身に沁みて

朝な夕なに聞きなれし

妙法院の鐘の音も

なんと今宵は哀れなる。

いつしか暗き雲霧を

拂ひ盡して百敷の

都の月をし愛で給ふらん。

長蛇の如き行列の中からこの哀歌が起ると沿道に見送る人たちの中には感極つて嗚咽するものさへあつた。

兵庫に着くと七卿は湊川神社に参拜し祈願をこめた。偶々、中川宮から寄進の釣籠一對と、弓矢が一揃ひあつたのを発見した浮田七郎は即刻とり拂ひを命じた。浮田は御譜代の家臣であつたが、今度は宮御叛逆と信じ御諫言も用ゐられなかつたので、遂に七卿に従ふことに決心した忠誠一徹の士であつた。七卿連署の天下に宣すべき義兵を募るから心あるものは、長州に馳せ参ぜよとの檄文は熊本有志士官部鼎蔵に托され命令されたのである。

かくて、夜に入つてから下ノ關早船二十四隻、兵庫神戸の船十二隻に分乗して備後鞆の浦へとさして残らず船出することになつた。

龍馬は、ひそかに一行を海邊に見送つたが、その中の誰にも會はうとはしなかつた。

『……眞木の神智、桂の緻密、久坂の沈毅と揃つてゐて、どうして、あんなへまをやつたものかね。要するに、討幕攘夷黨が自己の勢力に眼が昏み、相手を見くびり、油断をしてゐた爲ぢやないのか。しかし、——畏れ多くも皇城の地を血で汚すやうな不祥事がなくてひきあげたことは目出度いよ。わしは、雄藩の力をお頼ませ給ふ主上の大御心を體して、少くとも三藩以上が合力せねば天下のことは容易くは行くまいと信じてゐる。それに、御親任に背き奉るとは一體何事ぢや！』

龍馬は、騒ぎ立つ仲間を抑へてこんな風に説いて獨りで嘆息するのであつた。

相次いで来る警報は、大和天誅組の惨敗で、吉村や、那須は戦死を遂げたといふし、武市半平太一派は禁錮されたといふし、中岡慎太郎も想像した通り長州勢を追ふて走り、生野の義學は、戦はずして平らぎ、平野國臣等が捕へられたといふ。——龍馬の心は、たえず憂鬱であり、ともすると深い溜息にくれるのであつた。

土州藩から神戸海軍操練所にある土州人に歸國を命じて來た。それは、武市等の投獄につれ藩としては、この機会に激派の根絶をみるんのでことに違ひなかつた。事實、もう土州藩では京都の政局が薩、會の公武合體派に占められると、吉田東洋派の人物を擧用して後藤象二郎等が大監察として辣腕を振ひ勤王黨を支持してゐた小南五郎右衛門は親族預けとなつてしまつたといふ。

かうなると、龍馬等も、藩命に應ずるかどうかが重大な問題となつて、一黨の面々寄り／＼協議を始めた。

『この際、歸藩するなんてことは進んで死地に投ずるやうなもんぢや。』

『だが、かうしてゐておめく捕へられるのもつまらん。』

『長州へ行つたらどんなものか。國の奴も大分行つてゐるから……』

『いや、どうせ、かうなつたら京都へ潜入し、青蓮院宮様を除き奉り、松平守護職の首をうちとるまでぢや。』

『脱藩！ 脱藩！ それで萬事決すぢやないか。われくは、自由の身となつて飽くまで目的を貫徹すべきぢや。』

めい／＼勝手な議論を闘はした結果、藩命に應ぜず、断じて歸國しないといふことに決つた。

龍馬は、特に議論もせず悠然と構へてゐたが、その間にも工夫をこらしてゐたので、一同變名して勝の家來や、お雇といふことにして手當をうけるやうに取計つた。しかも、自分は、勝が幕命によつて、長崎へ行つて外國軍艦が復仇の爲に馬關を砲撃せんとする企てを中止させる談判に出かけるらしいので、それについて行くことまで考へてゐた。

それから、黒龍丸で浪士二百人餘を集めて蝦夷地開拓に押し渡る案などもたてゝゐた。これは、浪士の始末を考へてのことなのだが、龍馬にあつては單なる空想ではないので、既に北副佐磨能勢達太郎、安岡斧太郎の同志をやつて實地踏査を試みさせてゐるのであつた。

しかし、龍馬は、決して傍觀的立場の安全と逃避に終始しようとしてゐるのではないので、五月十日以來、長州の外國船砲撃によつて傷ついた外夷の船が江戸方面で修復を許され、それを又長州方面へもつて行くやうな怪しからぬやり口を、幕吏が黙認してゐるといふ風聞を耳にした時などは、怒髮冠を衝く憤りを發したのである。だから、

——右の姦吏などは餘程勢もこれあり大勢にて候へども、龍馬二三家の大名と約束を固くし、同志を募り、朝廷より先神州を保つの大本をたて、夫より江戸の同志（はた本大名其餘段々）と心を合せ、右申す姦吏を一事に軍いたし打殺日本を今一度せんたくいたし候事にいたすべくとの神願にて候。——

と、國の姉への手紙にも書いたのであつた。

さうかうしてゐるうちに、年も新たに元治となつたが、かねて、藩情視察の爲に歸郷してゐた塾生の安岡金馬が、ひよつこり操練所にかへつて來た。龍馬は、早速、國の様子をきいて見ると、安岡は要路の一人である小八木卓助にいろ／＼説いて見たが、到底容れられぬことが分り、自分の身も危険になつて來たので脱走して來たといふのであつた。

『そりやもうお話になりません。ちよつと寄り合つて話してゐた位でも怪しまれるんですから

ね。捕まつたら最後ぶち殺されるのに定つてゐるんです。それに、城下の騒ぎと來たら、名狀し難い位です。』

安岡は、眼のあたり見てゐるやうな表情をして語つた。

『ふむ、さうか。歸つて來てよかつたが、こつちの連中も兎角動揺したがるから困るよ。望月龜彌太なんか第一に動きたがるのでな。そりや、血の氣の多い連中のことだから無理もないし、吉村や、那須の勇ましい戦死を考へると、ぢつとして居れん氣になるだらう。しかし、今は妄動しちやいかん。陳吳を以て任ずるのもいゝが事を成すには出鱈目ぢや、無要の犠牲をつくるまでだよ。おんしも、これでなか／＼動きたがる方ぢやからな。』

龍馬は、ぼんと一つ安岡の肩をたゞいて、

『わしが、いつもいふことだが、凡そ、天下の大事をなすには、先づ、薄墨で描いて見るんぢやな。それからだん／＼濃くして行けばいゝんだ。初めから、べつたり濃い墨で塗らうとするから、とりかへしがつかんことになるのぢやよ。どうぢや、さうは思はんか。ハハ……』

と、得意の警句に自分も面白がつて笑つた。

『……我慢してゐませう。一つ薄墨でもゑどりながら……』

『根太もよく／＼腫れてからでないよ、針に膿はつかんからな。時期は待つべきものぢやよ。』

龍馬は、寒さに凍える手に、子供のやうにふう／＼息を吹きかけながらいつた。

安岡には、分つたやうな分らないやうな教訓であつた。

危地に入る者

六月五日の夜である。明日は本祭といふ祇園祭の宵宮だつたが、蒸し／＼と暑かつた。お龍は、暫らく知足院で静養してゐる母を見舞つたり、木屋町の寮へ來てゐる寺田屋の娘たちを訪ねたりして久しぶりに故郷の街のなつかしさに、つい、涼みがてら出歩いてゐたのが祟つて、とうとう容易にはかへれなくなつてしまつた。

といふのは何事が起つたのか、あつちへ行つては咎められ、こつちへ來てはつき戻され、どうにも行き場がなくなつてしまつたのである。

こゝ暫らく浪士狩りが厳しい爲に、志士たちも所々に潜伏して鳴りを静めてゐたのが、三條小橋にある長州藩の定宿である池田屋に浪士たちが密會してゐることを探知した壬生浪士といはれる新選組が襲撃して、凄惨極る事件が突發したのである。

それで、守護職、所司代、町奉行の手によつて、殆ど全市にわたる非常警戒網が張られてゐたのだが、お龍は、それとは知る由もなく、あつちへ行つたり、こつちへ逃げたりしながらうろついてゐるのであつた。

その日の早曉、四條寺町で古道具と馬具とを賣つてゐる柳屋喜右衛門、實は江州浪人の古高俊太郎なるものが、新選組に捕へられた。古高は、陰謀組の一人だつたので、手をつくして究問した揚句に、すつかり白状してしまつた。古高は、山科毘沙門堂門跡に仕へ、後ち倒幕勤王運動を始めたもので、前には梅田雲濱などゝ親しくし、昨今では窃かに志士の出入が激しく遂に怪しまれるところとなつたのである。口供によると、六月二十日前後を期して洛中に火を放ち混雜に紛れて、先づ中川宮を排し奉り、松平肥後守を血祭にあげ、一舉にして昨年八月十八日の政變による尊攘派の失脚を恢復し、公武合體派を覆滅しようとして、浪士が池田屋に密會を催ふすことになつてゐるといふのである。で、檢學の手が忽ち難なく廻つたのである。

『あッ！』

お龍は、暗がりから、白刃とぬき身の槍をつき出されてびつくり仰天した。

『おい女！ どこへ行く？』

『何者ぢや。夜中の一人歩きは罷りならんぞ。』

『どこか、お茶屋の女中か。』

會津訛りの横柄な訊問である。

『わたしは、伏見寺田屋の娘でござんす。』

かういふ時には、薩州の定宿なら幅が利くと、お龍は、閃くやうに感じたので洒ア〜と答へた。

『何故、伏見の者が、この邊をうろ〜してゐる？』

『京都へ用事があつて参りましたの。そして、ちよつと用足しに出たのがかへれなくなつてしまつたんです。どこへ行つてもお關所が出来てゐてお通し〜て下さらんのですもの。』

『これから、伏見へかへるといふのか。』

『いゝえ、こつちに親戚がおりますので……』

『よし、通れ！』

『はい〜……』

お龍は、槍の石つきで腰のあたりをこづかれてよろけながら、やつとそこは通りぬけた。

だが、提灯が走せ違つたり、追跡でもされてゐるのか、不気味な叫びが遠くから聞えて來たりすると、血で彩つた奇怪なまぼろしが、陰に描き出されて、お龍は、覺えず戰慄した。しかし、怖くもあるが面白くもあり、痛いやうな、かゆいやうな、眩暈を覺えるかと思ふと、どん／＼駆け出したくなるやうな異様な衝動に踊らされて、逃げ廻つてゐるうちには、鼻緒をさらした下駄は捨て、跣足の指は生爪をはいだのか、ぢん／＼と痛みを覺えた。全身に氣味の悪い汗を、びつしよりとかいてゐた。

タタツ、ダツダツダツ……

命から／＼逃げて來るやうな大地をたゞく足音の響きが背筋にすーんと來るのを覺え、お龍は、思はず立ち縮んだが避ける暇もなく、後ろからつき飛ばされ、つ、つ、つーと前のめりに走らされたかと思ふと、とある廂下の天水桶につき當つてひっくりかへつてしまつた。

打ちどころが悪かつたのか、驚愕の餘りなのか、何だかそのまゝ氣が遠くなりさうだつた。追ふ者、追はれる者、——それらが、どうなつたものか、何にも分らないで、時は過ぎて行つた。

逃げて來たのは、龍馬の不在中に、ぬけ出して陰謀に加はつてゐた望月龜彌太だつたのである。望月は、池田屋の樓上にゐたが、手入れと悟るや、逃れようと起ちあがつたが、忽ち、白刃

と槍襖の重圍で修羅場と化してしまつた。望月は、獅子奮迅の勢ひで、遮二無二斬りまくつたが、満身創痍となりながら突破して逃げ出すことが成功した。そして、やうやく、河原町二條通角倉屋敷のわきまで來ると、力つきてばつたり倒れてしまつたのである。

お龍は、やうやく正氣にかへつたが、つい、近くでうん／＼唸る聲がするので、天水桶の蔭からのびあがるやうにして、恐る／＼見ると、夏の短か夜の明くるに早く、あたりは茫々と乳色の薄明りのさしわたる中に、自ら刃に伏して、まだ、背中をびく／＼と動かしてゐる血まみれの若い武士の斷末魔の姿が、焼きつくやうに眼に映つたのである。

もう駄目だなと思つてゐると、武士は、刎ねかへされたやうに、ぐつと顔をもたげて、何か訴へるやうに、ぎよろつとした眼を見開いたが、直ぐに、ばたつと突俯してしまつた。

『おー！』

お龍は、がた／＼と顫えながら、鋭い叫びを發した。それは、紛れもない望月龜彌太の面影だつたからである。

つひ、一ヶ月前に伏見へ寄つて、龍馬が江戸へ行つたり、勝のお供をして、長崎へ外國聯合艦隊と談判に行つたりした消息をきかされた。望月外數名も長崎へ行つたといつたが、今、このや

うな姿となつて、再び、見えようとは？

お龍は、望月だと分ると見捨て、行くわけに行かないので、何とかして勇気を振り起さうとしたが、又しても荒々しい足音が聞え出したので、天水桶の蔭から這ひ出して、そのまま細い暗い路次へと逃げのびたのであつた。

お龍は、知足院へ戻り、それから伏見へかへつたが、一刻も早く龍馬に知らせたいので、いろいろ苦心して情報を集めると、池田屋の騒ぎでは即死が七名で、長州の吉田稔麿や、土州の石川潤次郎、北副信麿も入つて居り、望月龜彌太は、果して一旦は落ちのびはしたが、途中で見事に自刃し果てたことが分つた。池田屋の主人惣兵衛はどんな目にあはされても屈しなかつたが、遂に死んだといふ噂であつた。桂小五郎は、長州屋敷で慌しい見舞客に應接してゐたといふから、密會には出てゐなかつたのであらう。

池田屋の變があつてから、一ヶ月餘りも過ぎた。これに激昂した長州勢は、嘆願の筋ありと稱して、陸から海から、精兵を續々東上させたので、京攝の地は物情騒然たる有様である。

夜であつた。龍馬は、團扇で、燈火をかすめて飛び廻る蛾を追つたり、虫を拂つたりしながら、涼を納れて、二三の同志と語り合つてゐた。

ところが、安岡金馬が戻つて來たと知らせるものがあつたので、一座は忽ちにどよめいた。安岡は、あれ程龍馬が戒めてゐたのにかゝはらず、望月龜彌太の自刃にも刺激されたのであらうが、昨今の雲行の險しさに、おちついてゐられなくなつたものと見え、この間から無斷で行方をくらましてゐたのであつた。

やがて、安岡は二三人につき添はれて、縁先へ姿を現はした。如何にもきまりわるさうな顔をしてゐるが、日焼けで眞つ黒になつて、眼ばかり光らせながら、何かわびるやうにいつて頭を下げてゐる。

『金馬、どうした？ 忘れ物でもしたのか。』

龍馬は、怒鳴りつけるかと思つたら、にこ／＼しながら、一向、咎めだてもせず、

『遠慮することはない。こつちへ上れよ。』

と、親しみをこめていつた。

『……塾頭！ どうか叱つて下さる。』

安岡は、のこ／＼と上つて来て一同にも會釋してから頓狂な調子でいつた。

『怒つちや損ぢやよ。それよりおんしはどうせ京都あたりへ行つてゐたのぢやらうから、あつちの様子をきかせてくれんか。これはわしの方からお願ひするのぢや。』

『……無斷ですみませんでした。望月その他の最後をきくと、もうちつとして居られなかつたのです。』

『どうも、割腹したい先生が多くな。』

龍馬は膝を進め、

『長州の軍勢はどの位か。どこらに陣取つてゐる？』

『は……』

安岡は、さう出られると意を安んじて寛いだ氣持になり語り出した。——山崎天王山には眞木久坂の一隊、伏見には、家老福原越後、嵯峨には國司信濃、來島又兵衛、八幡には益田右衛門介が各々軍を率ゐて屯ろし、藩主父子の冤を雪ぎ七卿の復職を嘆願してゐるが、若し、聽かれずば實力に訴へても會津を除かんとの決意である。まことに、一觸即發ともいふべき噴火山上の京都である。その間にあつて、桂小五郎が平和裡に局面の轉回を計らうとして躍起になつて運動をし

てゐるが、どうも思はしく運びさうにないらしいといふ。

『さうか。これは、どうやら、中川宮様と、桂小五郎との智慧比べ、力比べといふ恰好ぢやないかな。』

龍馬は、かうつぶやくやうにいつて近藤を顧みた。

『うむ。會津の蔭には薩摩も控えてゐるから、どうも唯事でないな。』

近藤長次郎は仔細らしげに嘯いた。

『塾頭！ あんただつたら、この局にあつてどうなさる？』

伊達小次郎が、好奇的に眼を輝かせながら、試すやうにいつた。

『この局つて、一體、どの局なのか。桂のある立場かね。——わしにいへせれば、兵を進めてから物をいふのは、まづかつたと思ふな。事前の運動を出来るだけ桂がやつておくべきだつた。兵力を以てする日になると、會津、薩摩だつて張り合ふよ。兵力があるから、おどかしはきかんよ。しかし、物には勢ひといふものがあるから、今、對抗してゐる二つの大きな力は、一度は噛み合つて見ないことには局面は轉廻せんのぢやないかと考へられるな。勝先生にしても、大抵、そんなお考へぢやらうと思ふ。』

龍馬は、かういつたが、急に、『ところで、金馬先生は、一體、どうするんぢや。どつちにしても、勝先生に謝らんといかんな。』

『それは、心得て居ります。そして、改めて、お暇を乞ふ決心です。』

安岡は、眞剣な表情でいつた。

『また、行くのか。』

『實は、わたし部署について居るので……』

安岡は、長州軍に投じて、淀、山崎附近の測量に従事してゐるが、測量器械をこつちに置いてゐるので、こつそり、それをとりに來たのだと正直にうちあけた。

『さうか。』

龍馬は、ちよつと苦い顔をしたが、別にひきとめようとしなかつた。

そして、直ぐに勝麟太郎のゐる一室へとつれて行つた。勝は、頭腦も身體も忙しいので、安岡のことなど問題にしてゐなかつた。しかし、安岡が龍馬の介添えで汗と涙をこつちやにして拭きながら愁訴嘆願するのをきゝ終ると哀憐の情を催ふしたのか、

『お前さんは、なる程、海軍よりも土方の方が適當しさうだな。ちよつと待つてくれ。今、餞別をやるから……』

と、無雜作にいつて起つた。

勝の淡々たる口吻には、二人もさすがに驚いた。

勝がとり出して來たのは意外にも、一着の白地の筒袖であつた。

『いくさをする時は、討ち死の覺悟で、ちと小さつぱりでもして居らんと、見苦しいからのう。』
 というて低く笑つた。

安岡は、愕然としたが、龍馬も、胸を衝かれる思ひだつた。勝は、一戦の避けがたいことを見透し、安岡にも潔く死ぬと諷したやうにとれるからであつた。

『……忝く頂戴いたします。』

安岡は、感涙に咽びながら白地の單衣を推し戴いた。

『測量器械を忘れるのぢやないぜ。』

勝は、辭し去る安岡の後ろから、かうからかひ氣味にいつた。

『金馬！ いつでもかへつて來るがいゝぞ。』

龍馬は、外へ送つて出てから、幾らかの路銀をつかませて優しくいつた。

『は、命がありましたら……』

『いや、死んでもかへつて来いよ。だが、退却の爲でなく、進軍の爲だよ。——死んでも、人間の志は消え失せるものぢやないからな。』

『いゝことを聞かせて貰ひました。あり難う。ぢや、測量機は持つて参ります。』

安岡は、あたふたと物置きのある方へと駆け出して行つた。

螢にしては、季節外れだが一點の光が明滅しながら轉がるやうに暗い空を動いて行つた。龍馬は、闇の中に消えた安岡を送つた眼で、その光を追ひながら、若い一つの生命が止むに止まれず死地に突入して炎となつて行く姿の示現のやうな氣がした。

書生寮で、何やら喧騒してゐるのでひきかへして行くと、新たに二人の脱走者があつたことを知らされた。龍馬は、暗然とした氣持になり、『ちえツ／＼』と、舌打ちしてゐた。

信州眞田侯の家來佐久間象山が、白晝京都の路上を騎馬で行くところを暗殺されたのは、それから、数日の後であつたが、勝は、親族關係であつたせいもあり、終日愁然としてゐた。

十九日の夜になると東の空が眞つ赤に見え、京都の異變が分つた。龍馬は、勝の命により直ぐ

さま觀光丸に準備させ大阪へ向ふことになつた。

第六章

一千壯士 磨_ニ刀槍、日夜尅然待_ニ蠻航_一

男兒不_レ思家郷事 陣營梅雨讀_ニ兵書_一

——木戸 孝允——

狂嵐の後

まだ、どうなつたか分らぬが、長州勢は散々の敗北らしい。大阪へ出て見ると敗兵がどん／＼なだれこんで來るといつて騒いでゐた。

勝は、龍馬を従へて大阪城内に入つたが、幕吏共は唯うるたへてゐるばかりで一向京都の形勢は分つてゐない。勝は、叱咤するやうにいつて斥候を出させたが、幾人やつてもみんな途中から逃げて歸るといつた無氣力ぶりである。

業を煮やした勝は、『ぢや、おれが行く！』といつてぶり／＼しながら出かけるので、龍馬は、

心配になつて見えかくれに後からついて行つた。

「ちり／＼と暑い日光が照りつける二十日の眞晝である。櫻の宮へ出て淀河堤をすん／＼上つて行くと、さすがに戦争の餘波を恐れてか、上り下りの河船も見えない。」

見てゐると上流から一艘の小舟が矢のやうに下つて來たと思ふと、これに乗つてゐた三人の武士が岸へ漕ぎ寄せた。どうするかと思つてゐるうちに岸へ飛び降りて何やら手をあげて怒鳴つたかと思つると矢庭に二人は刺し違へて倒れ、一人は見事に立腹を切つてしまつた。長州の敗兵が、こゝまでは逃げのびたがとても駄目だと觀念して自決したものらしい。

勝は、眼のあたりにさういふ光景を見せられると、これで長州の敗戦は十分分つたので三軒屋までひき返した。前の河原に一人の武士がしやがんでゐる。これも負傷して味方にはぐれた敗兵らしい。向ふ河岸にゐて、それを見つけた幕府の番兵が突然どん／＼鐵砲を打ちかけた。

彈丸はヒュー／＼飛んで來る。まるで、こちらを目がけて打つてゐるやうなもの。「馬鹿な奴等ぢや。たつた一人の負傷者に向つて、無駄弾を打つ放すなんて！」と、勝は、ぶつくさいつてゐたが、身邊に飛んで來る彈丸がだん／＼劇しくなつて危険の上もない。一彈カチーンと陣笠に當つたのがあつた。「危ないッ！」と、叫んで身を躲すやうにして傍らの窪地へ飛び降りて檢

べると陣笠にぼつかり穴があいてゐた。

そこへ、龍馬が駈けつけて來た。

『お怪我はございませんでしたか。』

『おゝ、坂本君か！ 御苦勞ぢやつたのう。』

勝は、歡びながら陣笠を見せた。

『とんだ紀念が出來ましたなア。今、あちらで聞いて來ましたが長州の藏屋敷へ五十人ばかりの敗兵が逃げ込んだので焼き打ちするとかいつて騒いでゐるさうです。』

龍馬は、憤慨の語氣で報告した。

『焼き打ち？ 馬鹿な？ たつた五十人のために大阪を火事場にしてどうするのだ？』

勝は、眼を瞞せて城の方を眺めながら、

『坂本君！ 幕府も末ぢやのう。こゝまで來る勇氣のある奴が一人も城中にはゐないんだ。さつきのだまア何んだい。河原にゐる負傷兵一人をつかまへることが出來ないで、矢鱈にぼん／＼打つてゐやがる。お話にならんぢやないか。』

と、糞味噌にこき下ろす。

『しかし、幕府方が勝利を得たといえますと……？』
 『幕府が勝つたんじゃない。會津と薩摩の兵が勝つたんだよ。これで幕府が威張り出したら益々危険ぢやぞ！』

『會薩と長州との戦争ですか。』

『うんさうぢや。幕府は、それで自分が勝つたと思ふかも知れん。』

『しかし、長州も無謀なことをやりましたなア。』

『わしが折角長崎まで行つて六月迄の期限で外國軍艦に延期を乞ふたな。それもとつくに過ぎてるぢやないか。今に、英、米、蘭、佛の聯合艦隊は馬關へやつて来るぞ。——これも大體いへば幕府の失體ぢや。』

『……外に備へずして、内に私闘を事とすでは、實に國危ふしですなア。』

『坂本君！ もう行かう。城内の様子が心配ぢや。それに何か新しい報告が来てゐるかも知れん。』
 急いで歸城して見ると、果して、長州藏屋敷の敗兵焼打ちの相談で沸騰してゐた。

『そ、そんな馬鹿なことがありますか。』

勝は、眞ッ赤になつて怒つた。そして、

『敗兵は治安上よろしくないからといつて談判して引き拂はせたらよからう。何も火つけするに及ぶまい。その位の談判が出来んでどうするのです？』

と、詰責したので、町奉行へ命令することになつた。

京都からの報告によると嘆願容れられざる長州勢は何かの行き違ひもあつて三道から入京しようとしたが盡く敗戦、遂には騎虎の勢ひで過つて禁闕に發砲するに到つた。鷹司邸は焼き拂はれ久坂、入江、寺島は戦死或は自刃し、天王山へ落ちのびた眞木和泉の一黨は追撃に會ひ、陣營に火を放ち自刃した。京都の市街は、まだ、どん／＼燃えつゞいてゐるといふ。

その飛ばつちりで、六角の獄舎に繋がれてゐた生野義舉の平野國臣以下三十三人は軍門の血祭に虐殺されてしまつたといふ。大和天誅組の乾十郎もゐた筈だと思ふと、龍馬の胸は疼いた。

これで、略々事變の経過は分つたわけである。勝は慨嘆した。龍馬も憤怒した。去年八月十八日の報復のために長州は起つたのであらうが、朝敵になつてしまつたではないか。

勝は、既に長崎へ外國軍艦に對して長州攻撃の猶豫を乞ひに行つた時、心配して訪ねて來た長州の小田村文助と玉木彦助に向つて、

『貴藩の攘夷精神には敬服してゐる。しかし、この節の國論といふものが兎角動搖して居つて一

致せぬ。長崎、横濱、函館は、御承知の通り、開港を赦許されてゐるのだから、貴藩も機を見て變に應じねば、邦家のためにも、毛利家のためにも不利になりますぞ。』と、注意して置いたし、今度大阪へ出て来る時にも、長州人の塾生である武田庸次郎等二人に向つて、『毛利定廣公が後軍として出發されたと聞く。よもや、藩士共の無謀の擧には同じられまいとは思ふが、つまらぬことからどんな間違にならぬとも限らぬから、勝がよく／＼御注意申したと傳へてくれ。』といつて暇を出してやつた位である。

『勝先生！ 今度は前以て慶喜公が征長の命をお受けになつて、ちやんと邀撃の用意が出来てゐたといふぢやありませんか。そこへ、長州が御所へ向つて、たとへ過ちにもせよ、打ち込んだといふのだから、愈々征長軍を起す名目が立つわけですか。』

龍馬が訊いた。

『さうぢや。わしは、薩州の西郷吉之助に會つて、篤と意見を質して見度うなつたよ。』

勝は、ばん／＼と膝を打つていつた。

『それはよいところへお氣がつかれました。今度にしても會桑如何に強くとも、長州の精兵がさうむざ／＼と敗ける筈はありません。噂によりましても、薩兵が横合から殺到したために退却し

た由ですから、今後の成行にいたしましても薩州の動向によつてどんなにでもなるのではないかと考へます。』

『さうぢや。西郷ならわしのこともかねて齋彬公さいひんから聞いてよう／＼知つてゐてくれるようぢやからな。』

『では、わたくしは、お先に歸つて居りませう。』

龍馬が、勝と別れて定宿に立ちよると、千屋寅之助が潜んでゐた。觀光丸にゐるものとのみ思つてゐた龍馬は奇異の思ひがして、

『おんしはどうした？』

と、驚き顔で訊いた。

『坂本さん！ われ／＼も危険になつた。わしは捕手とくてに追跡されて逃げ込んで來たのです。』

千屋は、不安さうな眼をばちくりさせてゐる。

『長州の敗殘兵と間違へられたのか。』

『いや、神戸海軍操練所が危ふい。幕府の探偵が入り込んでゐると見えます。』

『まさか！ 兜かぶとの亞流あなでもあるまい。』

『いや、確かに怪しいものがあつた。幕府では巢窟と睨んでゐるのかも知れません。』

千屋は、あくまでいひ張つた。

『それぢや、おんしは、當分伏見の寺田屋へでも行つてゐるか。』

『番頭にでもして貰ひますか。』

『よからう。一つ船頭の呼吸でやるんだな。』

『さうです。』

千屋の顔には歡びの色が浮んだ。千屋は、一時、兵庫の勝のところへ身を寄せてゐたお龍の妹のおとみにほのかな思ひを寄せてゐたのである。で、伏見へ行けば會へるだらうといふことがうれしかつたのである。

龍馬の方は、千屋を行かせて、福原越後の軍が屯ろし、そこから入京したといふ伏見の寺田屋一家を見舞はせたい腹もあるのであつた。

『……測量屋はどうなつたでせう？』

千屋が、うき／＼しながらも、ふと安岡のことを思ひ出した。

『測量屋？ うん、安岡の金馬さんか。』

龍馬は、笑ひ出して、

『命があれば戻つて來るぢやらうよ。』

勝が大阪の宿で、西郷吉之助に初めて會つてから間もなくであつた。

龍馬は、自分も進んで西郷に會ひたくなり、勝の命をも含んで、亂後の京都へ乗り込み、薩州藩邸を訪ねたのである。勝の添書があり、それに兩人は一見して相許す間柄になつてゐたと見え、快く引見してくれた。

何の飾りもない大廣間に迎へ、西郷は、どつかと坐つた。残暑で蒸し／＼するのだが、きちんと袴をつけてゐる。その偉大な西郷の傍に介添役然として控えた吉井幸輔は、一と廻りも二た廻りも小さいやうに見える。

『かねて、お噂は勝先生からもよく承つて居りました。』

かう、あべこべに出られると、さすがの龍馬も恐縮した。

寺田屋事件の惨事の因をつくつた浪士の義舉の密謀發覺に連座して流謫の身となつてゐた沖江

良部島から召し返され、中央の檜舞臺に登場した西郷は軍賦役兼諸藩應答掛として、今は京都に於ける薩藩の代表者として朝野に重きをなしてゐるから、うかつなことは喋らないと聞いてゐた。大たぶさに結つて、轡の紋のついた單衣を着てゐるでつぶり肥えた西郷は、まるで、關取のやうな恰好で、ゆつくり／＼と扇子を使ひながら、時々黒水晶のやうに澄んだ大きな眼で瞞める。その瞬間の眼光と沈黙とが異様の壓力となる。

『……勝先生も、大分幕府のやり方には弱つてござるやうではすな。——御藩にもしつかりやつて貰はんと困ります。』

西郷は、鷹揚に人懐つこい薄笑みを浮べた。

『勝先生は、薩摩に大きな望みをもつて居られますぞ。』

龍馬は、得たりとばかりにいつた。

『いや、薩賊會奸など、ゑらい悪口をいはれましてのう。それで勝先生にも叱られたのでござす。』

『今度の事變は何とも遺憾に堪えないことでしたが、西郷先生のお力を以てしても何とか出来なかつたものでせうか。』

『それは、勝先生の方がよう知つてござる。私が幕府のことを訊きますと、一人や二人の力ではいかに申されました。どこでも同じことではす。長州でも桂さんが大局から平和裡に結着をつけようと骨折られたさうではすが、矢張うまく行かなかつた。』

『いや、薩摩が會桑に加勢されたといふことについてです。』

『坂本さん！ あんたはそんなこと申されては駄目ではすぞ。』

西郷は、急にきつとなつて、

『薩摩は、畏れ多くも禁裏守護のために闘ひました。長州であらうと、どこであらうと構ひ申さん。無名の師は許されません。』

『無名の師……？』

『いや、私闘のことではす。』

『西郷先生は、長州の一件を私闘と見て居られますか。』

『は……』

『然らば、幕府が征長の軍を起すことは、何と御覽じますか。』

『幕府は朝敵ぢやからといふのでござせう？ 私は、そこを勝先生にも申したのでござす。勝先

生は毛利父子に逆心などあらう筈はない。ぢやから、私闘を助けることになるから征長は理に合はぬと申されたのではす。立派な御議論でござすな。』

『では、西郷吉之助先生も同じ御意見で……』

『はい！ しかし、このまゝ長州を差し許すわけには参らんでせう。』

西郷はぎよろつとした眼を吉井に向けた。

吉井は、今まで黙つてゐたが深くうなづいた。

『幕府は、既に毛利の官位を褫ひ、將軍の諱たる慶の字を敬に改めさせたといふではありませんか。その上にまだ……』

龍馬は、急ぎ込んだ。

『ワハハハツ……』

西郷は、哄笑一番して、

『それは、まるで、子供欺しぢや。しかし、畏れ多くも、禁闕を犯し奉つた！ 征長も何もてはせん。朝廷の命を奉じて處決させるがようはす。臣子の分としては、何事も黙つて従ふべきでござす。』

『なる程！ 然らば幕府は除外してもと申されますか。』

『幕府も朝廷の命に従ふべきでござす。』

西郷は、恰も、鐵槌を打ち下すやうにいつて、

『しかし、長州もお氣の毒でござす。外國の聯合艦隊に散々やられたさうで、——勝先生のお骨折も水泡に歸したわけではすな。これは長州の不名譽ではござせん。日本の不名譽ではござせう。』

西郷は、九門の鬪ひでは、流丸があたつて落馬して輕傷を負つた。それは長州の來島の狙撃だといふ流言もあるのだが、西郷は、そんなことには一切頓着しなかつた。

『當然、幕府の失體にもなるわけではす。』

『坂本さん、あんた桂さんに一ぺん會ふて見なされたらどうでござす？』

西郷は、ふつと思ひついたやうに大きく眼を瞠つて、

『桂さんは、無事にどつかにかくれてゐなさらしい。おゝ、さう／＼桂さんの御嫡子勝三郎どんは、重傷を負ふてとうとう櫻宮まで落ちのびて自刃されたと聞きますが、本當でござすか。』

『それは初耳ですが……』

龍馬は、櫻の宮で目撃した敗兵の最後を思ひ出した。

『尊い犠牲ぢや。お痛はしいことではす。』

『……さうでしたかな。久坂、寺島、入江も死んだし……』

龍馬は、今敵視すべき長州に對して、西郷が並み／＼ならぬ同情を以てゐることを見ぬき、洪量に感服せざるを得ない。

勝の觀察によつて考へても、幕府の土臺は、もうぐら／＼に搖いであることが分る。そして、益々墓穴を掘ることに忙しいのである。桂——西郷——勝——と考へて來ると、龍馬は、そこらに改造の根基を確立して活路を開くことの出来る動力があるのではないかと思ふ。

『いや、ゑらう無駄口を利きましたわい。吉井どん、一献さしあげてはどうぢや。海軍のお話でも伺ふておかんことにはのう。長州のことばかりもいふて居れん。』

『いや、薩摩は昨年既にエゲレスの軍艦と激戦せられて居るのだから、われ／＼こそ學ぶべきです。』

『いや、薩摩も、あの時無謀の攘夷不可なりと悟りましたのではす。』

『今度こそ、長州も悟るでせう。——幕府の修交條約に到つては保身の術であつて、日本の國を考へての上でないから賛成は出来ませぬが……』

『坂本さん！ 兵庫開港の時期もいよ／＼切迫してゐるから、その邊のところは、勝先生等と何分よろしく頼みますぞ。薩摩が何か口出しすると悪くとられますのでなア。のう、吉井どん！』

『本當ぢや。腹黒いやうにとられる！』

吉井は、少し下り氣味の眼尻を、釣りあげていつた。

『ワハハハツ……。兎角、人間といふものはむづかしい。しかし、何ん事も追ひ／＼には分つて來るものではす。』

西郷は、飛んで來て袖にとまつた蠅を團扇で追ひながら、

『おゝ、さういへば、御藩の中岡さんにもきつう叱られました。しかし、薩兵を早速と大阪へひくと申すと、大褒めに預りました。ワハハハハツ……。』

と、蟠りのない笑ひ聲をあげた。

『ほう、中岡の光次が……？』

龍馬は、七卿落ちの時長州へ行つた中岡のその後の消息を知らぬので、歡びと驚きがごつちやになつて湧きあがつた。

『中岡さんは、輕傷とかでびつこをひいて居られました。岩倉卿と三條卿との間を斡旋して居ら

れるさうで、又、薩摩と長州とは一緒になるべきだと熱心に説いて居られました。あの熱心にはうたれました。』

西郷は、しみりとした調子になつた。

『中岡君は、土佐の典型的人物ぢや。』

吉井も傍から感心してつぶやいた。

龍馬は、意外の情報に心が躍つた。足をひきづりながら大半焼土と化した戦禍の中を奔走しつづけてゐる中岡の面目躍如たるものがあるやうに思はれた。そして、何とかして、一度中岡に會ひたいと思つたが、どこにあるのか、さつぱり見當がつかなかつた。

中岡は、中立賣門方面の激戦に加はつて右足に負傷したのであつた。血だらけの足をひきながら敗軍の中をひきあげて中沼了三の塾の近くまで來たところで痛みの爲に動けなくなつた。

丁度、平生から見覚えのある佐土原藩の醫者である鳥居大炊左衛門の家へ飛び込み、中沼の塾生と偽り、貴藩の軍隊の働きを見物してゐて流弾があつたのだといつて治療を乞ふたのであつた。

中沼塾とは以前から關係はある。池田屋騒動のあつた前から中岡は薩摩の行動が怪しいので内情探索の爲に、西郷新吾（後の從道）などが塾生なのを幸ひに、阿波藩士西山頼作と假名して入

塾したのである。忽ち、中沼の息子に化けの皮をひんむかれはしたが、兎に角、諒解を得たのである。さういふ間柄なのであつた。

療治をして繃帯をして貰ふと、中岡は、一旦中沼塾へひきあげたが、今度は西郷吉之助が戦争に加はつてゐたことを知ると、怒氣心頭に迸り、まさかの時には刺し違へるつもりで大膽にも薩摩屋敷へ乗り込んだところ、西郷の無言の雄辯に説破されて、却つて、頼むに足る人物であることを知つたのであつた。

龍馬は、もとより、そのやうな詳しいことを知る筈はなかつた。西郷の言葉によると、桂小五郎が京都のどこかに潜んでゐるといふから、中岡もまだゐるかも知れぬと思ひ、出来るだけ探して見ることに決心したのである。

庭の木立から ひんむ 蝸のなく音が涼しくきこえてゐた。

英雄策を建つ

つい、この間も操練所には隠密と覺しきものが、入りこんでゐたといふので塾生の袋たゝきに會ひ、そのまゝどこかへ逃げて行つたものがあつた。

それはそれですんだが、追ひ／＼寒氣に向ふので、勝は、水夫達の爲に高松太郎に命じて外國の商人から若干の毛布を買はせたと、それがどう傳はつたものか、幕吏は、よほど意味あるものと疑つたらしく、それとも故意に曲解したのか、突如として大阪城代を通して、勝に江戸歸府を命じて來たのである。

勝が浮浪の徒を集め、長州人などをかくまつたとか、龍馬一黨の土州脱藩者を庇護してゐるとか、數へ立てれば、勝に不利な理由は幾らでもあげられるわけであつた。

しかし、かうなつて、勝といふ首腦を失ふことになれば、神戸海軍操練所の運命も略々想像はつくわけであつた。

『坂本君！ 船乗りは陸へ上れと來たんでは、もうあがつたりだね。』

勝は、抑へがたい不満を自嘲につゝんで、吐き出すやうにいつた。灯かげのうつる頬のあたりには陰影が濃かつた。

『先生は船乗りどころか、日本丸の船長ぢやありませんか。そのかぢ取りを失つては、幕府だつて二進も三進も行かなくなるでせう？』

龍馬の語氣は荒かつた。

『蛤御門の事變以來、幕府の守舊派、保守黨がのさばり出して來たのよ。そこで、勝麟太郎つとむくべしと來たね。』

『しかし、先生は、どうしても御歸府と決せられますか。』

『……幕臣なれば是非もないことだ。歸れば、ばつさり首といふことは眼に見えてゐるがね。わしも、暫らく休ませて貰はうかい。』

『この海軍操練所の中絶は、國家の大損失、不名譽、——實にどうも残念至極ですなア。』

『そこは君、考へやうだよ。この内海の咽喉に於て文明の利器を据えつけてよ。敢て、攘夷の是非を問はず、鎖港の可否を論ぜず、幕府及び西南諸藩の俊秀を集めて黨陶をした。その數は、數百人に達してゐるな。この實地の教育をうけた連中が、全國に散らばつて行けば、これは又素晴しく大きな力にならうぢやないか。それを以てお互ひに満足しようよ。ハハハ……』

勝は、さびしく笑つた。

『それは、さうですが……』

龍馬は、しかし、何としても遺憾であつた。

『そこで、わしにも考へてゐることがある。薩摩の西郷吉之助ぢやのう。長州は、善戦はしたら

しいが攘夷の不可能を悟つて外國聯合艦隊と媾和を結んだし、又、西郷の周旋によつて、幕府の長州征伐も中止となつて、三家老の首級を軍門に送つて降参したわけだ。それで、今度は西郷なんかに中心になつて働く天下になると思ふ。それで、わしは、諸君のことも西郷に頼むことにしたよ。小松帶刀にも話をしておいた。坂本君のことは、先方でも知つてゐるから言下に承諾してくれた。』

『ほう、それ程まで、お氣遣ひ下さつたのでしたか。』

『わしの一身は、どうなるか分らんが、船頭さんが必要な時がくれば、又、呼び出しが来るだらうよ。』

『いや、屹度檜舞臺にお立ちになる時が参ります。わたくし共も結束して仰せに従ひ、他日御用に役立つ爲に力を養つておきませう。』

『まア、暫らくのお別れぢや。』

勝は、満足さうにうなづいた。

龍馬は、勝の室を辭すると、直ちに自分の一黨にうちあけ勝の好意を告げた。

近藤、高松、千屋、澤村、新宮、伊達その他二十餘人が悲壯な表情をして並んでゐたが、一言

の不平もなく、龍馬の指圖に従ひ、行動を共にすることを誓ひ合つた。すべて、土州藩のものであるが、伊達小次郎一人は、紀州藩でありながら、自藩を不俱載天の仇と思つてゐるので、敢て、土州藩士と名乗つてゐたのである。

お龍の弟の太一郎がある。しかし、これは心身共に虚弱なので、龍馬は、一應、親のところへかへすことにした。

勝が、兵庫を去る時、近藤長次郎が何か一言お別れのお言葉を頂きたいといふと、

『お前方は、これからも船乗りはやつてくれようからあり難いが、これまでの武士とは違ふな。もう、お前方にも、そんなところが見え出して來た。これは、新しい武士が誕生したといふてもよからうが、その新しい武士が、新しい時代をつくつて行かなければならんのぢやから、任務は重い。どうか、そのつもりでやつておくれ。』

と、まるで、悴せがれにいひきかすやうにいつた。

『はッ、かしこまりました。』

近藤は、心に沁みる入るやうに響くのを覺えた。

それから間もなく、勝が去り、龍馬達は、小松帶刀の周旋によつて、一時、大阪の薩摩屋敷に

潜居することになった。

筑波山に兵をあげた武田耕雲齋、藤田小四郎の一味が、雪の加賀路で軍門に降つたといふ報が到る頃のことであつた。

神戸海軍操練所は、かくて閉鎖され、空家になつてしまつた。(後に、操練所は、パークスの領事館となり、龍馬等の寝起きした書生寮は『異人交易所』に使用されたことがあつた。)

二人の青年武士が、元氣よくやつて來た。

それは、西郷新吾(後の從道)と、邊見十郎太であつたが、

『邊見! あれ見い。妙な奴が來るぞ。』

と、新吾が叫いた。

『うん、あれか、とんと見慣れん男ぢやのう。』

十郎太は、驚いて眼を墜る。

鹿兒島城下の往來である。慶應元年も五月で、南國の初夏の爽やかな風に吹かれながら、のつ

ぽの一人の武士が向ふから濶歩してやつて來るのであつた。

『知つた奴なら挨拶をするぢやらう。』

『浪士嫌ひの久光公のお膝元へ、あゝいふ奴が入り込んでゐるとは合點が行かん。』

二人の訝しがるのも道理で、その武士は昂然と顔をあげ長刀を帯びてゐるが、頭髮はもぢやもぢやと亂れ、胸ははだけ、如何にも無頼な恰好で、さすが亂暴な兵兒の本場にも見られぬ異様の風體なのである。

二人は、挨拶を期待してゐたが、武士は、眞つ直ぐに前方を見つめながら、近視のやうに眼を細めて、あたりを憚らぬ態度で、さつさと通り過ぎてしまつた。

『矢張り分らん。あんな奴が現はれるやうになるから、世の中も物騒なのぢや。』

十郎太は、何か城下を荒されてゐるやうな氣がするので、ベツ／＼と忌ま／＼しげに唾を吐き捨てた。

『さういへば、この間、小松先生や、兄が土州の航海術修業生を、どつさりひきつれて來たとか聞いたが……』

新吾は、兄の吉之助に似て茫漠とした風采をしてゐる。

『おはん、唯、聞いたゞけか。しかし、今の浪士は航海術修業生とは見えんぞ。』
『うん、さういへばのう。』

新吾は、間もなく十郎太と別れて家に歸ると、兄の部屋には來客があるらしい。何氣なくのぞいて見ると、さつき見た風變りの武士があるではないか！

而も、小机に肱をつき、片手に漢藉のひらいたのを持ち、長い兩足は不作法に投げ出してゐる。吉之助は大きな背中を見せて、何かせつせと書き物をしてゐるらしい。

新吾は、その光景にひきつけられ、物珍らしく息を殺して眺めてゐた。

『——或ひと問ふ、釋氏も亦務めて心を養ふ。然れども之を要するに以て天下を治む可からざるは何ぞや。先生曰く、吾が儒は心を養ふも、未だ嘗て事物を離卻せず、只だ天則の自然に順ふ：就ち是れ功夫なり。釋氏は卻て盡く事物を斷たんことを要め、心を把つて幻想と看做し：なる程なア。』

この珍客は龍馬であつたが、小聲で讀んでゐたのを止めて、ちよつと西郷の方を見て、何か訊きた。

『……さうではす、——漸く虚寂に入り去き了りて……。』

西郷は、慇懃に教へて、又、机に向ふ。

『——漸く虚寂に去き了りて、世間と些子の交渉無きが若し。天下を治む可らざる所以なり。……か。』

と、龍馬は『傳習録』の一節をとびくりに讀んでゐたのを止め、

『西郷先生！ 矢張、知行合一、格物至知ですか。』

『ワハハハツ……。まア、そんなところではすか。坂本さんの讀み方も知行合一で早うではすな。』

西郷は、やうやくこちらへ向き直つた。

『いや、私の讀み方は、我流の摘み讀みなので……』

龍馬は、足をひつこめて坐り直した。

この時、ひよいと新吾が顔を出した。

『おゝ、新吾どんか、丁度よかつた。』

西郷は、弟をひき合せた。そして、

『胡蝶丸で一緒にお連れ申した土州の坂本龍馬先生ぢや。お見知り置きを願ふておけ。』

『ハッ！これは坂本先生で……』

新吾は、初めて知る龍馬の風采を改めて見直す氣持になつた。

『土州の船乗りで、一向に何も知らぬ男です。これから、西郷先生に就いていろ／＼と教へをうける考へでやつて來ました。皆さんにもよろしくお願ひいたします。』

龍馬は、武士らしく、かしまつて挨拶を返した。

『いや、先生も弟子もごはせん。——『朋友に處するに、務めて相下れば則ち益を得、相上げば則ち損す、——ぢや。新吾どん、よう心得ておかつしやい。』

西郷は、かういつておいて、

『坂本さん、これから小松帶刀どんのところへ推しかけよう。海門丸を購入に長崎へ行って貰はねばならので、その打合はせもごはす。』

『長崎へ……？ それぢや、わしの連中もあちらへやつて航海させますかな。』

龍馬は、もうそんな先のことを考へてゐた。

『それはようごはすかな。』

西郷は、幕府の長州再征に反対し、薩藩の面目上、それを牽制する爲に、藩論をまとめようと

して歸つてゐるのであつた。龍馬は、それに滿腔の賛意を表してゐるのみか、この際、薩長の眼をどうかして緩和し、聯合にまで進めたいといふ考へから、機會あることに、胡蝶丸の船中でも、西郷を初め、小松帶刀、大山彦八に説き勸めて來たのである。

『坂本先生！』

新吾が改つた調子で呼びかけた。

『土州侯には、毛利家と御姻戚との理由を以て奥方を幕府に對する申譯から城外に離別させられたと聞き及びますが、坂本先生の御意見は如何ですか。』

『あゝ、それですか。藩公の御臺所俊子の方は、毛利家の御養女でありますな。ところが、藩祖山内一豊公は關ヶ原の戦後、遠州掛川六萬石から、土州高知二十萬石の太守になりました。容堂公初め、徳川に對する恩儀を深く思はれるのは當然のことです。しかし……』

龍馬は、こゝで力を入れて、

『今度のこと、俊子の方を城外へ別居遊ばされたといふことは幕府に對してははなく、天朝様への謝罪のためとわたくしはとつて居ります。たとへ、どのやうな行き違ひがあらうとも、長州は御所へ向つて鐵砲を打ち込んだのですから、これだけは何ともいひ開きの辭はありますまい。さ

うではござらぬか。』

と、熱辯を以て述べた。

一座には、自ら嚴肅の空氣が漲つた。

『……御尤もで……』

新吾は、自ら恥づるやうに俯向いた。

『西郷先生！ さうぢやありませんか。わたしはさうとりたいのぢやが……』

龍馬は、元の無難な態度に返つた時、新しい客の顔が見えた。

『拙者は有村國彦と申すもの。以後よろしく……』

西郷に紹介されて、客はかう挨拶した。

有村も、龍馬のだらしない恰好には、ちよつと驚いたらしく、ちろ／＼と眺めてゐる。

『……土州といふても、みんなわたくしのやうにばたらげた人間ばかりぢやないから、どうか、

そのおつもりで……。ハハハツ……』

龍馬は、だん／＼碎けて來た。ばたらげたとは、風體を構はぬといふ土州の方言である。

『いや、拙者などは世間知らずの田舎者、是非、當今の御時世に處する志士の道について御高見

を伺ひたいと存じまして……』

有村は、いやにぎごちない調子になつた。

『そりや、眼の前にいゝお手本がありますぞ。この西郷先生ぢや。ハハハツ……』

龍馬は、磊落に笑つて、

『有村さん、わたしは無學者でしてな、氣の利いたことは何一ついへん男ですよ。しかし、わたくしは、一死皇國に殉ずる覺悟で、狂瀾を既^よ到に回すことに唯、努むるのみだと信じて居りますよ。』

『うむ／＼、さうでござす。』

西郷は、大きく、ゆつくりとうなづいてから、

『坂本さん、お國名物のヨサロイ節は、どうでござす？』

と、水に向けた。

『ハハハ……。いや、それよか、お國の歌を……』

龍馬は、西郷の測り知れぬ後進に對する優しさと、抱擁力の深く大なることを感じながら、小松帶刀邸訪問の支度にとりかゝつたのであつた。

『西郷先生！もうようがすか。しほ時は……』

加治屋町の西郷邸に逗留してゐる龍馬は、眼のあたり、西郷の藩論をまとめるために盡力する様子を見てゐるので、衷心同情しながらも心は急ぐのである。

『……しびれをきらしなされたか。』

西郷は、一向に動ぜぬ態度で、

『おゝ、武市瑞山先生もたうとう御切腹とな……？』

と、話頭を轉じて顔をしかめた。

『——在獄殆んど二年近くで。武市等を救はん爲には、國元では二十三士の野根山義舉もあつたわけだが、事ならずして、一同殺されてしまつたさうです。これで、土佐勤王黨も滅びました。中岡等長州へ走つたもの達だけが生きのびたやうなわけで……』

龍馬は、うっかり感傷に捉はれさうになつたのを振り拂つて、

『西郷先生！わしは、もう長州へ立ちますぞ。御盡力で藩論も決定したのではありませぬか。』

『先づ、どうやら。しかし、長州の宿怨はなか／＼釋けぬでござせうな。薩摩の船は壇の浦までは這入れるが、馬關には着けることが出来ぬ。忽ち、打ち放さうと待ち構へてゐるとあつてはなア。』

『それは、ちと取越苦勞でせう。西郷先生にも似合はぬ。先生の御誠意、御洪量が物をいふのです。——薩摩は、斷然、無名の師たる長州再征には加擔いたさぬ。會桑が怒つてゐようが、却つて幸ひぢや。薩摩は、皇國を護るにあり、國內相闘ぐが如きは、その志にあらず、——これだけの大誠意、大精神に桂や、高杉などが動かされない筈はないと信じます。』

龍馬は、飽くまでいひ張つた。

『さういふことになりませうかな。』

『この春には、京都の吉井幸輔氏の宿で土方楠左衛門に邂逅して、五卿の御心中並に長州の意向も探りました。——長州に身を寄せた尊攘派は、薩摩のこれまでの公武合體をこそ憎んで居れ、西郷吉之助殿の正氣には深く心服して居ることです。——坂本龍馬は、どうしても行きますぞ。太宰府から馬關へと……』

『しょ／＼しびれがきましたかな。』

『いや、わしは、熟柿主義ですが、手を打つべき時には打たんといかんと思ふ。——西郷先生、御興をあげて下さい。あんたこそ、しびれがきれませんか。』

『……長崎の方は、うまく行きましたか。』

又しても、西郷は顧みて他をいふ。

『神戸海軍所の残黨ですか。それはもう、なか／＼都合がいゝ工合に行きました。龜山に『社中』を置くことになりました。二十人ばかりでごろ／＼して居ります。』

『小松とも相談しまして手當も出し、汽船も都合つけるやうにいたしませう。』

『それは忝けない。わたくしの考へでは、どん／＼船を乗り廻して、追ひ／＼は商社のやうなものもつくり、經濟も獨立して働かせたいのです。』

『それは、まことに結構！ あの長崎といふところは、三兩二分もあれば十分下宿が出来る。圓山の女郎が二分ぢや。ワハハハツ……』

『いや、さうなれば、わしも金はこしらへますぞ。』

龍馬は、またしても、そんな話に釣り込まれて行く自分に氣づいて、

『何と申しても、坂本龍馬は、土佐に生れて中立の地位にあるのですから、兩藩の間を周旋する

には好都合なんですから……』

『……豊範公の奥方を城外に別居せしめたといふので、長州の激派がゑらう怒つて居ると聞きませんが、坂本さん、それは大丈夫でござるか。』

『これは、どうも、お氣がこまかい！ 西郷先生にはほと／＼感心仕つた。』

龍馬は、とてもかなげぬと、思はず弱音を吐いてしまった。

『坂本さん！』

西郷は、毅然と容を正した。

『はッ……？』

龍馬は、この時、西郷の二つの巨眼が炬火のやうに自分を見てゐるのに氣づいた。

『……吉之助の料簡、篤と御諒解下されましたか。あり難う。何ん事もお任せ申します。——これで、大久保どん、小松どんの骨折で元治元年二月二十二日沖之永良部島から御赦免になつて、鬼界ヶ島にゐた村田新八どんと一緒に歸つた甲斐があつたといふものでござせうな。』

『さうです／＼、久光公の御眞意も、全くそこにあつたのでせう。あの伏見一件で西郷先生は、全く浪士鎮撫のために奔走されたのを、久光公初め誤解されたのでせうが、先生は、何一語辯解

もなさらずに黙々として君命に従ふて島へ渡られたと承つて居りますが、人間の誠意といふものは、いつか知られるものですな。——先生あらば、薩長聯合の業たるや、又、易々たるものぢやとわしは考へて居りますぞ。』

龍馬の顔には感激の色が溢れ、聲は凜々として響いた。

『忝けない！ 坂本さん、荆棘の道ぢや。用心して行つて下さう。』

西郷の巨眼が怪しく光つた。

聯合往來

龍馬は、陸路をとつて單身太宰府に出た。澤卿は生野義舉に乗り出したまゝ亡命の身であり、錦小路卿は病んで逝き長州落ちの七卿も今は五卿となつて、こゝに遷されてゐるので、その御機嫌奉伺をかねて参殿したのである。

五卿方も長州の招賢閣その他では頗る歡待をうけたが、五藩が警護となつて太宰府へ遷座あつて後は、幕府の鼻息を伺ふ筑前藩によつて、罪人扱ひにされ、竹垣を結つて、立札にも『五人衆』など、書かれたものだが、今では改められてゐた。

薩藩士の嚴重な警固があつて、従士の面々は規律を守り、武技を練り、學問を勵んでゐる様子を見ると、龍馬は意を強くし、従士の一人安藝守衛を伴ふて、下ノ關へと出發したのであつた。

下ノ關につくと白石正一郎を訪ね、桂小五郎との會見を時田小輔を通して督促したのである。そして、綿屋彌兵衛方に宿をとつて待つてゐると、土方楠左衛門が訪ねて来て、實は、中岡慎太郎が龍馬のことは知らず、西郷ひつ張り出し役となつて鹿兒島へ向つた後だといふ。

土方は、龍馬より二つ三つ年上で、土佐勤王黨の最初からの一人なのだが、龍馬とは特に親密といふ程ではなかつた。しかし、京都方面での長州再征説に刺激され薩長聯合の必要を痛感し中岡と共に長州へ下つてゐただけに、共鳴から忽ち二人は結びつけられてしまつた。

土方も、とうとう龍馬の宿へ移つて来た。

『わしも、大丈夫と思つてやつて来たが、蛤御門の變以來の長州の薩摩に對する怨み方が想像以上らしい。尤も、薩摩の方でも、門司の海は三途の川で、そこを渡つたら最後生きてはかへれんといふとる位だが……』

龍馬には一抹の不安が抱かれてゐたのだ。

『それは確かにある。しかし、長州だつて、さう大きな口は利けんのだ。姉小路卿の暗殺は薩摩

の田中新兵衛といふことになつたが、本人は自刃してゐるし、はつきりした證據があつたわけぢやない。ところが、あの時の長州派は、薩州人は何をやり出すか知れんからよろしく制裁を加ふべしといふことになつて、十八藩の有志を寺町通りの淨華院に召集して協議したものだ。その決議は、薩州人は、今後一切九門内の往來罷りならんといふのぢやつた。』

土方は、思ひ出したやうにいつて、

『ところが、唯一人敢然として反對したものがあつた。天王山で死んだ眞木和泉なんだ。先生のいふには薩摩のやうな大藩になれば、一人や二人の怪しからん奴は居るかも知れぬ。田中新兵衛一人の爲にそんな決議をするのはどういふものか。況んや、九門内の往來云々といふことになる。』

と大問題ぢや。一體、誰にさういふ権利があるといふわけぢやつたが、それはもみ消されとうとう内奏して實行になつたことがある。』

『ぢや、兩方いたちごつこか。しかし、西郷君の誠意が通ずれば、桂なども動かせると思ふんだが……』

龍馬は、思案にくれたやうにいつたが、

『實際、今度は長州もそれを感じていゝのだ。長州再征などの愚學には薩摩は一兵たりとも出さ

んといつてゐる。西郷、大久保のみではない。吉井、岩下、伊知地盡く然りぢや。』

と、力をこめていつた。

『そこを一つ桂に説いてくれ給へよ。』

『むろんぢや。わしは西郷から一切を任されてやつて來たんだが、庄屋どんの光次が、あの巨人を易々やすやすとつれて來ることが出来るかな。』

『今更、どうも仕方がない。中岡は行つてしまつたんだから……。しかし、中岡は西郷をひどく尊敬してゐるし、京都での默契もあるらしい。』

『ぢや、わしの來方が遅れたのか。』

『しかし、早く桂に會つて貰ひたいな。』

『うん……』

『中岡はな、坂本の機敏にはかなはんが、綿密さに於ては乃公の方が勝るといふつて居つたぞ。ハハハ……』

『しかし、上手の手から水が漏るつてこともあるからな。わしの機敏も、中岡が旅先で愚圖おろかなつてゐると欠伸かたむねをするよ。——西郷吉之助と來たら、あの圖體を動かすにも一骨だらうからな。』

龍馬は、矢張中岡の使命を危ぶむ口吻であつた。

桂小五郎は、京都の騒動の後、但馬に落ちのびて潜伏してゐたが、やつと先頃愛人の幾松を伴ふて歸藩したばかりであつた。

すべての事志と違ひ蹉跌した桂だが、何といつても藩主父子の信任は厚く、歸藩の挨拶に城中に伺候すると、種々あり難い御言葉があつて、木戸貫治と名を改めることになつた。といふのは、昔、毛利の家來に桂といふ勇士があつて、たえず、隣國と干戈を交へてゐた時代だから、到るところに壘や柵が設けられたが、その桂の柵内へは、如何なる敵も恐れをなして、踰えることが出来なかつた。それで、誰いふとなく木戸（柵）の桂々と呼ぶやうになり、強いことの代名詞のやうになつたといふ傳説がある。それで、桂小五郎の名も今ではひろく知られ、恐れられてゐるから、木戸にでも變へたらといふやうなことになつたのである。桂は、ひどく面目を施したわけだつた。

そんな場合であつたから、龍馬が桂を説くには丁度よかつた。話はとん／＼拍子に進み、桂の方でも西郷の來るのを待つ氣持になつた。それで、すつかり氣をよくした土方は、何を措いても、五卿に幸先さいさきのよい知らせをせねばならぬといつて太宰府へと向つた。

龍馬は、高杉晋作にも會ひたかつたが、先に九州の亡命先からかへり、電光石火の如く俗論黨を撃破し、得意の絶頂にあつた高杉も、再び俗論黨の擡頭に今は國にゐられなくなり四國方面へ行つてもぐつてゐるとのことと會へなかつた。

龍馬は、桂が自分の顔さへ見ると、『西郷君はまだですか。』と催促するのには弱つたが、それだけに張合があるともいへる。ところが、白石正一郎の宅へ出張つて話し込んでゐると、直ぐ船のつくやうになつてゐる白石邸へ中岡慎太郎が單身飄然としてかへつて來たのである。見ると浮かぬ顔をしてゐる。

『おゝ、中岡！ 御苦勞だつた。わしと行き違ひになつたが、首尾はどうぢやつた！』

龍馬は、離れの濡れ縁から悄然としてあがつて來る中岡に急きこんで訊いた。

『……西郷君は、どこです？ まだ、船の中ですか。』

桂は、不安さうな眼をして、しきりに海の方を見などしながら苛ら立つてゐる。

『どうも残念でした。よんどころない支障によつて西郷君と同道して來ることが出来なくなりました。』

中岡は、心から自責にたえないやうに、ぐつたりとして謝るやうにいつた。

『一體、どうしたんだ。え、中岡……?』

龍馬も、気が氣ぢやない。

『……一通りお聞き下さい。十五日に鹿兒島を西郷君等と一緒に船で立ちまして、十八日に佐賀ノ關まで来ました。すると、京都から島津公の急命が参りまして、西郷君は、こちらへ廻ることを中止せねばならぬ次第となりました。むろん、わたくしは百方説いては見ましたが、西郷君は、君命だからと申して、近道をとつて、土佐沖の方へ出て上京することになつて別れてしまつたのです。それで、わたくしは、止むなく漁船を僱つてこちらへかへつたわけです。西郷君の事情も察せねばなりません、わたくしの無力は何とお叱りをうけましても甘受せねばならんと恐縮して居ります。』

中岡は、切ない氣持を桂に訴へるやうにいつた。

『西郷君は、何と申しました? 唯、それつきりだつたのですか。』

桂は、もう怒りの爲に、聲も身體もぶる／＼顫えてゐる。

『いや、西郷君は、委細は、いづれゆつくりと京都で、——と申しました。』

『いづれ、ゆつくりと、——ハハハ……』

桂は、皮肉に笑つて、

『薩摩は、いつも、この手でごまかし居るのぢや。しかし、それでは、まるで話が違ふ。——坂本さん! もう見込みはありませんぞ。われ／＼は待ちばけを食はされてたゞけぢやありませんか。こんな無誠意はあるもんぢやない!』

桂は、烈火のやうに怒り出した。今にも、席を蹴つて山口へかへつて行きさうな權幕である。

『桂さん、まア、さう短氣にならないで下さい。』

龍馬は、慌てゝ宥めにかゝつた。

『短氣にさせるのは一體誰なんです?』

桂は、額に蒼筋立てて、ぶり／＼してゐる。

『いや、桂さん、西郷の上洛を勝手氣儘とつては氣の毒ですよ。西郷はあゝ見えても、なかなか遠謀深慮のある男です。薩藩の代表者と目せられる自分が、今、長州を訪問して、巨頭に會つたといふことが風説となるのを恐れた點もあるでせう。お互ひの損ですからな。それに、幕府の長州再征は着々として進んで居つて、將軍は既に入京して居る。西郷に急行せよとの君命は、恐らくその邊のことに深いつながりがあるのぢやないかと察せられる。』

龍馬は、早口で喋りつゞけ、

『西郷は、わたくしが鹿兒島を立ちます時に何事もあなたにお任せ申す！と、唯一言力強くいつたのみで、外には何にもいはなかつたのです。その後へ中岡君が誘ひ出しに行つてくれたわけですが、今度のやうな突發的な支障の爲に來られなくなつてしまつた。——ところで、西郷の心事は、坂本に一任しておいたのだから、それで大丈夫だらう。それより當面の急に應じて上洛する方が大切だと判斷して行つたのだと解したいですなア。——中岡！西郷の上洛は、長州再征問題にからまる用件ではないのか？』

と、中岡を顧みた。

『さうだ。おれも、さうと察して來た。』

中岡は、力を得たやうに言下に應じた。

しかし、桂の憤りは、納まらないらしく、

『……拙者には、どうも信じられません。失禮ながら、暫らく中座を……』

と、いつて、ぶいと起つた。

二人は、呆つ氣にとられたが、龍馬は、別にひきとめようともしなかつた。そして、

『中岡！大丈夫だから心配するな。怒つてくれる方が却つていゝのぢや。今度、御機嫌がなほつた時は本物ぢやからな。』

と、さゝやくやうにいつて、首をすくめて笑つた。

『のんきなことをいつてらア。』

中岡は、相變らず心配げな顔色をして、苦笑を浮べた。

伏見寺田屋の一室で、龍馬は、長州から太宰府の方へと出發する中岡慎太郎と、それに隨行する田中顯助の三人で別盃を酌んでゐた。

顯助は、(後の田中光顯)十津川へ亡命してゐたのを中岡に呼び出されて來たので、大和天誅組で死んだ那須信吾の甥であつた。

龍馬は、薩長聯合策の爲の運動で、京都と長州の間を往來し、随分、骨を折つた甲斐があつて、西郷等薩州派と、桂等長州派との感情の齟齬もやつと融和し、中岡等を先發させ、後から薩摩側の使者として黒田了介(後の清隆)をやり、桂を京都へ迎へる段取りにまで漕ぎつけたので、今

は、肩の重荷も半ばは卸せたやうな寛ぎは感じられた。

『…兎に角、もう一步のところだ。』

龍馬は、盃を中岡に獻した。

すると、田中がひきとるやうに、

『土州を加へて、三藩聯合とは行かんのですか。』

と、二十三歳の若い志士は昂然としていつた。

『われら土州派は、大切なとりもち役をやつとるところぢやないか。』

中岡が、たしなめるやうにいつた。

『まア、飲めよ！』

龍馬は、議論はうるさいといひたげな顔をして、田中にすゝめ、

『なか／＼一旦縛れた人間の感情を解くといふやつはむつかしいからのう。おんしたち長州へ下つたら慎重にやつてくれよ。頼む！』

と、龍馬らしくもない苦勞性を見せた。

『よろしく。安心して下さい。』

田中は、きつぱりといつて、

『僕が一つ詩吟をやりますぞ。間崎滄浪先生絶命の詩です。——丈夫今日死何ぞ悲マン、略々見ル聖朝舊儀ニ復スルヲ、一事猶餘リアリ千歳ノ恨ミ、京幾未ダ樹テズ柏章ノ旗……』

と、感傷的な聲で吟じた。

『ふむ、なる程……』

龍馬は、盃をふくみながらうなづいた。

『……吉村、那須、平井、武市、——みんな死んでしまった。京幾に柏章旗を樹てるのを見ないうちにな。』

中岡は、ほろりとしていつた。

『しかしのう。山内家の柏章の紋旗を京幾に樹てる樹てんの時代は、もう過ぎたぞ。今は一藩のことにこだはる時ぢやない。長州のお歴々にも、その弊があるから困るよ。』

龍馬は、不満さうにいつた。

中岡と田中は、それには答へなかつた。

273 來 往 合 聯
『坂本！ 以藏が斬首されたこと知つとるか。』

中岡が突然思ひ出したやうにいつた。

『さうぢやてのう。京都奉行に捕へられて高知へ送られたことは、わしが鹿兒島へ行く前にきいたと思ふが……』

『あいつも、終りを完ふしなかつた。究追に屈して同志のことまで白状してしまつたといふが、無宿者の鐵造となつては斬罪梟首も仕方のない運命ぢやつたらうな。』

『田中新兵衛の方が、それに比べると最後は立派だつたわけか。』

龍馬は、感慨深げにいつた。

三人は、いゝ加減飲み食ひをして一休みすると、中岡と田中は、倉皇として、河船で大阪へと下つて行つた。

夜になると、燈火は消え、屋を繞つて蟲の音が降るやうにきこえて来る。

龍馬は、しん／＼と頭腦が澄みわたるやうな秋氣を感じながら、薩長聯合の將來について、い／＼と考へを廻らし始めた。

下ノ關で、西郷の不信に憤然として山口へ去つた桂を宥め、下ノ關戦争の爲にイギリスからかへつてゐた井上聞多や、伊藤俊輔を熱心に説き、やつと妥結を見たのは、三つの條件であつた。

一、京都の薩藩から使者を以て長州の代表者を迎へさせること。

一、長州で必要な銃砲汽船等を薩藩の名儀で購入の便を計らせること。

一、萬一の場合の必要を援けんため、長州から糧米を薩藩に讓渡すること。

これは、特に長州の満足するところとなつた。長州では、今、幕軍再征の擧に備へる爲に兵器や、軍艦の購入は切迫した問題だつたが、長崎奉行の干渉で不可能になつてゐた。そこで、龍馬は、薩藩の名儀で購入することに話をまとめ、井上や、伊藤は歡んで長崎へ行き、龍馬の方では『社中』の近藤長次郎に命じて、薩摩の小松帯刀に説き、兩者の間を斡旋させ、イギリスの商人ガラバに交渉することになつたのである。しかし、まだ、緒についたばかりだから、この先、どのやうな難問題が降つて湧いて来るか知れたものではなかつた。

龍馬は、ふと、廊下に人の来る氣配を感じた。そのすり足の歩き方はどうも女らしい。しかし、お龍にしては、おとなし過ぎるやうだ。まるで、忍び寄るやうな、また、ためらひがちのやうに感じられる。と、かすかに噁り泣いてゐるやうな聲がしたので、

『誰だい、そこへ來たのは……？』

と、何氣ない調子でいつて見た。

だが返事もなく、立ち去る様子もない。龍馬は、お龍がからかつてゐるのだなと悟つたので、窃つと立つて、障子の方へ行きかけた。すると、先でも感づいたものか、こそくと逃げ出したらしい。龍馬は、そつと障子を少しばかりあけて見ると、廊下を彼方へするくとまるで足のないう幽霊のやうに走り去る若い女の後ろ姿を認めた。はて、誰だらうと考へたが、どうも見當がつかなかつた。

暫らくすると、お龍が、怪訝さうな顔をしてのぞきこみ、

『あら、妹がこちらへ来てゐた筈ですけれど……』

と、訊くのであつた。

『誰かさつき廊下へ来た氣配はしてゐたが、妹つて誰のことだい？』

『おとみですよ。是非、あなたに聞いて頂きたいことがあると申しまして、わざ／＼来た辯に一體どこへかくれてしまつたんでせう？』

『をかしいな。わしに用があるなんて……？』

龍馬には、腑に落ちないことであつた。

おとみといふのは、悪漢の爲に大阪の遊廓に賣られたのをお龍の力によつてとりもどされた直

ぐ下の妹である。勝麟太郎の世話になる筈であつたのを、自分から辭退して、老母のところへら／＼してゐるのである。思ひがけぬ災厄に會つてから、ひどく心を痛め、時々、尼になりたいなど、いつて、老母や、お龍を困らせてゐる娘であつた。

『これは内密の話ですけれど……』

お龍は、いつか火鉢の傍へやつて来て、

『いつか、千屋さんが、船から逃げ出してこちらへ来てゐたことがあるでせう。』

『うむ、黒龍丸に幕府の手入れがありさうになつた時、わしが命じたのだ。』

『その頃に、おとみに何かいつたさうですよ。』

『千屋寅之助が、おとみさんに……？ 口説きでもしたのか。』

『え、夫婦約束をしてくれとおつしやつたんですつて……』

『へえ、それは又、お龍さんをさしおいて失禮なことを……』

『戯談ぢやありませんよ。』

お龍は、龍馬の腕をびしやりと平手で打つて、

『あの子は、自分は傷ものになつたんだから、人の妻たる資格はないと思ひ込んでゐるのです』

よ。ですから、千屋さんの御親切には感謝してゐても、それだけに苦しいらしいんです。尤も、君江が大きくなつたら、わたしの代りに貰つてやつて下さいと千屋さんに願つたのださうですがね。』

『君江さんは、まだ、子供ぢやないか。』

『でも、さうでもしなければ、おとみとしては気がすまなかつたんでせう。それで、千屋さんのことをあなたにうちあけてお頼みするつもりだつたのでせうけれど、矢張、きまりがわるくて逃げ出してしまつたんでせうよ。』

『さうか。こいつは、どうも、薩長聯合策よりも事面倒だが、千屋の方はわしがひきうけたから安心するやうにおとみさんに傳へて下さい。嫌なら断はるし、好きならまゝとめてあげるし、どうにでもしてあげるよ。』

龍馬は、無雑作にいつた。

折柄、おとせの呼ぶ聲がしたので、お龍は、あ、あ、と出て行つてしまつた。

兎角、用事をこしらへては、お龍が龍馬の傍へ來てゐるので、もう二人の仲は公然の秘密のやうになつてしまひ、おとせも、萬事好意的に氣を配つてゐるのであつた。

黒田了介は、土州の池内藏太を伴ひ、薩摩の使者として長州入りをしたまではよかつたが藩論がぐらついてゐて、桂小五郎は動きさうになく、山口の宿で立ち往生の形になつてしまつた。黒田は風采に構はぬ男で、粗末な身装に汚れた袴を穿き、木刀を一本ぶつ込んでの使節ぶりだつた。桂は、その薄汚いのに顔をしかめ、わざ／＼新調の袴一着を送つた程である。

豪酒の黒田は、無聊を酒で慰めながら、不平ばかりいつてゐる。

『何に、高杉晋作が強硬論の張本人ぢやて？ 異人の靴は頂いても、薩摩とは和解出来んとぬかすとは一體どげん理由ぢや。山口の城が壊はされずにすんだのは西郷どんのお蔭ぢやなか！ 鐵砲や、軍艦が買へるのも、薩摩のお蔭ぢやなか！ あーん……』

黒田は、酔つて來ると、木劍をふり廻しながら怒鳴つて、池内藏太や、ちよい／＼慰めに訪ねて來る田中謙助を惱ましてゐるのであつた。

先發の中岡は、太宰府から馬關へかへつて、さうした事情を知ると猛烈な運動を始めた。田中顯助なども動員して、桂、伊藤、井上を初め、山縣その他の領袖を歴訪したり、密會を催ふした

りしたが、どうも九門の事變で薩摩の爲にひどい目に合はされた長州の諸隊士は憤恨骨に徹してゐるらしく、それが大變邪魔をしてゐることがはつきりして來た。

そこで、中岡はこれは、先づ高杉晋作を口説かねばならぬと考へ、既に、面識もあり、知遇を感じてゐる田中を連れ、下ノ關の假寓へ訪ねて行つた。そこへは、奇兵隊の豪傑達もやつてくれれば、高杉の愛人のおうのも出入してゐる。

高杉は、ひどく中岡を買つてゐたので直ぐ引見してくれた。かつて、頭を圓めて『東行』と名乗つた記念の髪がのびたまゝの散ぎりである。

中岡は、挨拶もそこ／＼に膝を進め、

『高杉さん！ あんたは怪しからん。さう、旋毛を曲げずに、早く藩論をまとめて下さい。天下の大事を傍觀して水をさすやうなことは、わが東行先生の眞意ぢやありませんまい？』

と、さつくばらんにきり出した。

高杉は心持眼の釣りあがつた鋭い細面に、皮肉な微笑をたゞえながら、

『藩論は定つて居りますよ。——防長二州は、たとへ焼土と化すとも四境に迫らんとする幕軍に手向つて戦ふ！ これが、拙者のまとめた藩論ですよ。』

と、まるで、啖呵をきるやうな小氣味のいい調子でいつた。

『いや、薩摩の使者がわざ／＼山口へ來て、桂さんの京都行をしばれをきらして待つて居るので、それが、容易に實行出來ぬのは奇兵隊を率ゐるあんたの反對があるからだといふぢやありませんか。』

『桂は、そんなに、愚圖々々してゐますかな。どうです、幾松夫人を口説いたら？ 里心がついて京都が戀しくなるかも知れん。ハハ……』

『高杉さん！ 戲談でなく一つ眞劍になつて下さいよ。あんたは、西郷君ともお會ひになつて肝膽相照らした仲ぢやありませんか。』

『それは、坂本龍馬先生の方でせう？』

『坂本は勿論ですが、あんたも、薩摩に對する舊怨は兎に角として西郷の誠意は信じて居るでせう。』

中岡は、誠心誠意をもつて説きたてた。

『……王陽明先生は、日、亭午に到つて曉鐘を撞く、——とか何んとか詩にいつてゐるが、東行は、夕陽に及んでも、まだ、曉鐘がつけんやうな人間ですからな。ハハハ……』

『高杉先生！それは違ひませう。』

田中が、黙りかねて、嚙みつくやうにいつて、

『先生は、天下の憂ひに先んじて憂ひ、天未だ曙ならざるに曉鐘を撞いて居られる先覺の士ぢやありませんか。』

と、なぢつた。

『しかし、あまり早く撞くのもなア。』

高杉は、にや／＼してゐる。

『高杉先生！』

田中は、再び呼びかけ、

『この前、お目にかゝりました時には、天下の英雄は變なき時は非人乞食となつて潜匿すべし。變ある時は龍の如く行ふべし、——とおつしやいましたぞ。』

と、たゞみかけるやうにいつた。

常に天馬空を行くが如く、疾風枯葉を捲くが如き行動をなす高杉晋作としては、如何にも煮えきらない、旋毛曲りな態度であつた。しかも、薩長聯合の意義を、どの程度辨へてゐるか分らな

いあ、いさである。——律義で、正義一圖の中岡の性格としては、とてもたへがたい氣持であつた。

ところが、高杉には、深い考へがあつたのである。

そこへ、慌しく福田良助がやつて來た。福田は、遊撃隊以來の襟度あり、雅量に富む勇士であつた。

『京都から坂本龍馬氏が參られたさうぢや。』

福田は、重大事を報告するやうにいつた。

『お、坂本が來てくれましたか。』

中岡は、百萬の援兵を得たやうに歡んだ。

『龍先生か、それは／＼……』

高杉も、うれしさうな笑顔になつた。

『桂先生と一緒に白石邸に居られます。早速、御一同お越し下さいとの事です。』

福田は、どこまでも几帳面で、張りきつてゐる。

そこで、一同は、直ちに白石邸に出かけた。

龍馬は、高杉の顔を見ると、

『お、御健勝で何より、——時に高杉君、いよ／＼お互ひに起つべき時が來ましたぞ。』

と、頭からおつかぶせるやうにいつて、

『西郷吉之助は、鹿兒島へかへりました。藩論を微動だもしないやうに固める爲です。藩主忠義公は、追つて精兵を率ゐて闕下に進まれるさうです。長州も約を守つて、速かに糧米を送つて下さい。さうせんと時機がおくれる。千載一遇の時機を逸する。高杉君どうです。さア、一刻も早く……』

と、まくしたて、一座のものを烟に巻いてしまつた。

一座の心は、それで高揚され、浮き立つた。むつ／＼してゐた桂の顔もやつとほぐれて來た。

『坂本さんの辯口にかゝつてはなア。』

高杉も、愉快さうにいつて、

『こちらの準備も既に出來て居ります。どうか安心して下さい。わたしは、何故、薩摩が、兵を提げて起たんか、それを齒がゆく思つてゐたところなんです。』

と、ちよつと、中岡の方へわびるやうな眼光を送つた。

桂は、高杉を呼んで別室へ起つた。高杉の意見を確める爲であつた。

『桂さん、僕は、——長州は義によつて立つ國だから、薩摩の力を借りなければ出來ぬやうなことはやる必要はない。見よ、長州は、幕軍を恐れて、薩摩の助力を乞ふてゐると囁はれたらどうする。だから薩長聯合なんて、たはけたことだなんて硬論を唱へて來ましたね。』

高杉は、座蒲團もないところに對座して桂に向つて話しかけ、

『しかし、正直いへばぢや。僕が硬論を吐いて動かなかつたのは、一藩の士氣に關するからです。あんたや、僕が先に立つて聯合々々と騒ぎ出したら、味方にまで心底を見透かされて闘志を失ひ、攻撃精神がゆるんでしまふからです。そのところは、あんたも分つてゐてくれるとは思ふんだが……』

と、正直なところをうちあけた。

『では、拙者は京都へ參るとするかな。』

桂は、やうやく決心がついた。

『それは行かなくちや。薩摩の決意が定つた以上は、長州がおくれをとつてなるものですか。』
『なる程！ 坂本君のいふところは嘘ではあるまいな？』

『かうなれば、こちらから進んで行く立派な口を利いて下さい。長州は、いつでも、他におくれをとつたことがないのですから……』

『よし！』

桂は、咄嗟の間に、遊撃隊、御盾隊、奇兵隊から各々一名づゝの護衛の従士を選んで京都へ出發することに決心したのである。

そこで、二人は、得意さうな顔をして元の座敷へかへると、龍馬が手を拍つて迎へた。

龍馬は、中岡のやうに、もう執拗に問ひつめて行くやうなことはしないで、高杉を相手に盛んに戯談をとばし始めるのであつた。

第七章

平生蘭交分外情 今朝有約已斜陽

倚門倚戸相俟久 春夜長於秋夜長

—西郷 南洲—

ピストルと花嫁

慶應二年の正月早々をもつて上京する桂を見送つておいて、後から龍馬は悠々と下ノ關を辭したが、同行は池内藏太と、今度京阪視察の藩命を帯びて派遣される長州の三吉慎藏との三人であつた。

ところが大阪へついて、薩摩屋敷を訪ねて見ると、留守居役の木内傳内が、『坂本氏危険ぢや。』と、警告した。龍馬も怪しんで、早速、大阪城代の大久保越中守（忠寛）を訪ねて質して見ると、長藩士と上洛するから見つかり次第龍馬を捕へよとの命令をうけてゐるから要心するがい。部署も既に成つてゐるとの返答である。これは、大久保の好意からの注意であつた。

それを知ると、三吉も、池内も大變心配し出した。今の龍馬は、薩長聯合にとつて大切な人間であるが、その代り、幕府にとつては、大敵であるわけだから、危険は當然であつた。

『三吉君！ わしは、高杉君が餞別にくれた短銃があるからいゝが、あんたらは何か支度して下らうよ。』

龍馬は、飽くまで萬難を排して上京する決心なのである。

昨年だつたか、嵐山あたりで新選組の猛者たちが堵列してゐるところにぶつゝかり、ひどく驚いたが、龍馬は路傍にゐた犬の仔をからかひながら抱きあげ、頼すりなどしながら、とうとう彼等をごまかして通り過ぎたことがあつた。龍馬には、そんな機智と、大膽と、悪戯つけがあるから何とかするだらうとは思ふが、傍のものは矢張心配なのである。

だから、池内藏太は元込銃の用意をしたし、三吉は寺町通りをあさつて手頃の短銃を手に入れて來た。ところが、龍馬はちゃんと手管をきめて薩藩士としての川船通行手形の用意をしてゐたので、八軒屋から乗り込んだ船には、丸に十字の旗が立てゝあるつて、誰一人怪しむものはなかつた。

しかし、淀川筋の警戒は、聞きしにまさる嚴重を極めたもので、川の中にも、ところ／＼船留

所が出来てゐてとり調べをやる。そこも、無事に通過して伏見に上つたが、それから先がまた危険なので、三吉慎藏だけは寺田屋に潜伏させ、龍馬は、池内を伴ふて京都へと乗り込んだ。

二十三日の晩になると、龍馬は、ぶらりと伏見に戻つて來た。桂小五郎は、一昨日京都を出發して大阪へ向つたといふ。三吉は、のこ／＼と潜伏の部屋から這ひ出して來た。

『三吉君、よろこんで下さい。萬事は上首尾に行つた。薩藩邸で西郷、小松、大久保を初め、桂さんも加はつて、目出度く聯合の密約が出来ましたぞ。これからいよいよ第二段目ぢや。』

龍馬は、ゆつくり胡座をかき、如何にも得意らしく上機嫌である。

『それは／＼、大變な骨折でしたらう。これで、苦心が酬みられたわけですから。』

三吉も、ほつ／＼として、晴れ／＼とした顔に歡喜が溢れた。

『いや、實は、また桂さんがごねよつてな。わしの行き方がちよつと遅かつたら、すんでのことに袂を拂つて歸つてしまふところぢやつた。下ノ關で西郷君が違約したのを怒つて山口へかへつた時のやうにな。——どうも、長州の人は氣が短くて、薩摩の先生は氣が長くて……ハハハ……』

『どうして、又、桂さん怒つたんです？』

『きいて見れば無理もないところもあるがね。薩摩の諸公は、毎日毎夜、桂さんを下へもおかぬ

丁重極るもてなしぶり、到れり盡せりの御馳走責めぢや、その癖、待てど暮せど一向肝腎なめ、話にはふれやらん。全く、薩長聯合のレの字も口に出さんといふわけぢや。徒らに時はたち日は過ぎる。桂さん、額に蒼筋たて、薩の狸、又おれをだまし居つた！ と怒り出したわけぢや。」

『そこへ、坂本先生が御登場となつたわけですか。』

『わしだつたら、且つ談じ、且つ御馳走になるところぢやが、桂さんのやうに、育ちが違ふとさうは行かんものらしい。』

『しかし、西郷、小松の諸先生は、どうしてそんな風なんですか。まさか、お國風といふわけでもないでせう？』

『いや、話といふものはすぐに埒があくやうではいかんのかも知れん。念には念を入れ、慎重の上にも慎重を期すべきものなんだらう。尤も、わしが行つて西郷君に詰ると、なる程、御尤もでござす！ と来て、それで、もうおしまひなんです。』

『まるで、禪問答ですね。』

『わしは、前からよくいふんだが、西郷といふ人物は大きく叩けば大きく鳴り、小さく叩けば小さく鳴り、まるで底の知れないところがある。馬鹿といへば、あれだけの大馬鹿はゐないだらう

し……』

『ぢや、桂さんの叩きやうが小さかつたのでせう？』

『いや、桂さんは、叩きも、ひつかきもせんのだぢや。空模様をぢつと眺めてござつたらしい。ハハ……』

龍馬は、快活に笑つて、

『時に、三吉君御退屈でしたらう。どうも、お氣の毒でした。あしたは、薩摩屋敷へ御案内いたします。まだ、天下晴れてといふわけには行くまいが、親類づき合ひのつもりで出かけて下さい。』
『ありがたう。こゝでは、お龍さんが、いろ／＼話をしてくれるので、わたしは、まるで、坐ながらにして京阪の視察が出来たやうなもんでした。』

『それはよかつたなア。ぢや、今夜は、祝盃といふことにして寢酒にありつきますかな。』

龍馬は、威勢よくパン／＼と手を拍つた。

お龍の聲らしい返事が、響きに應ずるやうに聞えて来た。

——幸ひ、追撃して来る奴はなかつた。龍馬と、三吉は、突如襲つた二十人ばかりの捕り方を相手に闘つて、寺田屋の裏庭へ飛び下り、隣家を二軒ばかり雨戸をつき破つて通りぬけ、町の水門をくぐり、やつとこゝまで逃げのびたのであつた。

風呂場から飛び出したまゝの、一糸まとはぬお龍が急を知らせ、襖を二三枚つき倒し、早く逃げて下さいと叫んだ飛鳥のやうな早業が、まだ、眼先にちらつてゐる。その警告がもう、ちよつと遅れてゐたら、あの白刃と槍襖に、二人はどうなつてゐたか知れなう。

『……三吉君！ よくやつた。あの武者振りの凄じさは……』
龍馬は、息もきれ／＼にいつた。

『坂本さん、お怪我は大丈夫ですか。』
三吉の呼吸もはづんでゐる。

こゝは、河岸に近い材木置場で、追つ手を避けるには屈竟のかくれ場であつた。

龍馬は、いはれて氣づくくと血糊のべとつく自分の手を握つた。指の間から温かい血が噴き出してゐる。木香に交つて血腥い臭ひが鼻をつく。

『五六發は、打ちましたね。』

『……まだ、打つつもりで、彈丸ごめしようとしたが、もう手が利かなかつた！』

『敵は、怖がつて近寄れなかつたやうだ。』

『確かに二三人には命中した筈だが、——梯子段から轉げ落ちた奴もあつたつな。』

『火鉢を投げた奴があつたが、火事は大丈夫でせうか。』

三吉は、氣遣はしげにいつた。

『わしは、短銃を落して來たかな、どうも不覺ぢやつた。』

『ぢや、高杉の贈り物が、あなたの身代りになつたのでせう。』

ほそ／＼と二人は、材木が縦に横に積み重ねられた中に身を潜めて語り合つた。材木の間から仰ぐと、寒空にちか／＼と星屑が瞬いてゐるのが、冷たく眼に沁み、空の色はほの／＼と曉け方近いことを見せてゐる。

犬の遠吠えが、だん／＼近くなつてゐたが、又、遠ざかつて行つた。

龍馬は、唯一人勇敢に踏み込んで來た敵の爲に、右手の親指の根本を殺がれ、左手の親指の節を斬り割られ、その上、人さし指の本の節をやられてゐるので、だん／＼と疼きが劇しくなつて來た。短銃發火の際の火傷もしてゐるらしくヒリ／＼する。

三吉から應急の手當に布を裂いて、縛つて貰ひながら、
『あの際に、三吉君は、手早く袴を穿いたんだからゑらいよ。わしも穿かうと思つたが、あまり離れてゐてとれなかつた。』

と、龍馬は、敬服しながら、ぐつたりと材木に背をよせかけた。

龍馬も同様だが、三吉は袴を穿いたのはいゝが、湯上りの浴衣の上に、綿入の寝衣を重ねた恰好だつた。さすがは武士の嗜みで、それに刀をさして來ることは忘れなかつた。水門を潜つた時に濡らした裾が氣持わるく足にべつたりからみついてゐる。

激闘の後の疲労と傷の痛み、——三吉もかすり傷や、打ち身は免れなかつた、——それが、次第に心の落ちつきをとりかへして來るにつれ、曉天の寒氣と一緒になつて、劇しく襲つて來た。

いつまでも、こんなところに愚圖ついてはゐられない。龍馬は、あたりがだん／＼明るくなつて來たので、のび上つて外を眺めなどしながら、

『かうつと、向ふ河岸は確か長州屋敷と因州屋敷かな。すると、薩摩屋敷は、この川に沿ふて、眞つ直ぐに行つて、右に折れて、——さうだ、精々五六丁に過ぎん。』
と、希望を得たやうにつぶやいた。

『しかし、坂本さん！』

三吉は、急に絶望的な聲で、

『もう駄目でせう。この狭い土地ぢや、とつくに網は張り廻されて、蟻の這ひ出る隙もないでせう。あいつらは、伏見奉行の興力や、新選組だらうが、今に、こゝへもやつて來るでせう。來れば一戦交へることは辭さんが、いつそのこと潔く……。わたしは、自裁した方が氣が利いてゐると思ふ。』

と、いひ出した。

『何、何を氣の弱いことをいふんです。今、死ぬ位なら、あの時逃げるやうに勧めはせん。伏見奉行や、新選組が威張つたつて、こゝには薩摩屋敷が控えてゐますぞ。わしは、もう薩摩屋敷ではちやんと分つてゐると思ふ。分れば捨てゝおきません。三吉君！ 自裁するやうな決心があるなら、一つ走り薩摩屋敷へ駆けつけて下さらんか。わしは、怪我もしてゐるし、顔を知られてゐて工合がわるいから、お互ひに、こんなことで捨てる安つばい命ぢやないからな。さア、一つ元氣を出して下さい。』

『さうですか。ぢや、行きませうか。』

『留守居役大山彦八殿と怒鳴つて貰へば、直ぐ分ります、何、わけはありません。』
『行くとすれば早い方が……』

三吉は、忽ち心機一轉し、自分のことよりも、龍馬を救はねばならぬといふ氣持が湧き上り、そこをぬけ出ると、川へ下りて血痕を洗ひ淨め、頬冠りに尻端折り、路傍の破れ草鞋を足につっかけ、朝の早い商人か、百姓のやうな恰好で、薩摩屋敷へと急いだのであつた。

薩摩屋敷では、お龍の勇敢な注進によつて、激闘の眞つ最中に早くも知れ、徹宵、警戒して来たところへ、三吉が飛び込んで行つたので、待つてましたとばかりで、早速、小舟が仕立てられ、舳へさきには薩摩の旗をたて陸を避けて、三吉を案内人に現場へ向つて漕ぎ出したのであつた。

激痛と、出血の爲に氣が遠くなりかけてゐた龍馬も、迎への三吉みよしと薩士によつて移されると氣持がしつかりして来た。果して想像してゐたやうに、お龍が重圍をくゞりぬけて、逸早く薩摩屋敷へと駆けつけてゐたことをきかされ、龍馬は、思はず、感謝の涙がこみあげて来るのを覺えた。午後になると、京都から薩摩の吉井幸輔が騎馬でやつて来るし、つゞいて、西郷から差廻しの醫師木原泰雲が一個小隊の兵と共にやつて来た。診察によると負傷は大したことはないが動脈をやられたので出血が多いのだといふ。

『西郷どんは、大層な立腹でな、自ら兵を率ゐて、伏見奉行所へかけ合ひに出かけるといふてきかんのを、おいが止めてやつて來申した。』

吉井は、血の氣の失せた龍馬の蒼ざめた顔を氣の毒さうにのぞきこみながらいつた。

『いや、あり難う！ 何から何まで薩摩の方々のお蔭です。三吉君みよしのこともよろしく頼みます。』
龍馬は、心の中で幾度となく頭を下げる思ひでいつた。そして、ふと見ると、誰が氣を利かせて許したのか、お龍がやつて来て、まめくしく、そこらを動き廻つてゐるのが、ちらと眼に映つた。龍馬は、うれしくもあるが、ちよつと照れないわけには行かなかつた。

吉井幸輔が、一小隊の兵を引きつれて、龍馬の駕籠を警護し、京都の薩邸で静養させる爲に伏見をたつたのは、二月一日のことであつた。この一行の中に、お龍が交つてゐたことを知るものは、さうたんとはなかつたに違ひない。お龍は、看護の爲に従つて行つたのであつた。

中岡慎太郎は、龍馬の遭難を知り、遙るく九州太宰府から上つて來た。下ノ關では桂と會見し、廣島では長州再征の序幕となるべき幕府と談判の模様を探つたりして一路東上したのであ

つた。

薩邸の一室に見舞ふと、両手は繻帯に包まれてゐるからではあらうが、女氣のない管の場所に、若いなまめかしい女性がゐて、龍馬は、子供のやうに薬を吞ませて貰つたりしてゐるのを見ると、『こりや驚き申した。美人の看病付か。』

と、さすがの中岡も、驚いて、つい、いつてしまつたが、

『おゝ、寺田屋のお龍さんだつたのか。これは、どうも失禮。今度は大變なお働きだつたさうで、わたしも友人としてお禮を申しあげます。』

と、慌てゝ挨拶のやり直しをやつた。

『中岡！ おんしの期待に十分添ひ得なかつたかも知れんが、まア、歡んで貰ひたい。』

龍馬は、自分のことはいはずに、薩長聯合のことを語つた。

お龍は、ちよつと挨拶したが、眞つ赤になつて起つて行つた。

『いや、よく纏めてくれた。若し、あの時、おんしの上洛が遅れたら、今頃、どう狂つてゐたか知れん。しかし、今度の遭難は何といつて慰めていゝか分らん。』

中岡は、涙含んでゐる。

『わしはいゝが、三吉君は捲き添えを食つて氣の毒ぢやつたよ。怪我といつては大したこともないが、ごつたすつたしてゐるうちに、先生、虎の子の旅費がふつ飛んでしまつたといつてこぼしてござるのでな。』

『ハハ……。しかし、そんなことはどうにかなる。無事だつたのが何よりぢや。』

『ところで、天下の形勢はどうか。かうして、寝てゐると脾肉の嘆に堪えんよ。』

龍馬は、うらめしさうに、繻帯にふくらんだ大きな手を眺めながらいつた。

『まア、暫らく温和しくして居れ。こゝで西郷どんを相手にして居れば天を相手にして居るやうなもんぢやらう。アハハ……。』

中岡は、慰め有めた。

今や、幕府方は、長州再征と、條約勅許の二つの難問題で内輪揉めばかりしてゐるところへ薩摩の硬論の壓力がある。しかし、幕府の面目からいつても他藩への牽制からいつても、長州の再征は不可避の問題である。長州を挫き、薩摩を屈服させねば、朝廷を牽じての幕權による新政建設はむつかしいのである。フランスの勢力を借りてといふ密謀は不成功に終つてゐるが、薩摩が利用しさうなイギリスの態度も氣にかゝるし、それに外國の勢力を使つて、條約勅許問題の解決

を計らうとする幕府の苦肉の策も、無視出来ないものである。さういふ中であつて、小笠原豊岐守は全權を與へられて、軍艦に乗り込み、廣島へ長州との談判に進發してゐるのであつた。雨か、嵐か、これも薩長聯合の如何によつてどうなるか分らぬ雲行きである。

中岡は、龍馬の容體に安心して、三吉など、近くに宿をとり、ちよい／＼見舞ふと共に、三條實美卿の邸へも伺候して、太宰府の御消息を傳へ、薩長聯合の威力によつて、毛利赦免、五郷の復讐も間近にあるだらうと述べ、奥方を慰めるなど何かと動いてゐた。

ところが、中岡もかねてから知つてはゐたが、お龍のことが意外にも問題になつてゐるのである。もう夫婦のやうに思ひ込んでゐるものもあれば、どうもお安くないぞと蔭口を利いてゐるものもある。中岡は、それを氣にして、お龍の氣をひいて見ると、『坂本さんには、お加尾さんがあるのでせう?』とか、『どこかにいゝ人をかくしてゐるのでせう?』とか、未だに拗ねたやうな、ちらすやうなことばかりをいふ。それで、中岡は、單刀直入に龍馬に進言して見る氣になつた。

『時に坂本! もういゝ加減に披露してもいゝのぢやないか。その方が、薩摩の連中に對しても工合がよからうと思ふ。寺田屋の女將に異存のある筈はなからうし、——それにな、おんしが癒つたら、西郷や、吉井が口を揃えて鹿兒島へ連れて行きたいといふとるから、今が一番いゝ時機

だと思ふ。』

『何の披露ぢや。』

『知れたことよ。聯合ぢや。おんしとお龍さんとの聯合のかための披露ぢや。』

『おんしは、長府屋太兵衛さんとの娘さんどうした?』

長府屋は、下ノ關での中岡の定宿で、そこに艶種が秘められてゐたのである。

『馬鹿! そんなことを訊く奴があるか。おれは、國に歴とした妻も子もあるぢやないか。おんしも情人とか妾とかいふんぢやない、恩人のお嬢さんぢや。ちやんと嫁さんに貰ふんだよ。』

『嫁さんか。それは大變だな。』

『こいつ、とぼけるなよ。』

『さすがに、きまりがわるいなア。』

『きまりがわるい癖に、よく手ばなしでのろけたり、見せつけたりしとるなア。』

中岡は、びし／＼やりこめ、

『おれは、直ぐに西郷や、吉井にたのむぞ。善は急げぢや。こゝで披露もするんだ。萬事、龍馬式に早いところをやらうよ。』

『お龍坊は、わしの恩人も同様だから、そりや、何とかしなければならんとは思つてゐたがね。』
『だから、嫁さんに貰へといふんぢやないか。これ以上の恩返しはないぢやらう。——何んだ、
相惚れの癖に！』

中岡は、いやに照れ、恐縮し、弱りきつてゐる龍馬を尻目に立ち上り、

『おんしから、お龍さんによくいふておけよ。おれは、西郷に談判をしちやるから……』
と、真剣にいつたが、

『西郷どんは、故郷の力士の要石か、古の安倍貞任のやうな大兵ぢやが、あれでなか／＼人情
家だから、この角力はおれの勝ちに定つとる。安心しておれよ。』

と、さも満足さうに出つて行つた。

間もなく、薩藩邸の龍馬の一室には、春蘭のやうな香が漂ふやうになつた。お龍は、天下晴れ
ての龍馬の妻であり、西郷によつて、名も輦子と改められたのである。

今年正月二十三日の夜の難に遭し時この龍女があればこそ龍馬の命は助かりたり京の屋敷
に引取て後は小松西郷などにも申私妻と爲知候此よし兄にも御申可被遣候此の女乙大姉をし
て眞の姉のようにあひたがり候何卒帯か衣物か一つ此者へ御遣し下され度候此者内々願ひ出

で候……

龍馬は、もうこんな便りを家郷の姉に書き送つてゐた。後には『十分大家にて暮し候もの故、
花生、香をきき、茶の湯などは致し候へども炊ぎ奉公する事は出来ず』と、育ちと性格を語り、
小笠原流諸禮式の本や、『新葉集』のやうな歌書などを送るやうにと頼んでやつたりした。新婚
の歡びは、龍馬の心を一層陽氣にさせてゐるのであつた。

歡樂から戦争へ

薩藩の汽船三邦丸には、珍らしい顔ぶれの豪傑連が乗り込んでゐた。西郷、小松、吉井を初め、
他藩のものでは、坂本、中岡、三吉、それに、紅一點お龍の輦子夫人などだから振つてゐる。お
龍は、眉を剃り、齒を染め、赤い手柄に、髷といふ水も滴たるやうな艶めかしい花嫁ぶりであつ
た。それでゐて、お快で、刎ねつ返りで、お喋りのお龍のことだから、龍馬のみか、みんなに甘
つたれて、船の中を駆け廻つたり、機關室をのぞき込んだり、まるで、船の女王様であり、駄々
つ子女房であつた。

武家の女房などいふものは、しとやかなもの、つゝましやかなものと定つてゐて、他の男と

は徒らに口も利かぬものとなつてゐる時代に、お龍のやうな女は珍らしい。龍馬との對照としては不似合ではないやうなもの、その龍馬が、大阪あたりの商家の若旦那が密月旅行か、物見遊散に出かけるやうな、至極のんびりした開けつ放しなお氣分であるのだから、これは、どうしても桁外れの新夫婦といはねばならぬ。——中岡などは、天下の爲に一身を捧ぐる爲に離縁を申し送つたりしてゐるのだから、自分の女房も一度位は、温泉廻りにでもつれてやつておけば、萬一の場合に出會つても悔ひはなかつたらうにと、龍馬の自由な氣持が、今更、羨ましく思はれる位であつた。

早春であるが、船が瀬戸内海の美しい繪のやうな島々の間を、穩かな海上を迂るやうに過ぎる頃になると、空は霞み、手にとるやうに島の家や、人や、牛や、花がうららかな日光の下に眺められた。實際、手のばして見たくなつたり、聲を出して呼びかけたいやうな氣持を誰しも覺えるのである。

お龍は、波の上を低く飛ぶ海鳥を短銃で打つのだといつて、龍馬を手古摺らせたりするのであつた。

西郷等は、薩長聯合の報告やら、軍備やらの爲に鹿兒島へかへるのであるが、龍馬夫婦に靜養

をかねさせ、客分として伴つて行く考へなのであつた。しかし、西郷の頭腦には一つの懸念があつた。といふのは、土州の小笠原唯八と、後藤象二郎が、鹿兒島へ使して、何事か公武合體に就いての打合せをしたらしく、今度の召還も、それに關聯があるらしく思はれる節があるからであつた。

だが、西郷は、そんなことを龍馬や、中岡に向つては、おくびにも出すやうなことはなかつた。そして、例によつて茫々漠々として何を考へてゐるのか分らなかつたが、お龍のことを軀子さんと呼ぶのは西郷一人で、時には、鹿兒島の名所案内のやうなことを、何くれと話してきかせたりしてゐる。まことに、春風駘蕩たる感じであつた。

船が下ノ關へ着くと、そこで、中岡と三吉は下りなければならなかつた。すると、西郷の心遣ひで、お別れの盃を汲み交すことになつた。大きな朱塗りの木盃などが持ち出された。

三吉は、遭難を共にした龍馬夫婦のこと故惜別を感じ冷酒を呷るとひどく感傷的になつて、『……第五條、兵士共上國の上、橋、會、桑等も如レ只今次第にて、勿體なくも朝廷を擁し奉り、正義に抗し周旋盡力の道を遮り候時は終に及レ決戦候外無之との事、——實に愉快ですよ。』と、薩長盟約の自分の控えをとり出して、それを朗々と讀みあげて感激するのである。

『いや、三吉君！——冤罪も御免の上は、双方誠心を以て相合し皇國の爲碎身盡力に候事は不_レ及_レ申……には、長州も満足してくれたらうなア。』

中岡が、最後の項を読み上げた。

『もういゝく、勿體なくて涙がこぼれます。』

三吉は、劇しく手をふつた。

西郷は、ゆつくりと盃を口まで運ぶが、呑みもしないで元へおきなどしながら、他の連中の話に、『うむ』とか、『なる程』とかいつて合槌を打つのみである。

下ノ關へ着くと、中岡と三吉は下船したが、三吉は、わざ／＼赤間石の硯などを土産に届けて來たりして好意を示した。

船が長崎へ寄港した時、龍馬は、龜山の『社中』のことが氣になつてゐたが、わざと上陸しないつもりであつた。上杉宗次郎（近藤長次郎）が社中から詰め腹を切らせられ、今は生きてゐないことも胸を痛ませることなのでふれたくなかつたし、一旦、鹿兒島へ行つてからひきかへし、『社中』の仕事や組織についても、ゆつくり考へたり、相談したい爲であつた。

ところが、三邦丸が船がよりすると、龍馬の一行が乗船してゐることをかぎつけた千屋寅之助

が、絆を就つてやつて來たのである。千屋は、菅野覺兵衛と變名してゐた。

『あら、千屋さん！』

甲板へ昇つて來た千屋を、お龍は素早く見つけた。

『おゝ……』

千屋は、なつかしさうに駆け寄つて來た。

お龍とは、たえて久しい邂逅だつたが、今は、海にのみ生きてゐる千屋は、如何にもそれによさはしい風采、口吻で、以前のやうな浪士の感じとは、ずつと違つたものになつてゐた。それが、お龍をひきつけた。

『よく分つたな。『社中』のことは一番氣がよりだつたが、どうも手のひけん大仕事をやつてゐた上に怪我をしたりしてな。今度は、こんな看病人をつれての鹿兒島行きになつたわけだよ。西郷君や、小松君の勧めなんだから、あつちで静養しながら、ゆつくり『社中』の發展策を講ずるつもりなんぢや。』

龍馬は、お龍をこんな風に紹介していつた。

『伏見での御遭難には、びつくりさせられました。しかし、よかつたですなア。あなたのお働き

も分つて、一同讚嘆して居ります。』

千屋は、二人にいつた。

『そのお蔭で、こんなに遠くへ来てしまひましたわ。でも、長崎つて、随分、變つた景色のいいところのやうね。』

お龍は、はしやいで、千屋から指呼の間に見える出島のオランダ屋敷や、山の手の寺々の墓や、港にゐる唐船などの説明をきながら、悦に入つてゐる。

暫らくしてから、龍馬は、自分の傷に觸られるやうな思ひをしながら、千屋から近藤長次郎の事件と、最後の模様をきいた。近藤の上杉宗次郎は、龍馬の不在中は代理をしてゐたが、薩長聯合にからんで、長州の爲に随分斡旋をした。薩藩の名儀で購入してやつたユニオン號を、長州は乙丑丸と改めようとしたが、近藤は、自分の方へ利用しようとして一と問題起つた。もとく井上聞多との間にユニオン號改め『櫻島丸』についての條約を締結してゐたので、船價三萬七千七百兩を長州側で未拂なのを口實に、近藤はひき渡しを拒絶し、『社中』の通商航海用に供し、一朝事ある時には武装して薩長兩藩のために使ふつもりだつたから、それはそれでよかつたし、龍馬が調停し條約を改めさせ、無事に解決してゐたのであつた。

ところが、近藤は、長藩から汽船購入その他の盡力によつて莫大の謝禮をせしめて私したのみか、イギリスの商人ガラバに謀つて英國遊學を企て、既に船に乗らうとさへしたのであつた。慾と、名譽と、野心にひつかまつて、『社中』最初の盟約に背き、規律を紊り、同志に裏切らうとした近藤の行爲は許され難いことであつた。

龍馬の甥の高松太郎は、矢張、長州の爲にミネーゲール小銃四千三百挺を手に入れてやつたりしてゐるが、近藤のやうに私慾には利用してゐないのである。それだけでも、近藤の專横と、貪慾は、餘計に問題になるわけであつた。かくて、一同の前で詮議をうけ、澤村惣之丞が盟約は重んずべし、規律は死を以て守るべしと迫つた爲に、さすがの近藤も深く割腹を遂げたのであつた。高杉晋作なども、一見して得難き英才と稱揚した程の近藤だつたから、龍馬としても、片腕を失つたやうな思ひがするのだが、しかし、今更とりかへしはつかないことだつた。

『……術數餘りありて至誠足らずか。中岡の爪の垢でも煎じて吞ませたかつたよ。しかし、身から出た錆だから今更致し方がないわ。』

龍馬は、悵然として嘆息したが、

『さうはいふものゝ、近藤もゑらかつた！ 澤村もゑらかつた！ いや、『社中』はよく鐵の如

き盟約を守り通してくれた。あり難う。

『……社中一同は、決して、近藤を憎んでは居りません。遺憾は鴻臺寺に手厚く葬つて供養をしてやりました。』

『それはよかつた。近藤も瞑することが出来たらう。』

『彼の雅號をとつて、『梅花書屋居士之墓』といふ墓標も建てゝやりました。』

『ほう、それは上出来だつたのう。』

龍馬は、千屋の双眼に涙が光つてゐるのを見のがさなかつた。そして、鴻臺寺の方向を訊いて、頭を下げ黙禱を凝らしたのであつた。

南國の眞つ赤な夕陽が、すべての物象を燃え立たせ、ゆるゆるに照らし、さまざまの形の船は幻のやうである。お龍の眼も好奇の憧れに燃えてゐた。——千屋がお龍の方ばかり氣にして、何かいひたさうにしてゐるのは、おとみのことを劇しく思ひ浮べてゐる爲であつたらう。

西郷等は、遂に甲板に姿を見せなかつた。

鹿兒島では、龍馬夫婦は、小松帯刀邸の客だつたが、何といつても、そこは少し窮屈であつた。小松は、度量寛洪でよく人を容れ、人材を愛するたちであつて、なか／＼親切ではあるが、野人の龍馬を相手に、自分のわがまゝを發揮して、思ふ存分に遊ぶには、お龍には、ちと烟たかつたのも無理はない。島津家の名族肝付家から出て小松を繼ぎ、久光に信任せられ、家老といふ地位にゐる酒れ者の帯刀その人には、自然と、さう感じさせるところもあつたのだ。

幸ひ、吉井幸藏が、粹を利かせたのか、すつかり健康が恢復するまで温泉へでも行つてはどうかといふ勧めに、二人は渡りに船と、早速、小松邸を辭して、日當山から、潮濱へと温泉場を廻り、十日餘りも過ぎてから、霧島山の温泉へ着いた。それでも、お龍は、まだ、歡樂に飽きないやうな顔をしてゐた。山が高いので、こゝは少し寒く、名にし負ふ霧島つゞじはまだ時期は早かつた。龍馬がどうかして口笛を吹くと、

お前さんとなら

わしやどこまでも

からすをらばぬ

國までも

アリヤセー

コリヤセー

と、お龍は鹿兒島で覺えた俗語をうたつて羽目を外しては、龍馬にからかけられた。

『……三吉さんが居れば面白かつたでせうにね。』

お龍は、友をほしがつた。

『三吉君はな、大變有卦に入つてゐるらしい。あれから山口へかへると、殿様から新刀一振を頂き、長府侯からは藏米二十石とかの加増になり、六七十石とりの身分に出世したさうな。』

『へーえ、そんなことが……？』

『西郷さんへ、さういつて手紙を寄進したさうだから嘘ではあるまい。』

『でも、どういふ理由で、そんな恩典に預つたんでせう？』

『そりや、伏見寺田屋に於ける働きもあれば、薩長聯合についての御思召もあるだらうね。』

『あら〜、それはこつちのことぢやありませんか。薩長聯合は、あなたのお力でせう？』

『さア、どうだか、中岡慎太郎先生もあるからね。いや、一番最初に唱へ出したのは、九門の戦ひの後で、筑前の早川勇と、月形洗藏が、薩摩は長州をいちめ過ぎた。これは禮を盡して仲直り

をせねばならんといひ出したのが元ださうだが……』

『早川だか、月形だか知りませんが、あなたが、ちやんと話をまとめて、おまけに命がけのひと目にあつて……』

『ぢや、萬事は、鞍子の方の御手柄としておけばよろしうございませう。』

龍馬は、おひやらかすやうにいつたが、

『しかし、われ〜一介の浪士が、今日あらん限りのもてなしをうけ、かうして、吞氣に療養が出来て遊びくらししたりしてゐられることを考へると勿體ない。不平などいへば冥利が盡きる。新刀一振や、藏米何石とは比べることは出来んでせうな。』

『さういへばさうですね。——小松先生も、よく〜考へるといふ方ですね。何となく氣づまりだつたけれど……』

『小松帯刀はいゝ人さ。西郷と大久保との間になくてはならぬ人だ。寺田屋騒動の起る前には浪士煽動の癪で上意討ちになりかねなかつた西郷を命乞ひして島流しに減刑させたのも小松だ。君命に忠實な爲に初めは久光公の公武合體派だつたが、今ではすっかり考へが變つてゐる。大久保や、伊知地を抜擢したのもあの人だつたさうだからなア。』

『たゞ面白いところが少いのですね。』

『そりや當然さ、われ／＼の遊び相手が役目ぢやないからな。ハハハ……』

『ふふ……』

お龍は、不服さうに鼻先でせゝら笑つた。

霧島の温泉で、そんなことを話し合つて遊び、頂上にある有名な青銅でつくられた『天の逆鋒』を見に出かけ、両側の天狗そつくりの面と鼻の恰好に笑ひ興じたりして、後で、靈域を汚したやうで気がさすので合掌して、おわびをしたりしたが、そんなこんなで、すっかり健康を恢復して鹿兒島へかへつて來ると、意外な悲報に接したのであつた。

それは、薩藩後援の下にプロシアの商人から七千八百兩で購入したスクーネル型のワイル・ウエクス號の命名式を舉行する爲に、『社中』の連中が乗り込み、かねての約束を果す爲に長州から薩摩へ送り届ける糧米五百石を積んだユニオン號が廻航するのを幸ひ、曳航を頼んで出發したところが、五島附近で暴風に遭ひ、激浪の爲に曳索を切斷するの止むなき状態になつた。漂流をつづけたワイル・ウエクス號は、鹽屋崎の沖合で遂に沈没してしまつた。乗組の船長以下、下士官水夫十二人のうち、島に泳ぎついて助つたのは、僅かに三人のみといふのである。

船長の池内藏太は、溺死者の一人であつた。

『彼は死んだか。畢竟、不熟練の結果でもあつたらうが、残念なことをしたなア。』

龍馬は、永かつた歡樂の夢も一瞬に醒めたやうに感じた。

僅か二十六歳の若い身空で、南海の藻屑と消えた池内藏太は好漢であつた。夙に、土佐勤王黨の一人であつたし、大和天誅組にも加はつたし、長州に遁れて後は禁門の變にも闘つたし、高杉晋作の遊撃隊に入つて長州俗論黨を討つやうなこともやつた。薩州の使者黒田了介に隨行して長州へ下つた時は、龍馬と一緒になつて、三吉と三人で上洛の途についたこともあつた。幾度か、死地に入りながら、不思議に助つて來た彼が、『社中』の船と最後を共にしようとは、龍馬にとつては、近藤の場合とは違つて、又、別様の哀惜に堪えないのは當然のことであつた。

龍馬は、何が何でも早く長崎へ行かねばならぬといふ氣持になつた。

ところが、西郷は、長州からの糧米五百石は折角ではあるが、そつくり返上したいといひ出したのである。龍馬は、又、桂等の思惑を恐れて礎と困つたが、その眞意は、今や、幕軍が長防の四境に迫りつゝある時だから、盟藩の財物をおめ／＼と納むべき時ではあるまい。送り返して用途に當てゝ貰ふのが武士の道だといふにあつたので、龍馬は、それもさうだと思ひ返し、糧米を

積んで来たユニオン號にお龍と共に乗り込み慌しく鹿兒島を辭したのであつた。

長崎へ着いたのは、六月の四日であつたが、龍馬は、久しぶりで『社中』の面々に會ひ、お龍を改めて紹介し、同志と共に五島に渡つて、池内藏太以下の英靈を弔ひ、鹽屋崎の海邊に墓標を建て、かへつて来た。さて、これから、お龍を長崎に残して、長州へ糧米を返しに行かねばならぬのである。

お龍には、長崎の事々物々がすべてもの珍らしく、龜山社中の豪傑連の生活ぶりにも興味もてた。かねての念願であつた月琴の稽古も、いゝ師匠があるといふので小踊りして歡び、暫らく龍馬と別れて暮すことも、さほどつらいとは思はれなかつた。

龍馬は、再び、ユニオン號の櫻島丸に乗り込んで下ノ關へ向つたのである。だん／＼近づくにつれて長州の戦争の噂が高まり出した。千屋寅之助、石田英吉その他の『社中』が乗り込んでゐるので、戦争の豫想話などが頻りとはづむ。

下ノ關に着くと早速、桂に會つて西郷の主意を話すと、果して、甚だしく不機嫌である。既に、幕軍と戦火を交へてゐるので、桂もいら／＼してゐたせいもあらうが、悪くすると、又しても薩摩の不信問題が再燃しさうである。

『桂さん！物は考へやうで、糧米を送るのも禮なれば、時に辭するのも義ぢやありませんか。』

謙信は、わざ／＼信玄に鹽を送りましたぞ！今、西郷君等は長州へ何かを贈りたい氣持で一杯なんでせう。しかし、あちらも、同盟によつて戦備をしなければならん。かうなると、折角の贈り物だが、どうか、そちらで兵糧米にでもして頂きたいといふ氣にもならうぢやありませんか。』

龍馬は、熱辯をもつて説いた。

『しかし、折角、積み出したものを今更……』

桂は、依然として佛頂面をしてゐる。

『ぢや、いつそ捨て、おきませうか。——あの貴重な穀物を船底で腐らせるのは惜しいし、いや、海中へでも投げこみますか。ハハハ……』

龍馬は、諧謔を弄し、

『海へ入れてやつたところで、魚は鶏と違ひますから歡びませんぞ。』

桂は、無言でにやりと笑つた。

『桂さん、それぢや、われ／＼の『龜山社中』の方へ頂いときますか。何分にも大食ひが多いから食扶持に助ります。いや、若し、われ／＼も戦争に参加しなければならんとも限らんから、こ

れからは、船の糧米も必要です。』

『坂本君！ それがいゝやうだな。西郷君の眞意は分つたが、たとへほしくとも、一旦出したものはひつこめられないよ。あなたの『社中』へ寄附させよう。いゝやうに處分して下さい。』

桂の顔色は和らぎ、やつと折れて出た。

『それでは遠慮なく頂戴と定めませう。その代り、『社中』にもうんと働かせませうぞ。』

龍馬は、これではつとしたが、考へて見れば、一場の笑ひ話で、糧米五百石を濡れ手で粟の握みどりをしたやうな結果になつた。『棚から牡丹餅とは、このことか、いや、他人のやんどし禪で角力をとつた嫌ひがあるかな。』と、龍馬は、心の中で、くすぐつたく思つた。

龍馬等の豫想が的中して、遂に戦火に捲き込まれてしまつた。海の上にて海戦にぶつゝかつたのだから、もう避けようはなかつた。

龍馬は、直ちに船上にあつて戦闘準備を命じ、千屋を船將に、石田英吉を砲手長に、その他も、それ／＼部署を定めた。何といつても海戦は初めてのことだから、一同張りきつてゐる。

『諸君！ いよ／＼、われ／＼も戦争をやることになつたぞ。』

龍馬は、甲板に乗組員を集合させて一場の演説を始めた。和服に袴、それに靴を穿いてゐる長身の龍馬は、すつくと立つてゐるのだ。頭髮のほつれを海風に吹きなびかせ、斷雲を洩れる蒼い月光を浴びて、一層凄壯な印象を興へる。

『各方面の情報を合はせて見ると、幕軍は海陸両面から長防二州を攻略せんとしてゐるのだ。馬鹿ないくさを始めたものだが、やるどころまでやるより外はないだらう。高杉晋作君は、奇兵隊の參謀もかねてゐるが海軍總督としてオテント號の丙寅丸を初め、癸亥丸、丙辰丸、庚申丸を指揮してゐるやうだ。——幕軍の九州口は、小笠原豊岐守が總大將になつて凡そ二萬の兵を率ゐ、小倉に陣取つて下ノ關へ打ち入らうとしてゐるらしい。これは陸の方だが、海からは軍艦五隻で田ノ浦臺場へ打ちかけ、陸兵千名ばかりが上陸したともいはれてゐる。長州勢では朝霧に乗じて門司、田の浦方面を砲撃したが、船軍は不幸撃破されたので高杉君が嚇怒して兵四百を率ゐて上陸し敵を敗走させたといふが、まだ、確かなことは分らぬ。——何れにしても、この戦ひは、幕府對長防だけのものではないことは、諸君にも分つてゐるだらう。われ／＼は、兵庫海軍操練所で鍛へ、龜山社中で練つた腕前を今ぞ見せるべき時に際會してゐるのだ。この一戦は文明の利器を

應用した殆ど最初の海戦といふていいのだから、唯、勝つだけではないかん。ようく経験を今後に生かすやうに注意すべきで、これが、將來の日本海軍の基礎ともなるわれ／＼の使命であることを忘れんやうに頼む。——この中には、まだ、海軍には未熟で敵の力を知らぬところから懸念するものがあるかも知れんが、たとへ幕府の軍艦に劣るところがあつても、そこは意氣と精神で行くべきで、これが高杉流でもあり、坂本式でもあるのだ。今、ひよいと思ひ出したが勝麟太郎先生の『兵學小述』といふ本の中には、『兵の強弱は大道の明、不明に係る、敢て練兵、機器に非るなり、規則器械の如きは其人に在つて役に立つ、其人なければ、其の規則、器械なく死物となる、活用に適せず』と書かれてあるが、全く、その久に萬事はかゝてゐるのだ。これは、何も勝先生のお言葉を待つて初めて知るべきでなく千古の眞理である。われ／＼は、表面は援軍に過ぎないが、この眞理を身をもつて行ふべき、又、實現すべき又とない好機會に恵まれてゐるのだ。どうか、確信をもつて、命令を守り、實力を發揮して貰ひたい。』

龍馬のこのやうな演説式の熱辯は、殆ど初めてといつてよかつた、しかし、士氣を昂揚させるのに、どの位役立つたか知れない。龍馬の面貌は、黒光りを帯びて輝き、まるで、銅像に生命が吹き込まれて、熱氣を吐いてゐるやうな感じであつた。

拍手と、喝采と、躍動に甲板はどよめきわたつた。

即刻、部署につくべき命令が下されると、一同は、喚聲をあげながら散じ、龍馬一人が佇立して月光を浴びて長い影をひいてゐた。

船將の名譽を擔つた千屋が、どこに残つてゐたのか、つか／＼と龍馬の前に進み寄つた。

『……僕は、再び、長崎へはかへれないやうな氣がします。』

千屋は、緊張に聲を顫らせていつた。

『千屋！ それをいふなよ。勝敗は戦場の習ひだ。しかしわれ／＼は不敗の位置にあるのだぞ。』

『いえ、僕は、それをいふのぢやありません。』

『人間の測り難い生死のことか、それは、この龍馬とても同じぢやないか。』

『隊長は死んぢやいけない。坂本龍馬先生は、斷じて死んではいけない。』

『千屋！ わしはのう、——若しや、勝麟太郎先生が、幕府の軍艦を指揮してゐられはせぬかと思ふと思はず悚然としたよ。相共に日本の海軍を興さうとして粉骨碎身して來た師弟のものが、一朝、戦陣の間に相見え、打ち合ふことになる、これ位不幸な悲しむべきことはないぢやないか。わしの胸はつぶれるやうな思ひがするぞ。だから、わしも、戦死するかも知れん。』

『いや、勝先生が、軍艦に乗つて來られるやうなことは斷じてありません。長州再征のやうな愚舉に賛成されるやうなことはありません。』

『しかし、幕命なれば、臣下として拒めないだらう？』

『それは杞憂です。御安心なさい。』

『まア、待て！ よし、わしは戦死するやうなことがあつても、近藤、池内の亡き後だから貴公等が遺志をついでやつてくれんと困るぞ。これだけは、確と頼みおくぞ！』

『…僕なぞ物の數ではありません。僕は、矢張、討ち死がしたいのです。』

『馬鹿！』

龍馬は、進み寄つて千屋の肩をむづと掴み、

『あれがいふておつたぞ！ おとみは、自分から僻んで身をひくのは許してやらなければ仕方がないが、君江を千屋さんに貰つて頂きたい。それがおとみの願ひでもあるんだからと、——わしは、幾度、それをいはれたか知れないのだ。憐れな女の心も察してやつて、無事凱旋して、みんなに元氣な顔を見せてやつてくれ。』

と、涙と共にいつた。

『お、おとみさんが…、そんなことをいつてお出でになるんですか。』

千屋は、ぼろ／＼と涙を流した。

『お龍の奴が、さういふてゐる。おとみからもわしは伏見できいて來たのだ。』

『さうでしたか。』

千屋は、まるで、夢のやうな思ひで、月光を仰いだ。

ドドン、ドドン、ドドン——大砲の音がきこゑ出した。彼方の空には火箭のやうな光がとび交してゐる。

『あ、船がやつて來ました。』

千屋は、どん／＼こちらへ突進して來る無燈の船影を認めて叫んだ。

そこへ、傳令が飛んで來て、丙寅丸で高杉晋作が訪ねて來たことを知らせた。

驚いて龍馬と千屋が舷側へと走り寄ると、高杉は一人の従者をつれて舷梯を昇つて來た。この海軍總督は、烏帽子大紋に軍扇といふ凡そ奇抜な風體なので、一同は、思はず噴き出してしまつた。

『坂本さん、援軍を頼みますよ。わが軍の作戦は、明曉から海峡突破、田の浦、門司の總攻撃で

す。よろしく頼みますぞ。』

高杉は、平常と同じ威勢のいゝ調子でいつた。

『ぬかりはありません。こちらは、乗組員一同もう部署につきました。』

『あり難う！ 中岡君は陸でやつてくれてくれてありますし、田中顯助君は、僕の船で機關係りをやつてくれてあります。』

『ほう、愉快ですな。大捷を祈ります。何か、軍略上の御註文はありませんか。』

『さうだな。早曉からあんたの櫻島丸は、庚申丸を曳いて行つて貰ひたいのです。』

『よろしい、明曉ですな、六月十七日ですな。——門司の方面へうちかけませう。』

『どうか、僕は、丙寅、癸亥、丙辰の四隻で田ノ浦をやつゝけます。』

再び、遠くから砲聲の轟くのがきこゑ出した。高杉は、再會を約して、

『戦争ちふものは、とても忙しくてかなはんですな。』

と、戯談をいひ／＼行きかけた。

恩讐を超えて

幕軍は海陸共に散々の敗北で長州再征は完全に失敗に歸し、天下の形勢ははつきりと見透しがつて來た。將軍家茂は大阪の營中に於て薨去し、一旦、隱退させた勝麟太郎は再び起用され、長州との媾和使節となつて宮島までやつて來たとのことであつた。

龍馬等の率ゐる櫻島丸は、直ぐ戦列から退いたのであつたが、長藩主から戦功によつて羅紗の西洋衣のきれ地などを下賜され、意氣揚々として一旦長崎へ凱旋することになつたのであつた。

だが、間もなくオテント號の櫻島丸は、長州へ返却することになつたので、『社中』の連中は、木から落ちた猿も同然の有様で、食ふにも困るやうな羽目に陥つた。お龍は、長崎で相變らず吞氣に月琴の稽古などして／＼してゐたが、龍馬も、時々、それとなく訓戒した。

そこで、龍馬は、何とかして『社中』の挽回策を講じようとして、下ノ關に『商社』をつくる決心をした。小松帯刀の援助で洋型帆船大極丸をイギリス人のヲルスから買ひ込み、國産運輸に使用することになつたので、その代金一萬二千兩の背負ひ込みについても、うか／＼して居られなくなつたのである。

昨日の凱旋船將は、今日の商社の主人才谷梅太郎にかへるわけであつた。これには、むろん、薩長二藩の有志の後援が必要なので、下ノ關の要所に目をつけ、海峡通過の船舶を檢べたり、物

資の需給関係によつて市價を左右したり、諸國產の取引をしたりする企てなので、その爲、お龍を伴つて下ノ關へと出向いたのであつた。

姉の乙女から變な問ひ合せがあつたが、龍馬は、つぎのやうな返事を出した。戦争の報告をした時は得意だつたが、今度のは、少々辯解的な文言になつた。

おゝせこされ候文に私を以て利をむさぼり天下國家の事をわすれ候との御見付のよう存ぜられ候：：乍^レ不及天下に心ざしをのべ候爲とて御國より一錢一文のたすけをうけず諸生の五十人も養ひ候得ば一人に付一年どうしても六十兩位はいり申候ものゆゑ利を求め申候：：これが、龍馬の偽りのない氣持であつたらう。しかし、龍馬の經綸が、海外貿易にまで發展すべき速大なものであつたことはいふまでもなかつた。

長崎と下ノ關とかけもちの有様となつた龍馬が、お龍と一緒に長崎へかへつて見ると、『社中』がひどく騒いでゐる。陸奥源次郎と改めてゐる伊達小次郎が、蒲團をつくるのに市内の綿屋から見本だといつてとり寄せた中からぬき、それを集めて見事にこしらへたとか、買ひ物に出かけるのに、いつも財布をがちやりと置いて、それから一分銀や二朱金をとり出すが、下には碌な錢を入れてなく當百の天保錢ばかりだつたとか、貧乏の揚句の頓智をきいたので、みんな貧乏にへこ

たれた爲に不平をいつてゐるのだと思ひ、

『陸奥源次郎だけは大小をとりあげて路頭につき出しても何とか生きて行くだらうな。』

と、後年の剃刀大臣たる陸奥をおだてたりしたが、問題は別にあることが分つた。

『よろしく成敗すべきだらう。』

『見つけ次第斬るべしぢや。』

『たとへ、われ／＼脱藩の身とはいへ、彼の如き藩の財力を濫費する奴はさし許すことにはならぬ。』

『公武合體の張本人のみか、勤王黨を片つ端から斷罪した不倶戴天の仇敵ぢやないか。』

『兎に角、彼とそ一派を根こそぎにせんことには、容堂公の考へも變らず、藩論を正すことは不可能ぢや。』

『よろしく隊長に進言すべし、馬關商社や、お龍夫人のことは第二の問題でよからう。』

『よからう。中岡さんなら忽ち斬りふせるだらう。』

腕まくりをして悲憤慷慨し、怒號切齒する連中の聲は、龍馬の耳にも入らずにすまないわけである。それは、土州藩の參政後藤象二郎のことだつた。

龍馬は、連中の集つてゐる高野比良郷にある俠商小曾根英四郎の別荘へと出かけて行つた。『社中』の本部は、龜山からこちらへ、持主の好意で移つてゐるのであつた。千屋、澤村、石田、陸奥その他七八人ゐたが、早速、龍馬をとり圍んで、後藤問題をもち出した。

『……わしもきいたよ。後藤のことはな。金銭を湯水のやうに使つてゐるつてな。』

龍馬は、落ちつき拂つて胡坐になり、

『やすの奴は、汽船購入と貿易事業の爲に來てゐるつていふことぢやないか。その道なら、こつちがお師匠ぢやぞ。教へを乞ひに來てもよかりさうなもんだが……』

『やす』は、象二郎の幼名が『保彌太』であり、乾退助（板垣）は猪武者的の子供だつたので、『猪之す』と両方で呼び合つた。両方とも上士の家柄だつたので、下士階級の子供達との間に屢屢血を見るやうな喧嘩が城下でくりかへされたのであつた。龍馬は、それで、『やす』といふ諱名を思ひ出したのである。

『戲談は兎も角、何とかわれ／＼も態度を決しなければならんだらう。向ふでも、『社中』の空氣の險惡なのに氣づいて警戒を始めたらしいから……』

澤村の關雄之介が、龍馬を戒めるやうにいつた。

『まア、待つてくれ。やすはな、この前、小笠原唯八と、容堂公の内命をうけて鹿兒島へ出かけてゐる。これは、要するに、藩交を温め、公武合體のかために行つたのに違ひない。ところが、豈圖らんや、薩摩の連中の考へ方はまるで違つて來てゐた。薩長聯合の密約位は、彼奴のことだから薄々感づいたらう。これぢや、うか／＼してゐたら、土佐は政局の中心からおつぽり出されて再起が出來なくなるだらうと氣づいたらう。そこが、こつちのつけめぢやなア。』

龍馬は、一人／＼の顔を見廻しながら、ゆつくり／＼語る。

『それぢや、彼は舊來の陋見を去つて、われ／＼の軍門に降るといふ殊勝な料簡にでもなつたといふのかね。ハハハ……』

澤村が、洋書をべら／＼まくりながら冷笑的にいつた。

『何に、老獺の彼に、どうしてそんな良心が持つてゐられる？』

無口な中島作太郎も、青年らしい血色のいゝ頬を輝かせて怒鳴つた。

『この際、坂本流の樂觀論は禁物ですぞ。』

陸奥が、生意氣げに交ぜつかした。

『吉田元吉の甥の小姓上りの象二郎なんかにして、やられては、武士の恥辱ですよ。』
千屋も、龍馬を煽動するやうにいつた。

『よく分つてゐるよ。唯一つ彼について知つておくべきことは、若い時からアメリカへ漂流して行つた中濱の萬次郎さんから外國の話聞いて居り、又、江戸へ出て航海術の手ほどき位は學んでゐる。吉田東洋の薰陶をうけて開國進取の考へも吹き込まれてゐた。これが今日になつて見ると輕視出來ぬ問題だな。幕府は崩壞に瀕する。薩長の勢力は進出する。王政復古の見透しはつく。氣の早い話のやうだが、わが土州藩も、是非とも、この活舞臺に登らなければならん。それをやる役者が居るか？——象二郎にやらせるんぢやよ。』

龍馬は、自分でさう定めてゐるやうな調子になり、

『諸君は、かういふと彼の如き君側の姦は攘はなけりやならん。老公の聰明を蔽ふものは彼奴だといふぢやらうが、わしにいはせると、容堂公その人が聰明なら、彼は老公に驅使されてゐるともとれるぢやないか。象二郎ばかりを見てゐて、その後ろに容堂公のあることを忘れてはいかん。象二郎を動かせることは、藩主父子その他重役をも動かすことになり、それはとりもなほさず土州一藩を動かすことになるわけぢやないか。——わしは、こんなことを耳にしたことがある。』

象二郎が武市、平井、間崎などを斷罪した後で、勤王派の復仇を恐れた老公は、ひそかに象二郎に難を上海あたりへ避けさせようとなされたさうぢや。それだけ目をかけて居られる人物だから、相當に使へるぞ！』

龍馬の話に一同は、次第にひき入れられて行つた。

『土州からも、近來は、どん／＼人を長崎へ送つてゐるらしい。蘭醫修業、洋學修業、砲術修業、貿易上の用務、その他雜多らしいから、今後は土州も見込みがあるかも知れませぬね。』

石田英吉が、稍々妥協的に出て來た。

『さうなんだ。だから、さういふ連中に會つて見ることもいゝと思ふよ。中には探偵もゐるだらうが、先方からいへば、こつちも密偵だらうから同じこつちやよ。——鬼に角、わしは、象二郎のことは、さう氣にすることは無いと思ふ。但し、今日の時勢となつてはだよ。湯水のやうに使ふ金があるなら、こつちへも少し寄進せよといつてやりたい位だよ。なア、陸奥よ、さうなつたら大浦のお慶婆さんに小使錢をねだりに行くこともねえだらう。ワハハハ……』

龍馬は、陸奥の方へ水を向けた。

『僕は、あの婆さんに無心はしませんよ。そりや、どつかの男妾でせう。』

陸奥も、負けてはゐなかつた。

『さうむきになるなよ。唯の話ぢやないか。』

龍馬は、かういつて陸奥の肩をたゝいた。

大浦のお慶といふ後家さんはかゝ變つた女で、外國人と大きな商取引をしたり、自分はどこかと縮緬の厚い座蒲團に坐り込み、男妾を顔で使つて帳合などをさせるといふ女丈夫で評判ものだつたのである。

『僕は、イギリス語の勉強に忙しいんですよ。『萬國公法』も讀まねばならんし……』

陸奥は、相變らず口を尖らせてゐる。

『いや、今にうんと金をつくるよ。どうだ、みんな町へ出ようや。一つ、象二郎と張合つて、丸山あたりでどんちやんやつて驚かせてやらうぢやないか。』

龍馬は、景氣のよさうなことをいつて、一同の氣をひき立てた。一同も、その巧妙な煽てにひつかゝつたかのやうに、どや／＼と立ちあがつた。

土州から長崎へ砲術修業生として來てゐる溝淵廣之丞は、探索役をかねてゐるとの風評だつたが、考へて見れば龍馬とは江戸で劍術修業時代の知合で、今でも好意をもつて會ひたがつてゐることを耳にしたが、それが偶然の機會で出會してしまつたのである。

同郷の誼み、且つは舊知であつて見れば、双方に隔意のあらう筈はなかつた。殊に、龍馬の磊落な氣風が、すつかり溝淵を捉へたらしい。それが、きつかけとなり、龍馬は、下ノ關の商社の用事で出かける時に同伴して長州の桂にも紹介したりした。桂は、この時、木戸貫治を準一郎と變へてゐた。

溝淵は、それを徳としたし、又、木戸の話や人物にも共鳴し傾倒したものか、歸ると早々、後藤象二郎に詳細傳へたのであつた。そこへもつて來て、松井周助が賛成し、土州藩の夕顔丸の船長である武藤駒が、これ又、龍馬と舊知の間柄だつたので、一議に及ばず、よからうといふことになり、こゝに象二郎と龍馬との會見の下地が出来て、急速に實現することになつたのであつた。慶應三年二月下旬の一夜である。南國のことだから、もうめつきり春めいて、燈火の色も一としほ映えて香るやうな清風亭の座敷には、後藤象二郎の一座が、賑かに談笑してゐた。今宵、坂本龍馬を迎へ恩讐を忘れ、胸襟を開いて談じようといふのである。

一體、象二郎は、高橋勝右衛門と森田慎造などの外に、幕府に召されて役についてゐた中濱萬次郎を請ふて通辨に頼み、長崎へやつて来て、財津屋に滞在してゐるのであつたが、既に、自ら上海に出張して見聞をひろめ、汽船數隻を獨斷で購入の契約をして歸朝したばかりの時だつたので、意氣軒昂たるものがあつた。

龍馬は、いろ／＼と斡旋の勞をとつてくれた溝淵直之丞や、山崎昇六の介添え役があることなので、『社中』のいふこともとりあげず、單身ぶらりと宴席へと出かけたのである。

『こりや、驚いた。お前よばれてゐるのか。』

龍馬は、清風亭の廊下に嬌聲をきゝつけ、かねて馴染みを重ねてゐる藝妓お元に挨拶をされたので驚いた。

『え、後藤様のお座敷なんですよ。』

十八歳になつたばかりのお元は、無邪氣に答へた。

『何アんだ。そんなからくりがあつたのか！』

龍馬は、益々驚いたが、『後藤奴！ いたづらをやり居るな』と、心の中でつぶやいた。

廣間には、格福のいゝ頑丈な象二郎がどつしりと坐つて、『さア、すつとお通り下され。』と、

錯のある太い聲でいつて、如才のないところを見せて龍馬を上座に請じた。

『これは、お初に拜顔を得まして……、今夕はお招きに預り、遠慮なく罷り出まして……』

『いや、何とも、御迷惑なこと……、わたしは、初対面のやうな氣はしませんぞ。』

『餓鬼大將の時分には、城下で會ふてゐたでせうよ。よく喧嘩をしたもんでしたからな。ハハハ……』

『さや、喧嘩は、すつとひきつゞきの形で……、ワハハハ……』

磊落不羈な龍馬と、豪放卓犖の象二郎とのつけからのなごやかな交驩ぶりを見た周囲のものは、まるで、虎と獅子が獲物の奪ひ合ひを止めて和睦をした時のやうな印象をうけた。最早、上士も下士も參政も浪人もなかつた。

茶菓が運ばれた。——面倒臭いから直ぐ酒を持つて來うといつた速力スピードで、一座は、早くも大陽氣で、お元などは、瞳を輝かせ、玉虫色の唇を綻ばせ、金絲の大きな帯を銀燭の前にきら／＼させて、周囲の眼を奪つた。

『坂本さん！ 一つ馬關の商社のコツを御傳授願ひたいなア。國の開成館もな、目的を解してくれるものが少いので困りますよ。徒らに民業を奪ふといふ怨嗟の聲も出る始末でな。それに尊攘

派の攻撃もあるといふ次第で、さすがの拙者も、ついに逃げ出しました。いや、それが上海下んだりまで流れて行くといふやうな羽目になりました。ワハハハ……』

象二郎は、些かも城府を設けない天空開瀾ぶり、ぐツと大盃を傾けた。

『しかし、上海では、大漁があつたさうで、お目出度う。』

龍馬も、何のこだはりもなく、いつもの磊々たる調子である。

『いや、例によつて、いや放漫だ、やれ野放圖もないといふて叱られますぢやらう。何せ、キネブル商會との始末が、まだ解決がつかんやうなわけではな。』

象二郎は、かういつて頭をかくやうな恰好をして見せたが、それは、土州産の樟腦を抵當に三萬兩を前借したところ、エンピール銃千挺を買つたので、鐵砲の方は、一挺三十兩といふ馬鹿高い値段につけて来たことなのである。

『なる程、一挺三十兩とはひどいですなア。』

『樟腦で決済させようといふ腹なんではな、こつちで、契約を破棄しさうな口吻を示すと、彼奴等は、今にも浦戸港へ軍艦をさし向けかねまじい權幕を見せるんだから業腹ですよ。』

『そこが毛唐の常套手段、弱味につけ込んでどこまでも踏みつけにしようとかゝつて来るんで

す。それで、唐も天笠もジャガタラもやられてしまつたんですよ。わしらが海軍に骨折つてゐるのも實はそこなんですよ。』

『いや、坂本さんの先見の明には、平素から敬服して居りました。拙者などは、外國の研究が足りませんでしたわ。』

象二郎は、女たちに用を命じて去らせ、人拂ひをしてゐるので、自分で龍馬に酌をしてやり、『實は、先に谷守部（後の干城）を上海へやりました。ところがあの頑固先生も、ひどく魂消てかへつて来ました。これまでの考へ方は、固陋偏見だつたといふんです。何に、そんなことがと思つて、次ぎに拙者が出かけました。いやはや、彼地の商業の殷賑、船舶の輻輳、交通の繁華——全く、度肝をぬかれましたわ。』

『上海のことは、わたしも、高杉晋作君からききました。又、井上、伊藤兩君からもちよいときいとりますが、それにつけても、經濟です。金がなくてはな。ハハハ……』

龍馬は、自嘲するやうに笑つて、

『後藤さんばかりぢやありませんぞ。こつちは、素寒貧の癖に『社中』の船大極丸が一萬二千兩まだ支拂不能と來ちやどうも……』

『一萬二千兩！ その位のことなら、どうかなるでせうが。薩摩と長州が控えて居る以上は：』
 『後藤さん、あんたが、そんなことをおつしやるやうぢや心細い。土州で出してやると來なくては面白くないですよ。いや、本當ですぜ。われ／＼は、薩長の後塵を拜するやうな氣持になつてはいかん！ わたしは、常にさう信じてゐるんです。』

『ぢや、坂本さん、土州藩士にかへつたら？』

『だが、直ぐに、これでせう？』

龍馬は、自分の手で頸をたゞききる眞似をして見せた。

いつか、溝口と山崎が元の席についてゐて、聲を揃えて笑ひ出した。

『いや、坂本さん、世の中も變れば變るもんぢや。あの福岡藤次（後の孝悌）がな、小笠原唯八と上洛した時に、西郷、吉井の兩君に面會したとかで、これまでの考へはぐらついで來たらしいのぢや。』

『小笠原氏は、京都で中岡君ともお會ひなされたとかで……。何、晝寢をして覺めて見れば思案も變つてゐたといふやうなもんで。——ところが、公武合體の一枚看板は、どう塗りかへられますか。』

『これは、手きびしいな。しかし、坂本さん！ あんたも、幕府や、反對派が降参さへしてくれば文句はないのでござせう。』

後藤は、大きな眼をむいて、ぢつと龍馬の顔を見つめた。

『左様！ 降参の仕方によりましてはな。しかし、中岡等の絶對討幕派は、そんなことは手ぬるしとするでせう？』

『さうかな。しかし、將軍家茂公は薨去せられ、畏くも、先帝には御崩御遊ばし、今は諒闇ぢや。なるべく事は荒だてんで謹慎がよろしいと考へるが……』

と、後藤は、いやに嚴肅な態度になつて來た。

『梟雄象二郎！ 味をやるな！』

龍馬は、かう思つたので、

『内輪喧嘩もつゝしみたいが、連夜の豪遊も控えませうよ。しかし、後藤さん、今は、そんなことをつべこべこねかへして居る時ぢやありません。あんたの力で、土州一藩をひきずつて行つて下さい。ぐん／＼とひきずつて行くんです。それは、あんたを置いて他に人はありません。』

『坂本さん、合力してくれますか。』

『及ばずながら……』

龍馬は、カブよくいつて、

『後藤さん、少し酒にしては……？』

『お、さうぢや。今夜は、議論をする爲ではなかつた。諸君、どうだね。大いにやつてくれんか。』

後藤は、一座に向つていつた。

丁度、この時、待ち構へてゐたかのやうに女たちが、どや／＼と酒や肴を運んで這入つて來た。舊怨を忘れて酒々たる龍馬、身分のことなど眼中におかず落々たる象二郎、——二人は、すっかり打ちとけた様子に感じられた。

象二郎は、頻りに酒を侷め、自分でも飲んだ。酔ふにつれて話題も多く、風呂敷のひろげ方も大きく、又、八方に應酬しながら、お元をなるべく龍馬の傍に侍らせらるやうに氣を配つたりして、なか／＼細かい藝も見せる。果ては、脱線したのか、江戸在府中、品川の遊女に通ひつめ、幾度か歸國の旅費を使ひ果して困つたこと、ある時には途中刺客に會つたりしながらも懲りずまに通つた話などを大びらに面白をかしく披露して一同を笑はせたりした。龍馬よりは二つ三つ年下だ

つたが、なか／＼の人物であることは、酒間に於ける談笑にも十分のみこめた。

龍馬は、すつかりいゝ氣持に酔つてしまつた。送られて清風亭を出た時は、眼がちらちらして灯が上下にゆれてゐるやうに見え、すれ違つた南京人(支那)や、南蠻人(オランダ)らしいのが、何か夢の世界の道化役者のやうに映り、獅子のやうに怒號する象二郎の酔つた調子が、耳底に透つて、胸をすうつとさせてくれるやうに覺えた。

心配して出迎へに來た『社中』の二三人に向つても、龍馬は、景氣のよさうなことばかり喋りつゞけ、土州藩もこれからだと、珍らしく愛藩心を發揮した。

『姦雄後藤にまるめこまれたかな。』

『あいつのことだ、好餌をもつて釣つたかも知れん。』

『お元まで呼んでゐたとは、さすがに役者が上手かな。』

不満をもつ連中のかうしたさゝやきも、龍馬は、まるで聽いてきかぬ振りをしてゐるとしか思はれない程であつた。

『私一人にて五百人や七百人の人を引て天下のお爲するより二十四萬石を引て天下國家のお爲致すが甚よろしくおそれながら是等の所には乙様の御心には少し心が及ぶまいと存候：』龍馬は、象二郎に對して妥協的行動をとり、度々親しく會つてゐるとの風説が國にも傳はり、ひどく一部から非難されてゐるのを心配して來た姉への返書を、こんな風に書いたのであつた。一夜の興會が機縁となつて、大極丸の支拂ひも後藤に拂はせ、剩へ『社中』へも、一萬五千兩を融通して貰つて財政の不如意を救つたのである。

土佐藩論轉換の爲には、後藤、福原、小笠原等が運動して、武市系の勇敢で、意氣の旺んな脱藩の士と握手する必要があるといふので、先づ、坂本、中岡の二人を赦免するといふことにもなつた。龍馬は、現在のまゝで航海、運輸、貿易の爲に自由に働き、中岡には、藩外にゐて、應分の周旋をさせようといふ方針なのである。尤も、中岡は、同じ脱藩士といつても、前から他藩密事探索といふ役目といへばいへる名儀が興へられてゐるので、自分の名によつて藩廳に獻策するだけの權能はあつた。

ところが、一方の象二郎は、どうかといふに、自他共に認める放漫誇大な政策が祟り、尻をしめくゝることが出來なくなつてしまつた。キネブル商會との係争は何とか片はつたが、樟腦抵

當の借りが三萬兩、薩藩から買ふ約束をした『胡蝶丸』が四萬兩、——その他、軍艦、銃器、機械、圖書、海外留學生費、商館經營、俸給手當、宴會遊蕩費等々を合算すれば、四十餘萬兩といふ莫大な額にのぼつたのである。

これには、容堂公も困り果てたが、『後藤のことだから、まア〜』といふことにしたものの、何とか後始末をつけさせねばならぬので、吉田東洋の門下であり、後藤ともいゝ仲の安藝郡の舊家であつた岩崎彌太郎が、象二郎に代つて留守居の大任を托されることになつた。これは、象二郎が、山崎昇六の勧めに従つて、自分の尻拭ひをさせる爲に、特に彌太郎に白羽の矢をたてたのであつた。

その爲であらう。三月になつて、長崎へ入港した胡蝶丸の船客としては大監察の福岡藤次の外に岩崎彌太郎も交つてゐた。

いや、龍馬が驚いたのは、中岡慎太郎が鹿兒島から上京の途中、これに便乗してゐて、ひよつこり訪ねて來たことであつた。

『これや、面倒だぞ！』

龍馬は、中岡が石川誠之助と改めようが、どうしようが、考へ方が一貫して變らないやうに、

その旅装から、表情から、歩きぶりから、何から何まで、勤王、攘夷、討幕の筋金が背筋に入つてゐてピンと張りきつてゐるやうな姿を見ると、象二郎との妥協を難詰に來たのに違ひないとつたのである。

しかし、中岡は機嫌がよくて、お龍にも直ぐお世辭をふりまいた。

『話はどつさりたまつてゐるぞ！』

中岡は、意氣込んでいつた。

『それなら、こつちもまけない。何から始めていゝか分らん位だぜ。』

龍馬は、擦つたい思ひで、いひかへした。

中岡は、きちんと坐りなほしたかと思ふと、先帝崩御の御大喪の爲に、大赦令が下り、太宰府の五卿には、御歸參がかなふやうになると信じてゐるといつてうれし涙を流した。三條卿の傘下に走り、寢食を廢するまでにして、こゝ數年間東奔西走して來た中岡の誠忠は、些か、ふけたやうに見える眼顔にも、はつきりと描き出されてゐた。

龍馬夫婦も、中岡の崇高な精神には、自ら襟を正さずにはゐられなかつた。

象二郎の話、土州の藩情、當『社中』の經營などの話になつても、中岡は、豫想したやうな冷

淡な態度には出なかつた。薩長聯合による前途の光明にすべてを忘れてゐるのであらう。それよりも、かつて、下ノ關で語り合つて計畫した『社中』を『海援隊』にまで發展させる話の方に、中岡は熱をあげて來たのである。

『どうせ、土州藩の應援をうけてやれるやうになつた今日だから、神戸海軍操練所の殘黨を生かす道として、いつか『社中』といふものは出來たのだから、積極的に改めて發展させる必要はあるのぢや。』

龍馬も、かねての希望なので、氣乗りがするのは當然であつた。

『おんしは、こつちで『海援隊』をやれ、おれは京都で『陸援隊』をつくるから。だが、目的は自ら違ふ。それは、おんしとおれの考へ方の違ひのやうなものだ。』

『まだ、それをいふのか。ぢや、海援隊は、馬關で長岡謙吉に起草させた通りにやるから、おんしは氣に食はんぢやらう？』

『いや、さうでもない。おんしが、自分の目的を果しながら、土藩を鞭ち、後押しをしてくれることが、わが藩の爲、又、われ／＼の爲、いや、ひいては天下國家の爲に頗るいゝことなんだから。各々違つた道をふみわけ登つても、同じ高嶺たかねの月を眺める日を迎へることが出來れば本

望ぢやないか。さうしたらお互ひに死んでも悔みんぢやないか。高杉君は病んでゐるが、一緒に高嶺の月を眺めるまでは生かしておいてやりたいもんだが……」

中岡は、又しても眼尻を拭いてゐる。

『さういふてくれ、ばあり難いな。ぢや、わしは、早速、海援隊の仕事にとりかゝるぞ！』

龍馬は、中岡の眞情にうたれ、勇躍するやうな氣持になつた。

それから二人は、酒を命じて徹宵語り合ひ、京都での再會を約したのである。

海援隊は忽ち成立し、しかも、象二郎等の斡旋によつて土州藩所屬となり、諸藩の汽船をも預つて九州の沿海から瀬戸内海、遠く上方方面へまで縦横に活動することになつた。下ノ關の『商社』と、長崎の『社中』を合併し、それをもつと擴大し、大藩の勢力によつてやるやうになつたわけである。もと／＼長岡の起草した主意も、『かつて本藩を脱せるもの、海外に志ある者が、この隊に入つて、運輸、射利、開發、投機、本藩の應援を成し、今後自他に論なく其志に従ふて之に入る』といふのが大體の趣旨であつた。『陸海軍職制案』には(一)出京官、(二)陸援隊(三)出崎官、(四)海援隊、とあるから、『海援隊』は、その中の一構成分子といふべきものであつた。

そこで、組織された『海援隊』は、隊士以下水夫火夫を合せて約五十人、他藩士としては陸奥源次郎その他も少しは交つてゐた。隊長の秘書でもある文官の長岡謙吉、外人應接係りの澤村惣之丞等各々任についた。

海援隊統制の要は、國を開くの道は、戦するものは戦ひ、修行する者は修行し、商法は商法で銘々かへりみずにやらねばならぬといふにあるのだから、龍馬は、三吉慎藏にあてても、長府の方にも入隊希望者があつたら勧誘してくれるやうにと書き送つた程である。

象二郎は、後事を岩崎彌太郎に頼んで、容堂公のお召しに従ひ、中央の檜舞臺に立つべく上京することになつた。龍馬も、『海援隊』の方が一段落つけば同行する話になつた。

口の悪い陸奥は、『何んだ、天下の『社中』が土州の海援隊になつたのか！』と冷笑したが、龍馬は、『さういふな、おんしは、あのそれ、書きかけの『商法ノ愚案』とかの起草をしつかりやれよ。』と、いつてとり合はなかつた。

第八章

武士のその魂やたまちはふ

神となりても國守るらん(弔歌)

—三條 實美—

われに經綸あり

『やれ〜だ。いろは丸事件には手古摺つたが、八萬三千兩の償金はくれたし、また、災難のお蔭で、日本の海路定期も定つたやうなもんだ。秋山が送つてくれた『萬國公法』を讀んでゐたから、大いに助つたが、何しろ、勉強にはなつたよ。』

上京を眼前に、いろ〜支度に忙しい龍馬は、過ぐる一ヶ月餘りの苦勞と奮闘を思ひ浮べるやうな顔をしていつた。

『お察しますよ。しかし、償金のうち七萬兩は土佐商會に預けてあるわけだから、先づ、『海援隊』も後顧の憂ひなしといつていゝでせう。』

秘書の長岡謙吉は、安心しきつてゐた。

『うむ、岩崎彌太郎の管理だから金は大丈夫だらう。象二郎先生ぢや危い(おぼ)がね。』

『中岡氏の『陸援隊』の方は金はどうなんです。困つてゐるのぢやありませんか。』

『さうだな。こつちは金儲けが主だから儲けて助けてやらねばなるまい。中岡の方は金は要るばかりだらうから：：』

『いや、金は、今に海から掬(く)ひあげられるから何とかなるでせう。ハハハ：：』

長岡は、事も無げに笑つた。今は、各藩が兵備に狂奔してゐる際だから、運輸の外に兵器彈藥賣買の仲つぎをやれば、海援隊も巨利を博するだらうと高をく〜つてゐるのであつた。

『いろは丸事件』といふのは、宇和島藩に買はせ、平時は海援隊が借りることになつてゐた『いろは丸』に龍馬と外數人が乗り込んで、夥しい銃砲彈藥を積んで大阪へ向ふ途中、瀬戸内海の鞆(たも)津附近で暗夜の上に濃霧だつたため、紀州藩の明光丸と衝突し、いろは丸が沈没した事件である。龍馬等は、甲板から甲板へ飛び移るやうな際どい離れ業(わかれわざ)をやつて助かつたが、非は彼にあるにもかゝらず、明光丸の船長高柳楠之助との間に談判がうまく行かず、事件は紛糾し、舞臺を長崎に移し、象二郎なども力を添え、『いろは丸』は、土州藩の持船として折衝を開始し、すつ

たもんだの揚句、遂に龍馬の方が勝つて莫大の賠償金をとることが出来たのであつた。凱歌をあげたのは、紀州藩に恨みをもつ陸奥源次郎のみではなかつた。

しかし、その解決には大變な手数を要したもので、紀州藩の長崎出張官と決裂し、長崎奉行が仲に入り、最後には、イギリス水師提督まで煩はし、航海法などに則つて解決したものゝ、一時は海援隊の連中も怒り出し、どうにもおさへきれぬので、龍馬は奇計を案出し、

船を沈むるその償ひは

金を取らずに國を取る

といふ俗話をつくつて、丸山の妓樓などで盛んに歌はせ、紀州藩を威嚇し、有利に導かうとしたのであつた。御三家の一たる紀州を敵に廻しての闘ひなので、どうなることかと思はれたが、龍馬でなければ出来ない談判によつて解決したのである。しかし、龍馬の最初の決心は非常なもので、長州の三吉に手紙を送つて、お龍は萬一の場合國にかへすから、高知から迎へがつくまで預つてゐて貰ひたいといつてやつた位である。決死必勝を期する奮闘であつたのだ。

で、今から考へると、個人としても感慨が深いわけである。

『わたしは、又、下ノ關で獨りぼつちになるんですか。』

お龍は、荷づりをくしながら、恨めしさうに訊いた。

『さうだ。伊藤九三さんとこで、呑氣に留守番してゐなさい。京からいゝものを送つてあげるから……。なア、長岡!』

龍馬は、悪戯つぽく、他人の巻煙草をとつてふかしながらいつた。

『奥さん、今度の旅は、後藤さんも一緒ですし、ちよつとむつかしい用件もありますからね。こつちで呑氣にしてゐらつしや。』

長岡が、優しく宥めた。

『おゝ、さうだ。下ノ關へ、お母さんや、君江ちゃんも迎へるといゝな。さうしたらいゝだらう?』

龍馬は、それとなく御機嫌をとり、

『これからは、奥さんも、少し落ちついて、世帯らしい世帯をおつくり遊ばすんですな。』と、からかひながら暗に戒めるやうなこともいつた。

お龍は、氣持が明るくなつたり、沈んだり、落ちつきなくばたくと動き廻つてゐた。龍馬は、後になつてから手紙を一本と思ひつき、

『……私らの妻は日々申聞候には龍馬は國の爲め骨身を碎き申すべしかれば此龍馬をいたはりてくれるが國家のためにて決して天下の國家のと云ふこと要らぬことと申聞有之候夫で日々縫物や張もの致し居候その際には自分にかける襟などのぬひなど致し居候そのひまには本よむこと致せと申候此頃ピストルはよく發申候誠に妙な女にて候へども私の云ふ事よく聞込み又敵を見て（伏見のこと思合せたまふべし）白刃を恐るゝ事を知らぬ者にて別にりきみはせねども又一向平生と變りしことなしこれはおかしきものに御座候。かしこ。』

と、姉などへあて書き送つた。これは、男まさりの乙女を諷した意味にもとれようが、龍馬のお龍に對する愛情と共に、かくありたきものとの氣持も幾分か自然と現はされてゐたのであつた。

龍馬等の一行が土州のシユリン船に乗つて長崎を出發したのは六月の初めであつた。それには、容堂公の召命による後藤象二郎も一緒であり、祕書の長岡、妻のお龍は、むろん同伴した。下ノ關で船を降りたお龍は、かねての宿である阿彌陀寺の伊藤九三方に托され、船は一行を乗せて東へと向つた。

兵庫で上陸し、大阪へ陸行し、そこで象二郎の一行と別れた龍馬と長岡はおくれて入京し、三條通り河原町下ル材木商酢屋を宿と定めた。兵庫から海援隊の野村、白峰などが後を追ふてやつて來たので、まるで、出張所のやうな觀を呈し、賑かになつた。

龍馬は、何を措いてもと、早速三本松の旗亭に中岡と密かに會つて、一別以來の消息を語り合ひ、京都の形勢を訊いた。

『後藤が上洛したやうだが、どうぢや、見込みがあるかのう？』

中岡は、不安さうに顔をしかめ、

『島津公は、西郷君等の言を納れて砲兵一隊歩兵六個大隊を率ゐて上洛と定つたさうぢやぞ。』

と、興奮していつた。

『さうか。うか／＼して居れんな。象二郎には、わしも説くが、おんしも一應會つてくれんか。』

『會ふことはいゝが、老公が煮えきらんのではな。おれが、小笠原唯八を促して老公の入京を急ぐやうにと大阪へやつたところが、寺村と谷が丁度國許から着いたところだつたので、訊いて見ると、まだ、藩論は決定しとらんやうな始末でといふとつたさうな。こんなことで土州藩はどう

する？』

『わしは、象二郎にいゝ策を授けちやるからまア待て！』

『坂本は、策士ぢやから策々といふが、もう一刻も猶豫は許されんぞ。おれは、もうぢつとして居れん。三藩の外に起つて一隊を率ゐ、相呼應して討幕の快舉に出るつもりぢや。『陸援隊』がものをいふのは今ぢやないか。』

『ちよつと待つてくれ！』

龍馬は、盃を投げるやうに置いて、

『戦争は最後でいゝ。同志はいつでも早まつて失敗してゐる。まだ、それまでに打つ手は幾らもあるぢやないか。』

『いや、いかん。おれは、事の成る成らんを考へて義旗を翻すのぢやない。大楠公は死を決し敗軍を覺悟して湊川へ赴いた。おれは、楠公の御精神を學びたいのぢや。坂本！ おれは、その爲に乾退助を江戸から呼び返したんだぞ。乾を高知へやつて容堂公に獻策させ、軍備を進めさせたからだ。』

『おんしの眞意はよく分るが、今、京攝の地に於て軍を起したら、そりや、薩長の陸軍だけで十

分事は足りよう。むろん、勝味もこつちにある。しかし、若しも、幕府が優勢な海軍を以て海上から封鎖したらどうなる？』

『海軍……？ 又、勝麟太郎か。それは、『海援隊』でやつてくれ。高杉だつて、關門海峡や、周防灘で幕府の海軍を叩きつけたぢやないか。』

『おゝ、高杉といへばとうとう……』

龍馬は、ちよつと鋭鋒を外らすやうに、

『わしは、是非悔みに行きたかつたが、急いでゐたから、お龍にいひつけておいたが……』と、愁然としていつた。

『おれは、三月二十日に病床を見舞つたが、あの一世の快男兒もまるで骨と皮ばかりになつてゐた。野村望東尼とおうのさんが看病してゐたよ。おれは、涙がこぼれた。』

『死んだのは、確か四月の十四日だつたかな。』

『さうだ。おうのさんは、梅處尼となつて、東行庵の守りをしてゐるとかきいたが感心ぢやう。』

『うむ、感心だ。おんしも、今、命を粗末にしてくれるな。兵を擧げるには、薩、長、土が足並

みを描へるまで待つても遅くはあるまい。』

『いや、容堂公は齒痛などで病氣々々といふてござるし、土州がこの上愚圖々々してゐると薩長から除外されるぞ!』

中岡は、どうしても自説を曲げない。

龍馬は、今考へてゐる大政奉還論も、迂濶には中岡にいへない氣がした。

中岡は、何といつても、三百年に近い徳川の封建政治の覆滅を計るには、尋常一様的手段では駄目だから、兵力を用ゐねばならん。それで、板倉筑前守から千三百兩の軍用金を融通させたり、小松帯刀にも融通を申し込み、又、土州藩の執政深尾左馬之助、大監察山川左一右衛門等を訪問し、薩長討幕舉兵の期迫ることを警告したといふ。

龍馬とは、話が要領を得ないまゝで別れたが、中岡は、一層、龍馬に不満を感じたことに違ひなかつた。

龍馬は、西郷その他にも會つて見たが、中岡のいつた通り、容堂公並びに土州の評判が頗るよろしくない。『土州頼むに足らず』位ならいゝが、『幕府よりも土州を先づ討つべし』と、いきまいてゐるものさへあるに到つては穩かでない。さすがに、龍馬も、事を運ぶの急を悟つて、河

原町三條下ルの醬油商の壺屋を宿にしてゐる象二郎を訪ねて大政奉還論を一席辨じたてた。

『何しろ、岩倉具視といふ怪傑が出て来て、薩長と結んでゐるといふから事ですぞ。中岡なんかも、頻りに太宰府の三條卿と岩倉卿との間を斡旋してゐるやうです。こゝらで、あんたが一つどゑらい大芝居を打たんことにはいかんと思ふ。』

龍馬のかうした煽動的の熱辯は、策を好む象二郎の野心と、雄大好みを刺激するに十分であつた。

『うむ、狂言がありますか。芝居を打つには、役者だけではやれんでな。ワハハハ……』

象二郎は、思はずぐつと乗り出して、豪傑笑ひをした。

『あるともく、拙者が長岡謙吉に起草させた『船中八策』なるものをお目にかけてませう。けちな狂言でなく、大經綸ぢや。』

龍馬は、船中で後藤に語つたことではあるが、早速その原案をとり出して見せた。

性急に奪ふやうにしてとりあげて讀み出した象二郎のあぶらぎつた赭ら顔には、だんくんと會心の微笑が溢れて來た。

一、天下の政權を朝廷に奉還せしめ、政令宜しく朝廷より出づべき事

一、上下議政局を設け、議員を置き、萬機を參贊せしめ、萬機宜しく公儀に決すべき事
 一、有材之公卿諸侯及び天下之人材を顧問に備へ、官爵を賜ひ、宜しく從來有名無實の官を除くべき事

一、外國の交際廣く公議に採り、新に至當の規約を立つべき事

一、古來の律令を折衷し、新に無窮の大典を選定すべき事

一、海軍宜しく擴張すべき事

一、御親兵を置き帝都を守衛せしむべき事

一、金銀物價宜しく外國と平均の法を設くべき事

以上八策は方今天下の勢を察し、之を宇内萬國に徵するに、之を捨て、他に濟時之急務あるなし、苟くも此數策を斷行せば、皇國を挽回し國務を擴張し、萬國と並立するも亦敢て難しとせず、伏て願はくは公明正大之道理に基づき、一大英斷を以て天下を更始一新せん、——
 『ほう、こりやえ。さすがは坂本さんの頭腦ぢや。この中には、何も彼もが含まれてゐる。これ、みんなぢやないか。』

象二郎は、熊のやうな手で、再び、ひろげて讀みながら頻りと感嘆してゐる。

『よろしいか。』

『早速、福岡藤次や、佐々木三四郎にも見せねばならん。それから殿様の御覽に供することによろ。——實際、案を打つて快哉を叫びたうなつた。ワハハハ……。』

『快哉は、まだ早よがせうが、先づ、薩摩を説かねばなりませんまい。久光公は既に討幕の機鋒を露はしかけてゐると見なければならんから、そこはぬかりのないやうに……。それから長州！土・薩から始めて、土・長に進めんといかんですよ。どつちに旋毛を曲げられてもまづいからです。』

『よろしい！ やりませう。天下のことこれより妙策なしぢや。先手を打つて猪突せなければならん。』

象二郎は、すっかり興奮してゐる。

龍馬は、いよ／＼得意になつた。

妻よ、ふるさとよ

大政奉還運動に乗り出さうとしてゐる大切な時に、龍馬は、高知にかへらねばならぬことにな

つた。四十になるまでは、ふるさとの土は踏まないだらうと姉にいつてやつた龍馬であつたのに。しかし、これは、龍馬の意志からではなかつた。七月七日の夜、長崎でイギリスの水夫が一名何者かに殺害された。それが、土州藩所屬の海援隊士に嫌疑がかゝつたのである。その爲、イギリス側は直接高知の藩廳にかけ合ふといふことになり公使のパークスが軍艦で乗り込んだのである。幕艦回天丸では外國奉行平山圖書が駆けつけるといふ騒ぎで、城下は安政元年の大地震の時のやうに人心恟々として、洋装の人間が上陸したら外國人だと思つて銃殺すべしといふものさへ出て來た。

京都にゐる土州藩の重役も、その爲にかへることになつた。海援隊の隊長たる龍馬が、この場合何條黙視することが出來よう？早速、神戸にかけつけ、薩摩の三國丸に便乗して歸藩する參政佐々木三四郎を船中に訪ねて、善後策を談じ合つてゐるうちに、それとは知らぬ三國丸は汽笛一聲拔錨してしまつたのである。あつと思つたが、もう間に合はなかつた。

そんなことで、龍馬は、仕様事なしに歸つては來たわけだが事件が事件であり、脱藩が許されてゐるとはいへ、それは後藤象二郎一存でやつたことであつて、藩廳から公達があつて赦免になつてゐるわけではない。だから、偶然の過夫から城下を眺め、なつかしい山川と相見えながら、

上陸は差し控えなければならなかつたのである。

須崎へ着くと、佐々木は龍馬のことを心配して、丁度海がよりしてゐた藩船夕顔丸の船長由比畦三郎に謀つて、その船長室にかくまふて貰ふことになつた。

先に、容堂公説得にかへつてゐた後藤象二郎が専らパークスとの談判に當つてゐるといふが、まるで、船内に釘づけにされたやうな身の上では、さすがの龍馬も應援のしようもない。

須崎といふのは、高知から西へ十里の良港で、浦戸よりは港口も廣く便利でもあつた。

龍馬は、さすがにやりきれなくなつて、一夜、こつそりと上陸して見たが同志に忠告されて、その夜のうちに歸船してしまつた。

ポン／＼と鐵砲の音が聞えて來だした。

『スワ、やり出したかな』と、龍馬はびつくりして甲板に飛び出して見ると、凡そ二百人餘りの戎装の若者が、新式の銃器を把つて荒倉越えをしてやつて來たらしく、號令の聲も勇ましく海の方へ向つて、ワーツ／＼と鯨波の聲をあげながら、突進するかと思ふと、一齊射撃をしたりしてゐるのであつた。

やがて、空砲であることは分つた。

そこへ、同志の岡内俊太郎が、わざわざ慰問に来てくれた。

『あれは、一體何ぢや。エゲレス軍艦に對してやつとるのかね。』

龍馬は、腹立たしげにいつた。

『乾さんですよ。退助さんが、演習をやらかしてゐるんですよ。』

岡内は、笑ひ出した。

なる程、一隊は、唯、行軍をしたり、散兵をしたりするのみで、もう、不穩なところは、ちつとも見せなくなつてゐた。

『それならいいが。この場合少し輕卒ぢやよ。今、後藤が大切な談判をパークスとやつてゐるんだから、まかり間違つて、下ノ關や、鹿兒島の二の舞ひをやらされぢや大變だからなア。』

『はア、それは老公も大變御心配で、早く乾を呼びかへせと仰せられたときよりました。ところが、演習なら構はんぢやらう。兵を訓練するのは、おれの仕事だ、續けツ！ もの共！ と、乾さんが號令と共に、刀をぬき放つて立木を斬り倒して勇氣凜々たるところを見せたので、どん／＼進軍が始まつたのださうです。』

『ハハハ……。一方では後藤參政がパークスと噛み合つて居り、一方では、乾が吞氣に演習か。』

これぢや、わしもぢつして居れんのだがのう。』

龍馬は、だん／＼と陸上を遠のいて行く一隊を眺めながら、しかし、パークスに對する示威運動のつもりかも知れんと思つて何となく愉快でもあつた。

後で、パークスも銃聲に眞つ蒼になつて驚き怒つたが、軍艦の檣頭に提督旗を掲げてないから戰意のないことが分つたといふ話も出た。

象二郎の豪傑流の談判は恫喝的なパークスにもよく拮抗し得て、それでは長崎の現地で、嫌疑者の審問と實地檢證とをしようといふことになつた。參政佐々木三四郎が、イギリス側のサトウを伴ひ、夕顔丸で出張することになつたので、龍馬も、そのまゝ船と一緒に運ばれるわけであつた。それは、むろん、望むところであつた。岡内信太郎も同行することになつた。

龍馬は、出發の前に、兄の權平に時計一個を土産の印に届けさせたところ、その返しに家藏の刀一振が來たので、ほく／＼しながら、城下に向つて船から別れを告げた。

長崎へ着いて調べて見ると、丸山遊廓で水夫殺害の事件が起つた直後、海援隊所屬の横笛丸が犯人を乗せて逃げたといふ憶測なのである。隊士の佐々木榮が、その船で鹿兒島へ行つたまゝになつてゐるが、そんな馬鹿な卑怯なことをするわけではない。そこで、龍馬は、新しい試みとし

て犯人の懸賞捜索の新案を考へ千兩をかけるとはふビラをべたく市中に貼りつけさせて世間を驚かした。そして、一方當の佐々木榮をも召還して取り調べたところ、全然無實であることが證明された。それもその筈で眞の犯人は福岡藩の金子才吉なるものであつた。しかし、金子は累の藩主に及ぶことを恐れて、既に自刃し果てゝゐたのであつた。イギリス側でも、さう分ると泣き寝入りになるより外はなかつた。

ところが、ひきつゞいて、諏訪神社の境内で、丸山の遊女が參詣してゐるところをふさけてゐたイギリスとアメリカの酔つ拂ひの水夫二人を海援隊の島田雄二郎と田所安治が見るに見かねて防いでやらうとして傷けたといふ事件が突發した。池田屋を宿にしてゐる參政佐々木は、一難去つて又一難の災厄に怕げ返つたが、龍馬は、血氣の隊士が、いつそ決闘させて解決させたらなどと無茶をいふのをおさへて、

『馬鹿なことをいふな。こんな些事で、外國と事を構へるやうなことが出来るか。日本の武士道が泣く。福岡の金子才吉だつて立派に自刃して、エゲレスの奴等を感じさせたちやないか。こゝは、よろしく涙を吞んでも、公明正大に出なければいかん。』
と、極力、自説を主張して、關係者を自訴させることにしたのである。

果して、イギリスと、アメリカの領事は非常に感心して立派な文明國の態度だとまでいつて満足した。

龍馬は、鼻が高かつた。『大山鳴動鼠一疋、どんなもんぢやい!』といつた調子で、海援隊の後事を托しておいて京都へひきかへすことになつた。

藝州藩の震天丸には、龍馬が乗り込んでゐた。

船底にかくされた天幕、銃砲、彈藥は莫大なものであるが、これらはすべて龍馬の手によつて土州藩へ運ばれるものであつた。

その中のライフル千三百挺は、オランダ・ハットマン商社から購入したもので、龍馬が長崎へ同道した參政佐々木三四郎と計り、薩藩の長崎出張官たる藤安喜右衛門から大阪爲替五千兩を融通して貰ひ、内四千兩を納めてうけとつたものであつた。

『長崎で木戸に會つた時は、大政奉還なんて生温いと嗤つたし、中岡は、討幕學兵一點張り、かつちのいふことに耳を藉さないが、おれさまだつて、萬一、いくさになる時の用意には、かう

して、藩の爲にも盡してゐるんだからな。』

龍馬は、内心窃かにこんな風に自負してゐるのである。

震天丸が下ノ關に着いて、龍馬が阿彌陀寺のお龍たちの宿に行くと、今は一緒にくらしてゐる妹の君江と飛び出して来て歡んだ。

おかへりなさい。千屋さんは、御一緒ぢやなかつたの？ あら、君江ちゃん可哀想ぢやありませんか。』

お龍は、妹の爲に、菅野覺兵衛と改めてゐる千屋寅之助のことをいつて不平だつた。千屋と君江とは、既に婚約の間柄になつてゐるのであつた。

『それは、どうも相すみません。だが、さうは行かなかつたのだよ。わしも、乗つて来た船で直ぐ出發しなければならぬのだから……』

龍馬は、かういひわけして、長崎みやげの西洋白粉などを二人に與へ、

『君江さんも、いよ／＼益々美しくなつて来たね。もうお嫁さんになれるぢやないか。』と、君江の肩を叩いていつた。

狂喜して燥いであたお龍は、かへつたかと思ふと、直ぐまた別れなければならぬ短い逢ふ瀬に

が、つかりして悄げかへつてゐるのであつた。

龍馬は、長崎で起つた突發事件のあらましを語り、京都の模様から、今度は途中高知へ銃器彈藥を届ける役目を帯びてゐるので、公儀の手前愚圖々々して居れないことを説明し、

『今にゆつくりかへることが出来るよ。いや、一段落つけば、坂本龍馬は、才谷梅太郎といふ商人になつてしまふよ。やがて、お前たちをも一度は西洋へ連れて行つてやるつもりだから、あてにして待つてお出でよ。アハハ……』

と、うれしがるやうなことばかりを並べたてた。

お龍にも、うれしいことであつたが、

『だつて、あちらでは、いくさが起りさうだといふぢやありませんか。』

と、氣遣はしげに顔をしかめた。

『いくさはあるかも知れん。しかし、わしは、懸命になつて食ひとめようとしてゐるんだ。』

『それなら安心だけれど……。わたし、この間、高杉のおうのさんをお悔みがてら見舞つたの。

さうすると、おうのさんは、いくさをして、徳川の天下をひつくりかへさなければ、駄目だと尼

さんの癖に大變な權幕でしたわ。』

『長州派だからな。いや、土州にも、そんなのが多くなつた。』

『あなたは、い、く、さ、に反対するのでせう？』

『反対だつたらどうなんだい？』

『い、え、京都や、伏見の方でい、く、さ、が始まるのだつたら、わたしもついて行きますわ。とても、こんなところで安閑として居られないんですもの。ねえ、君江ちゃん！』

お龍は、妹に加勢を求めた。

君江は、きれいに結びあげて蝶々髻の頭を、簪の房と一緒に振りながら、にっこりとしてうなづいた。まるで、匂やかな花びらのやうに初々しく美しくかつた。

『大丈夫！ そんな心配は御無用です。温和しく二人で待つてゐなさい。お母さんも今のうちによび寄せてあげよう。太一郎君に送つて来させるよ。』

龍馬は、細かな心遣ひを見せた。

實は、今度龍馬は、千屋の菅野覺兵衛や、中島作太郎や、陸奥源次郎を連れてゐるので、せめて、千屋だけでも上陸させてやりたかつた。しかし、千屋には、重要な任務があつた。

それと、もう一つは、上陸早々ばかり伊藤俊輔に出會ひ、いろ／＼話をきいたからでもあつ

た。その時、黒烟をあげて出て行く船があるので、伊藤にあればどこの船かと問ふと、薩摩の船で、大久保市蔵が乗つてゐて國にかへるところだと答へ、薩長は、既に武力討幕の策を定めたといつた。どうしてかぎつめたのか、伊藤は、

『貴藩で、若し、ライフル銃が御不用であつたら降ろして行つて下さらぬか。』

と、皮肉とも、揶揄ともとればとれるやうなことをいつた。

『はい、海援隊は貿易商でござんすから、御註文とあれば、おひきうけもいたしませうが、今度の品は賣約済みのものでござんすから、お氣の毒さまながら、さうは参りかねます。』

龍馬は、負けてゐないで、かう、戯談でやり返したのであつた。

象二郎は、既に容堂公を口説き落し、乾退助等の急進派を排し大政奉還についての建白書を懐中して上洛してゐる筈なので、伊藤の話などをきくと、龍馬は、一層、先を急ぐ氣持になつたのであつた。

お龍と君江は、どうしてもきかないで、埠頭まで見送つて来た。やがて、龍馬を乗せた震天丸は、號笛の消魂しい響きを轟かせて動き出した。

その時、龍馬がはら／＼してゐた千屋は、命令通り、他に便船を求めて、ライフル銃二百挺だ

けを大阪へ届ける爲に直航した後だったので、ほつとした。それは、時機の切迫に備へる爲に、速かに京阪の同志に兵器を配給する考へからであつた。いつまでも手を振つて別れを惜んでゐるお龍たちに、そんなことが分る筈はなかつた。況んや、これが龍馬と永遠の別れにならうとは知る由もなかつた。

震天丸は、豊後水道を南にとり、浦戸についたのは四日目であつた。龍馬は、反對派の眼を避けて種崎の中城といふ民家に潜み、一緒にかへつた岡内俊太郎の斡旋で、一夜松ヶ鼻の旗亭で藩の有力者と密會し、回漕して來た兵器の類をすつかりで買ひあげさせることに話をまとめ、いろいろと形勢を訊いた。

龍馬は、どうしても一度兄權平や、姉乙女の顔が見て行きたくなつた。で、危険を冒して夜陰にこつそりと、本町のなつかしいわが家の閨を跨いだのである。

家人達は、まるで、死んだものが生きてかへつたやうに歡んだが、何事も大びらには出来なかつた。

『龍馬さん！ お前はゑらいものになつてくれたのう。今ちや、天下の坂本さまぢやないか。わたしは、こんなうれしいことはないよ。もう死んでも本望ぢやぞな。この上は、嫁のお龍さん

に會ひたいばかりよ。』

乙女は、龍馬の手をとつて、うれし泣きに泣き崩れた。

龍馬も、肉親の温い情愛に浸つて、久しぶりで涙を呑んだ。

しかし、さうしてゐるうちにも、大石彌太郎や池知退藏などが忍んで訪ねて來たので、暫しの一家團樂をすらしむことが出来なかつた。

『……まだ、藩論が決せぬ始末でな。乾退助は、西郷吉之助から一報あり次第兵を率ゐて中原に飛び出すのだと力んで居るし、過激の若い連中は、いつそ、震天丸を奪ひとつて、同志一統脱藩して上京してはといきまいて居るし……』

二人は、交々訴へた。

『今、薩長と一緒にやらなけりや、土佐は、まるで焼跡の釘拾ひ同様になりはせぬか。』

大石が、憂はしさうにいつて、龍馬の腹を探らうとした。

『暫らく落ちついてゐてくれ給へ。わしは速かに上京して形勢を洞察して善處するからな。平和といふも、武力といふも、所詮は、同じ目的の爲なんだ。わしにしても、まさかの時には、干戈に訴へるだけの決心はついとぞ。今度の兵器回漕によつても分つて貰へるぢやらう。』

龍馬は、かういつて極力鎮撫に努めたのであつた。

祕密のことなので、兄や姉も、龍馬の出て行く時には見送ることも出来なかつた。これ又お龍と同様やがて陥るべき恐ろしい運命を豫知することが出来よう筈はなかつた。龍馬も、暇にうつる人の面影も、ふるさとの山川も、これが見納めだなど、夢にも思はなかつたらう。

途中の船内で、龍馬は、事務係の同志上田楠次に、石炭を積めるだけ積んでおくやうに頼んだ。最悪の場合は、海援隊を率ゐて起つ爲の用意であつた。

惑星殞つ

京都の形勢は、いよ／＼穩かでなかつた。

朝廷にあつては岩倉具視、薩州にあつては西郷、大久保、長州にあつては、木戸、廣澤、土州にあつては乾、小笠原、——これと氣脈を通じて劃策してゐる中岡慎太郎は、白川村の陸援隊本部に、各藩多數の浪士を收容し、薩州の兵學家鈴木武五郎を招いて、武力討幕の爲に毎日のやうに鍊武をやつてゐる、庭内の高張や、武器などの備へは仰々しいものであつた。

その間にあつて、後藤象二郎は、藝州の辻將曹を語らひ、大政奉還の建白論一本槍で闘つてゐ

た。既に容堂公の命をうけて、福岡藤次と共に關老坂倉勝靜の役宅を訪れ建白書二通を呈出してゐるのであつた。これは、いふまでもなく、龍馬の『船中八策』を骨子とした王政復古、大政奉還、庶政一新の大經綸であつた。七百年來の武門政治を刃に斬りして改革しようといふのだから、將軍慶喜を始め、幕閣に於ては、既に觀念しながらも、いざとなれば、容易に決するわけのものではなかつた。

龍馬の奔走も一方ならぬものがあつた。前の宿である材木商の酢屋は幕吏が眼をつけてゐるといふので、ひそかに河原町三條下ル醬油屋近江屋新助の家に移り、寢食を忘れて奔走してゐるのであつた。

とうとう、その日——十月十三日は訪れた。この日は、いよ／＼在京四十藩の重臣が二條城に集り、將軍自ら建白について諮問することになつたのである。

龍馬は、登城前の象二郎に鞭撻の書面を贈りつけて最後の覺悟を促し、自分は宿にゐて海援隊の同志などと結果如何にと手に汗を握つて待ち構へてゐたのである。

緊張と、不安と、焦燥の幾時間かがつゞいた。

夜になつて、やつと象二郎からの使者が書状をもつてやつて來ると、一同は、わつと叫んで寄

つて来た。龍馬が、慎重にひろげる書面の上に、みんなの顔が重り合つた。

唯今下城今日之趣不取敢申上候大樹公政權を朝廷に歸すの號令を示せり、此事を明日奏聞、明後日參内勅許を得て直接政事堂を假に設け上院下院を創業する事に運び、實に千載之一遇天下萬姓大慶不過之、此段不取敢奉申上候勿々頓首

十月十三日

後藤象二郎

才谷梅太郎様

龍馬は、讀み終つて、あまりに天下の一大事が無難作に成就したのが、夢のやうに思はれ、茫然となつてしまつた。

一同の間には期せずして歡呼と拍手が起つたが、忽ちにシーンと靜肅にかへつてしまつた。感激を通り越して、感動に押しつぶされてしまつた形である。

『あゝ、よくぞ慶喜公は御決心がついた。さすがは日本人ぢや。わしは、慶喜公の忠誠と公明に對しては頭を下げる。——このやうな人の爲なら一命を捧げて敢て悔ぬない、勝麟太郎先生も、どのやうに歡ばれるか知れん。』

龍馬は、涙含んでゐた。そして、一同を見廻し、

『しかし、わしは、これでいゝといふのぢやない。新政府創立案についてはいろ／＼考へをもつてゐる。——おい、岡本！ おんしは、わしと一緒に福井へ行つてくれんか。』

と、岡本謙三郎に向つて叫んだ。

『は……？ 何用で行くのですか。』

『何に、三岡八郎（後の由利公正）をひつ張り出しに行くのぢやよ。新政府の財政策を確立せんけりやならんが、今日では三岡先生を措いては他に適材がないからなア。わしは、あの仁の財政經濟の意見をきいて、かねてから感服しとるんぢや。』

一同は、現實の變化に即應して働く龍馬の頭腦の鋭敏で奔放なものにはすつかり敬服してしまつて、言葉も出なかつた。

『は、お供いたませう！』

岡本は、元氣よく答へた。

要は、朝威を張つて人民を信服せしめ、信用の基礎として金札を發行するなど、國家の財政の安定を急務とすることを、龍馬は、夙に痛感してゐたのであつた。

翌日、討幕の密勅が薩長有志の運動によつて兩藩に下されたが、將軍が政權の返上を宣した以上、實行の名分がたゞないわけなので、手ぐすねひいて待つてゐた武力討幕派は、ここもと立ちすくみの形になつてしまつた。

一時は、後藤象二郎や辻將曹を刺さうとまで力んでゐた位だから、かうなると中岡の失望が思ひやられたが、龍馬は、もうどん／＼先々のことに考へを進めてゐたので、一日も早く、越前へ出かけようと思つてゐると、氣がゆるんだせいとか、風邪をひいてしまつた。それに、だん／＼冬近くなり寒さが加はつたので、眞綿の胴着に舶來絹の締入を重ね、黒羽二重の羽織をひつけてゐたが、それでも、ぞく／＼する程だつた。

大政奉還に伴ふ幕府の没落を怨む見廻り組や、新選組がつけねらつてゐるといふ噂なので、宿の主人新助は、龍馬の爲に裏庭の土蔵にかくれるやうにと密室をこしらへ、萬一の場合は、梯子傳ひに裏手の誓願寺へ逃げのびる準備までしてくれたが、龍馬は、案外呑氣で、それを別に頼みにもしてゐなかつた。

中岡の會、桑討伐論は、なか／＼納らなかつた。だから、いつ何時中岡の陸援隊と新選組が衝突するか知れない危険があつた。龍馬も、心配のあまりわざ／＼白川屋敷を訪ねて、

『石川！ 何もこつちから喧嘩を賣らなくとも、向ふから買ふて來る時でいゝぢやないか。どうで無事ですむまい。まア、形勢を觀ながら陰忍するのだよ。』

と、慰めたことがあつた。

それに對して、中岡は、

『お、しんは才子ぢやよ。』

と、一語いつたま／＼つゝんとしてしまつた。

そんなこともあつたので、二人の意見の對立は、なか／＼融和しさうに思はれなかつた。

ところが、十五日になると、中岡は、ふらりと龍馬を訪ねて來た。中岡は、永く石川誠之助と變名してゐたが、陸援隊長としては、横山勘藏の假名を使つてゐるのである。だが、一朝、事去つたかの感のある今日では、横山隊長も、いつも程の元氣はなかつた。

龍馬は、相變らず厚着をして、鼻をくす／＼はせながら母屋の二階の奥の間にゐた。中岡は、まだ幕府の出様は油断ならぬといつて、ます／＼武備を整へてゐると聞いてゐるので、龍馬は、

これは、ちよつと面倒だなと思つた。
だが、會つて見ると、頻りに龍馬の健康に注意したりして優しい言葉をかけてくれる。どうも、いつもの中岡とは違つてゐるやうな気がする。

『今朝、宮川助五郎の一件で二本松の薩摩屋敷へ西郷君を訪ねたよ。矢張、わしのところへかくまつておくことはよくないからのう。しかし、どうかなりさうぢや。』

中岡は、ほつとしたやうにいつた。

『さうか、それはよかつた。土州藩の不名誉ぢやからのう。』

龍馬は、調子を合はせて、

『いや、おんしは、わしと刺し違へるつもりで來たのかと思つたよ。ハハ……』

龍馬は、さびしく笑つた。

宮川助五郎といふのは、同じく土州藩士で、かつての過激派五十人組の一人で、中岡も、その仲間であつた。ところが、宮川は『朝敵長州』など、書いた三條大橋の制札斬事件で見廻り組に捕へられたが、今度、守護職から引渡されることになつた。すると土州の重役は、『土佐には左様の人物無之』といつた返辭をしたので、中岡等が憤慨して白川屋敷へひきとつたのである。そ

れは、龍馬にも相談したところであつた。

『お互ひに随分、喧嘩もして來たが、かうして平氣で會へるのは、矢張、古馴染みのせいだらうな。』

中岡も、いやにしんみりしてゐる。

『しかし、本當の仕事はこれからぢやぞ。』

『さうぢや。最後の仕上げは仲好くしてやらうよ。』

『中岡！ わしはな、夜中に眼がさめた時など、ひよいとおれを牢屋へぶち込んでくれるものがあるといふなと思ふことがあるんだ。』

『妙なことをいふな。そりや、しんの疲れぢやないかのう。さすがの龍馬先生も……』

『一度、手も足も心も自由にならぬやうに縛つて貰ひたい氣持なんぢや。』

『あんまり、これまで自由にあばれよつたからぢやらう。ちと休めよ。ハハハ……』

中岡は、ちつと風邪變れの見える龍馬の顔をうち眺めながらつぶやいた。

そこへ、岡本謙三郎が、出入りの本屋菊屋の悴の峰吉といふ少年をつれてやつて來た。

『お、いゝところへ來てくれたのう。峰吉！ 一つ走り鳥新へ軍鶏しんこを買ひに行つてくれんか。』

寒いから、今夜はしやも鍋をつゝいて飯を食はう。』

『それは、何よりの御馳走ぢや。』

中岡も、賛成した。

『おゝ寒い！ いやに底冷えがするぢやないか。』

龍馬は、いひながら峰吉に財布から出した金を渡し、序でに階段口の先の間で揚子削りをしてゐる僕の藤吉に飯炊きなどいひつけておくやうに頼んだ。藤吉は、雲井龍といつた相撲取上りで、先斗町で出前持などしてゐたのを長岡謙吉が拾ひあげて來た忠實で善良な若者であつた。

長岡がそわ／＼と一緒に出かけようとする時、

『長岡は例の龜田行きか。そりや、しやもよりはいゝぢやらうよ。ハハハ……』

龍馬は、逃げるやうにして行く長岡を冷かした。賣藥商龜田の娘お高と長岡が懇ろな仲になつてゐることが評判になつてゐたので、ちよいとからかつて見たのである。

一同の間にとつと笑ひ聲が起つた。

『坂本！ 白川の屋敷へ來てゐてはどうか。』

中岡は、二人きりになると、心からの親情をこめていつた。

『ありがたう。しかし、わしは、この方が氣樂でな。』

龍馬は、鼻汗をかみながらいつた。

『ゆつくりと論がして見たいんだが……』

中岡は、何か胸にあるらしい調子であつた。

そこへ、藤吉がのつし／＼と名札を手にして、來客を知らせに來た。十津川の山田五郎右衛門なる者だといふ。二人は、さつきつけたばかりの行燈の灯で名札を見てゐたが、別に怪しいとも思はなかつた。藤吉は、ひきかへし階段を降りかけた時、過つて踏み外してもしたのか異様の物音をたてた。

『おい、相撲さん、ぼたえな。』

龍馬は、一語投げつけた。騒ぐなといふお國言葉であつた。

それは、襲撃に來た刺客が、藤吉をばつさり斬りさげた音であつたのだ。間髪を容れず、二人の刺客が、疾風の如く躍り込んで來た。階段を挟んで二間づゝあるその一番奥の八疊である。

一人は、馬鹿に小手の利く奴で、あツといふ間もなく、中岡は後腦をやられ、龍馬は、前額を横に拂はれてゐた。敵が『こなくそ』といつたのを聞いた。龍馬は、床の間の吉行二尺二寸をと

らうとするところを、又もや耳をかすめて、肩頭深く斬り込まれた。つゞいて後の一人が躍り込んで来た。

中岡は、深手に屈せず、刀をとあせつたが、屏風の後ろでとれぬので、田中謙助から貰つた刃渡り一尺許りの信國の脇差用の短刀をぬいたが敵の腰を突いたのみで、忽ち、數創をうけてばつたり倒れてしまった。

龍馬は、梨子割にやられ、眼に血が流れ込み、つゞいて降りかゝる三の太刀を、鞘のままで發矢と受けとめたが、鐙が天井を突き破つた。

『おい、石川、刀はないか！』

龍馬は、叫びながら、がつくり血の海の中に倒れてしまった。無残にも額から脳髓が噴き出してゐた。

刺客が、ひきあげ際に、中岡の腰をひと突きをぐつて行つた。それで、ふつと息を吹き返したが、十一ヶ所の重傷では、とても起きあがれなかつた。

龍馬は、だん／＼と正氣づき、中岡に向つて、何かいつた。それから、鞘ははずけ、中味が三寸ばかり光つて見える刀をやつとぬいて、行燈の光に照らして見てゐたが、『腦をやられたから

駄目だ！』とつぶやきながら、次ぎの室へ幽霊のやうに泳いで行つたかと思ふと、階段口でどたりと倒れてしまつた。

中岡は、懸命になつて起き上り、屋根の物干臺へ這ひ出て人を呼んだが、てんで答へがないので、北隣りの屋上まで這ひずつて行き、それつきり動けなくなつてしまつた。

家人の返事が無かつたのは、無理もないことで、主人の新助は、二階の騒ぎをそれと氣づくとき、妻子をかくれさせ、表てには見張りがあるもので、自分は、裏口から飛び出し、土州屋敷へと一散に走つたのであつた。

しやもの肉を買つて來た峰吉は、慘憺たる現場に、びつくり仰天して、裸馬に飛びのつて、白川の陸援隊へと向つたのであつた。

急報によつて、同志は續々駆けつけたが、龍馬は、既に絆切れて居り、中岡は虫の息だつた。

しかし、中岡は、だん／＼と元氣づき、岩倉卿に王政復古のことをお頼みするなどと傳言したり、好きな焼飯を食べたいといつて、うまさうにとつさり食べたりした。

階段でやられた藤吉は、六ヶ所の傷だつた。暫らく息だけは通つてゐたが、醫師川村榮信の手當の甲斐もなく、翌日の夕方に死んだ。中岡は、不思議にしつかりしてゐて、いろ／＼話したど

してゐたが、傷が後頭部の脳髓にふれてゐたので吐き氣が出て、翌々日の夕方にととう息が消えた。

海援隊士としては、白峰駿馬と、陸奥源次郎とが、いち早くかけつけたが、臨終の間には合はなかつた。同志の激昂と、隊士の痛憤の中に通夜が営まれ、遺骸の始末がなされた。

天昏く、細雨さへ降り出した十八日の晝八時(午後二時)に三つの柩が、肅々と東山靈山に向つた。沿道の警戒には、ピストルを携帯したものがあつたなど物々しく、殺氣がたちこめてゐた。

坂本龍馬は三十三歳、中岡慎太郎は三十歳、藤吉は二十五歳であつた。坂本、中岡二人の墓標の文字は、木戸準一郎が筆を揮つた。

下ノ關のお龍の許に凶報が齎らされたのは、京都からではなくて、長崎の海援隊の浦田軍次郎がやつて来て、三吉慎蔵に知らせ、それから分つたのである。

さすがに氣丈なお龍も、君江と抱き合つて泣き崩れた。しかし、龍馬は、彼女の心にまさくと生きてゐた。いつか、飄然として歸つて来るやうな姿さへ眼先にちらついてゐた。

三吉は、浦田から聞いた長崎海援隊の士が續々と急變に駈け上らうとしてゐる話をして、屹度仇討ちはしてくれるといつて慰めた。

お龍の頭脳には、ふつと尼僧になつた高杉の愛人おうのの姿が浮んで来た。しかし、自分は、そんな心持にはなれなかつた。

三吉の好意で、一旦、お龍たちはひきとられたが、やがて、長州の同志の相談によつて高知の坂本家へ送られることに定つた。

刺客は何者だか見當がつかなくつたが、現場にのこされた蠟色の鞆を新選組のものだと元その一員であつた禁裏御陵衛士の伊東甲子太郎がいふので、新選組を後押ししたといふ噂の紀州藩の三浦休太郎(安)を陸援隊と海援隊が十津川の中井庄五郎といふ劍客と共に十二三人で襲つたが双方殺傷して目的を遂げ得なかつた。

ところが、ずつと後になつて、刺客は見廻り組の佐々木唯三郎の率ゐた渡邊吉太郎、高橋安次郎、桂隼之助、土肥仲藏、櫻井大三郎、今井信郎等七人のやつたことが明らかになつた。それは、五稜閣の幕軍が降服した時、その中に今井信郎がゐる取調べによつて明白したのである。今井は旗本の士で小太刀の名人だつたが、その時は唯命令によつて行き張番をさせられただけで何事も

知つてゐなかつたとの口供であつた。しかし、今井はずつと生き長らへてゐて、實は、あの時、坂本、中岡を斬つたのは自分一人であつたと前言を翻へすやうになつた。前後どちらが眞であつたか、こゝでは判断を加へない。今井は、キリスト教信者となり、餘生を静岡縣の田舎で送つて大正八年、七十九歳で天壽を終へた。政治家の今井建彦は子息に當る。

龍馬の妻お龍は、不幸にも轉々として數奇の生涯を送つたが明治三十九年に六十六歳で、横須賀在のお寺で病歿した。畏くも、皇后陛下（照憲皇太后）には、死の前に香川皇宮太夫にお思召しをお授け遊ばしたのであつた。

明治三十七年、日露戦争が勃發した時、ある夜、葉山御用邸にお在した 皇后陛下のお夢枕に坂本龍馬が現はれて、何か奏上したので、陛下には、忠誠の心を嘉せられ、お龍の病床を香川敬三が御手元金と、お見舞の品を捧げて訪ねたのも、全く、龍馬がお夢枕に現はれたためであつた。坂本龍馬の魂は死して尙、皇軍の勝利を祈り、海軍を護つてゐたのであらう。（終）

昭和十七年十一月二十日 初版印刷
昭和十七年十二月五日 初版發行

出文協承認ア二五〇二五號

（五、〇〇〇部） 定價 一圓五〇錢

著者 水守 龜之助

發行者 水守 龜之助

東京市小石川區水道端一ノ二六

印刷所 小泉印刷所

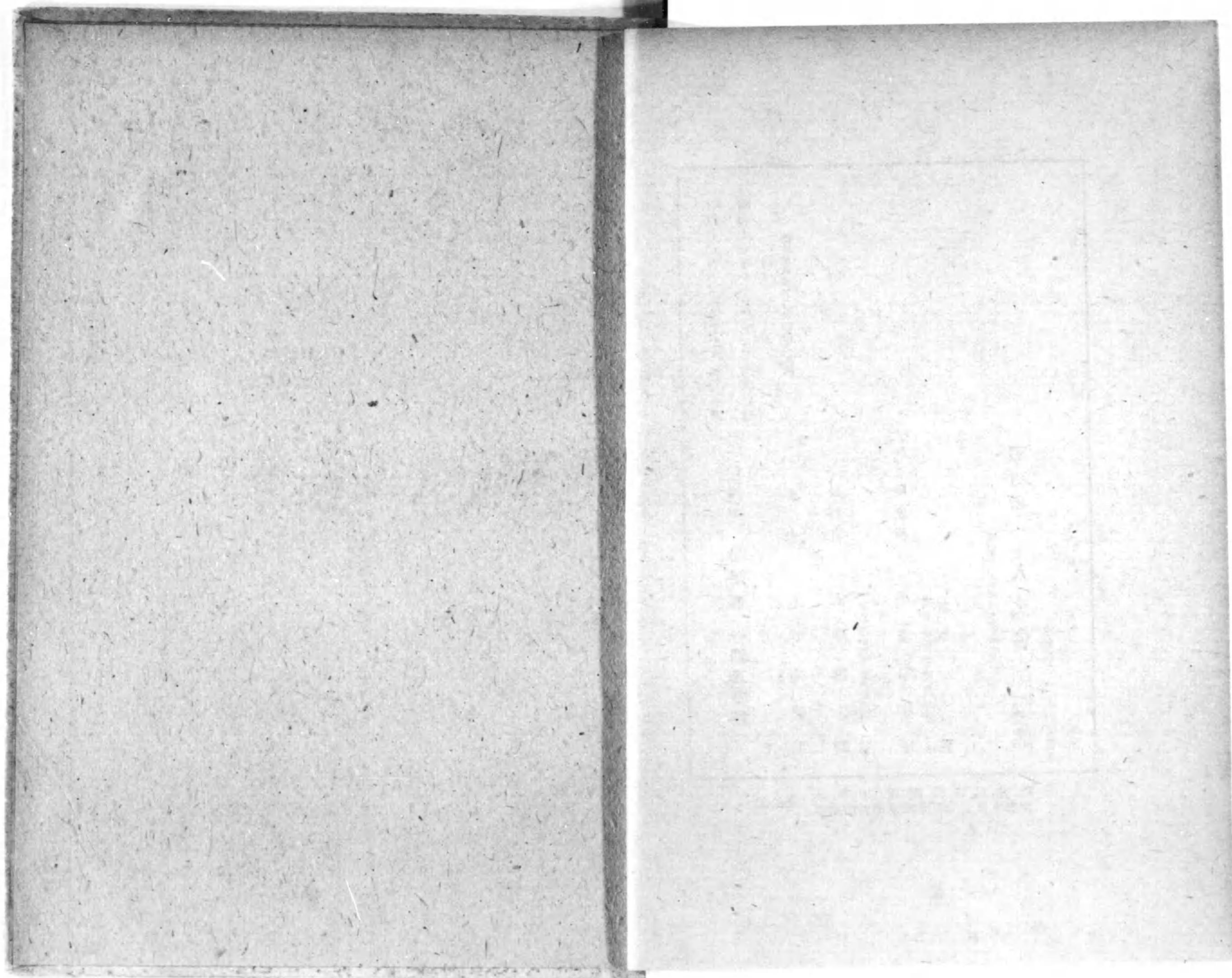
東京市小石川區柳町二四
東 東 一三〇五

東京市小石川區水道端一ノ二六

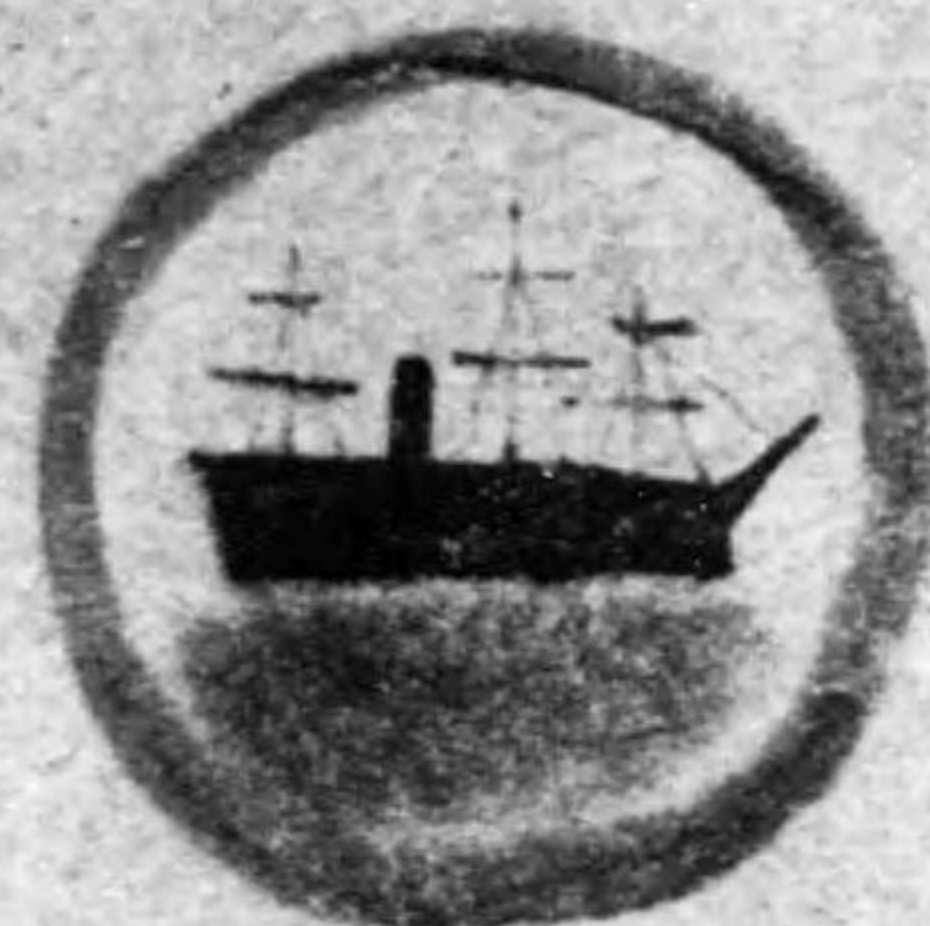
發行所 人文會出版部

（會員番號一二〇四七番）

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地



1225-33



終